

THE Language Teacher

全国語学教育学会

VOL. XII, NO. 8

JULY 1988

THE JAPAN
ASSOCIATION OF
LANGUAGE TEACHERS ¥350

JALT

昭和五十四年四月十一日第一種郵便物認可
第十一卷第八号 昭和六十二年七月一日発行(毎月一日発行)



Teaching and
Learning Japanese
as a Second
Language

From the authors of Side By Side...



ENGLISH FOR COMMUNICATION

Books 1, 2, 3 or Split-editions 1A, 1B, 2A, 2B, 3A, 3B

Steven J. Molinsky & Bill Bliss

SMART

Based on the world's first truly "tri-dimensional" syllabus!
Functions, Topics and Grammar integrated in every lesson!
Carefully sequenced and spiraled for maximum learning!

FUN

Lively, believable conversations leading to free role plays!
Idiomatic expressions in concrete, realistic contexts!
Thousands of imaginative, humorous illustrations!

Go Ahead... Make Our Day! Ask Us For A Copy! *

*Please specify full or split-edition, and number.

HARRY T. JENNINGS

NAOTO ONO

PHR

PRENTICE HALL REGENTS

Prentice Hall / Regents of Japan

Jochi Kojimachi Bldg., 3F, 6-1-25 Kojimachi, Chiyodo-ku, Tokyo 102, JAPAN

東京都千代田区麹町6-1-25 上智ビル3階

Telephone: (03)23B-1050 Fax: (03)237-1460 Telex: 650-295-8590

(For telexes from outside U.S., precede with U.S. Access Code 23 from most countries.)

this month. . .

はじめに	4
(Introduction to Special Issue on Learning and Teaching Japanese -- Naoko Aoki)	
もう一つの認知——教育の中で伝えられるもの：小出 慶	5
(Another Aspect of Cognition: Language Teaching Communicates More Than the Language -- Keiichi Koide)	
第二言語習得におけるストラテジーの研究例：吉田 研作	9
(Selected Studies in L2 Strategies Kensaku Yoshida)	
インタビュー——サイレント・ウェイの考え方：アラード・房子、小出 慶	15
(What's Behind the Silence: The Underlying Principles of the Silent Way - Fusako Allard with Keiichi Koide)	
アリソン・ミラー、サジェストペディアを語る：アリソン・ミラー、青木 直子	22
(Interview: Alison Miller on Suggestopedia Naoko Aoki)	
Developing Self-Instructional Materials for JSL Learners - Naoko Aoki	29
Discreet Correction and Dictation - Mario Rinvulcri	31
JALT News	37
JALT '88 - Conference Update	38
学習者のニーズに見合う応用練習	39
(Pattern Practice That Meets Students' Needs: Teaching Indo-Chinese Refugees Japanese Conditional Verb Forms - Midori Masuda)	
JALT UnderCover	40
Chapter Presentation Reports	49
Bulletin Board	52
Meetings	54
Positions	59
COVER: Hatsuyo Kawabe, The University of Tsukuba	

THE Language Teacher

VOL. XII, NO. 8

JULY 1988

The Language Teacher is the monthly publication of The Japan Association of Language Teachers (*Zenkoku Gogakku Kyoiku Gakkai*), a nonprofit organization of concerned language teachers interested in promoting more effective language learning and teaching. JALT welcomes new members of any nationality, regardless of the language taught.

The Language Teachers editors are interested in articles of not more than 3,000 words in English (24 sheets of *400-ji genko yoshi* in Japanese) concerned with all aspects of foreign language teaching and learning, particularly with relevance to Japan. They also welcome book reviews. Please contact the appropriate editor for guidelines, or refer to the January issue of this volume. Employer-placed position announcements are published free of charge; position announcements do not indicate endorsement of the institution by JALT. It is the policy of the JALT Executive Committee that no positions-wanted announcements be printed.

All announcements, or contributions to *The Language Teacher* must be received by no later than the first of the month preceding desired publication. All copy must be typed, double-spaced, on A4-size paper, edited in pencil, and sent to the appropriate editor

Editors: Eloise Pearson (03-351-8013, Fax: 03-351-4596) and Ann Chenoweth (03-828-7406, Fax: 03-822-3438), Suga-cho 8-banchi, Shinjuku-ku, Tokyo 160

Book Reviews: Jim Swan, Aoyama 8-122, Nara 630; (0742) 263498.

My Share: Louis Levi, Horinouchi 1-275, Suginami-ku, Tokyo 166; (03) 318-8397.

Chapter Reports: Ann Chenoweth, Yamato Heights 2-102, 7-17-16 Yanaka, Taito-ku, Tokyo 110; (03) 828-7406, Fax: (03) 8223438.

Announcements/Positions: Jack Yohay, 1-11 1 Momoyama Yogoro-cho, Fushimi-ku, Kyoto 612; (075) 622-1370.

Japanese Language: Masayo Yamamoto

日本語の原稿の送り先:

630 奈良市青山8 - 122 山本雅代

Advertising/Associate Member Inquiries: JALT Central Office

Proofreading: Jack Yohay and Tamara Swenson

Typesetting/Layout: S.U. Press, Kobe/Kizaga

Publications Chairperson: Virginia LoCastro, The University of Tsukuba, Foreign Scholars' Residence 304, Amakubo 2-1-1, Tsukuba-shi, Ibaraki 305; (0298) 52-1848

JALT Journal Co-Editors: Charles Wordell and Richard Cauldwell, 18-2-302 Sumiyoshidai, Higashinada-ku, Kobe 6.58

JALT Central Office: Yumi Nakamura, c/o Kyoto English Center, Sumitomo Seimei Bldg., Shijo-Karasuma Nishi-iru, Shimogyo-ku, Kyoto 600; (075) 221-2376

特集 日本語を学ぶ

この特集の企画は、1987年の JALT 国際大会における日本語教育に関するコロキウムから生まれた。それぞれ異なった領域を専門とする 4 人の発表者の意見に共通していたのは、日本語教育は、言葉を学ぶとき学習者の頭の中では何が起こっているのかを考えるべき時にきているということであった。

この号で、小出慶一氏は言語の学習におけるメタ認知の役割について論じている。吉田研作氏は英語教育における第二言語習得・学習のストラテジーの研究を紹介している。また、アラード房子氏は小出氏のインタビューに答えて、サイレント・ウェイの背景となっている言語観、教育観を語っている。

コロキウムの発表者に加えて、アリソン・ミラー氏は青木によるインタビューの中で、サジェストペディアの原理について語っている。さらに、日本語を学ぶ他言語教育に携わる人たちのために、青木は学習者が作成する自己学習のための教材の例を紹介している。

書評欄には、日本語教育の関連領域のいくつかを紹介するために、日本語教育関係の本と併せて、英語教育、教育学、認知科学についての本も取り上げられている。

「マイ・シェア」では、増田みどり氏が文型中心のシラバスに基づくコースで、学習者のコミュニケーションのためのニーズを満足させる工夫について報告している。

現在、日本語教育は多くの人の関心を集め、マスコミでもたびたび取り上げられている。一昔前に比べれば、陽の当たる職業になったということであろうが、我々は、それを喜んでばかりいてはいけないと思う。日本語を学ぶ人たちの人格を尊重し、その多様なニーズを満足させるための、効率のよい学習経験を提供するために、我々の知らなければならないことは、まだまだたくさんあるはずである。この特集は、日本語教育がどのような領域を視野に取めなければならないか、その可能性を示したものにすぎない。ここから議論の発展することを望みたい。

ゲスト・エディター
産業能率短期大学
青木直子

Special Issue on TEACHING AND LEARNING JAPANESE AS A SECOND LANGUAGE

The seed of this issue was the JALT '87 colloquium on Teaching Japanese as a Foreign/Second Language. Despite the different views of language, learning, and language teaching, each of the four speakers agreed that it is time 'teaching Japanese' should take into consideration what is happening inside learners' minds.

In this issue, Keiichi Koide discusses the role of meta-cognition in language learning. Kensaku Yoshida presents an introduction to research in second language acquisition/learning strategies. In answer to the questions Koide brings up, Fusako Allard unfolds the principles of the Silent Way. Then Alison Miller describes some of the key factors in Suggestopedia, and finally, Naoko Aoki outlines some suggestions for developing self-instructional materials for Japanese language learners.

In the My Share column, Midori Masuda reports a way to overcome the limitations a structure-based course has in meeting learners' communicative needs.

To introduce some of the fields relevant to teaching and learning Japanese, the Undercover section contains reviews of books on ESL, pedagogy and cognitive psychology, as well as ones on JSL.

Each article in Japanese is provided with a fairly substantial abstract in English. My belief is that the mutual flow of information between JSL and other second language teaching will contribute to furthering our insight into the nature of second language learning. This issue is only the beginning of many stepping stones ahead.

*Naoko Aoki, Sanno Junior College
Guest Editor*

も j 一つの認知 —— 教育の中で伝えられるもの

Another Aspect of Cognition: Language Teaching Communicates More Than the Language

by Keiichi Koide, Sangyo Noritsu Tanki Daigaku

産業能率短期大学 小出慶一

1. はじめに

日本語教育に限らず、教育は知識を伝達するものではなく、知識の獲得の仕方を学ばせるものであるべきだと言う議論がこのところ多くみられるようである。例えば、「自己学習」とか「学び方学習」となどという言葉でいわれるものがそれであるし(例えば、波多野, 1980)、言語教育の方では、サイレント・ウェイに代表される考え方がそれである(Gattegno, 1987)。自身で知識獲得のプランを立て、自身を観察・評価しながら知識獲得ができるようにしようというわけである。

また、言語教育の教授法について言えば、訳読法等は前世紀の遺物視され、オーディオリンガル方式も、ともすれば時代遅れの方法と考えられる傾向にあるようである。ところが、どういう方法のもとで学習すれば、より習得が進むかと言うようなこと、つまり、成果ということになると、どれがどうという違いがなかなかはっきりしないのである。大ざっぱな言い方をすれば、どんな方法でもうまくなる人はうまくなるということになってしまふのである。

従って、良心的に言語教育の理論などを書こうとすると、折衷的であることがもっとも現実的である、どの理論も不十分なところがあるし、1つで全てを満足させるような理論はない、教師はそこらへんのところを考え、取捨選択する役割を担うべきであるという言い方にならざるをえないようである。(Brown, D. 1987)。

この2つの現象は一見関係がないようであるが、この2つの事の間にメタ認知という概念を置いてみると、うっすらとその関係が見えてくると思う。

自学自習というのは、学習者が自身の学習について意識的になることを求める。つまり、メタ認知と言う側面を意識的に強化していこうとするものである。

一方、2つ目の問題は、言ってみれば、無意識のうちに使われているメタ認知の問題であると言っていだろう。教授法の折衷主義が蔓延する背景には、学習の現場で、このメタ認知というものがどの様に働いているかという認識を欠いているということがあのではないかとと思われるのである。

この「メタ認知」と言うものの機能を考えようというのがこの稿の目的であるが、この視点が、教授法、学習理論の持っている空隙を幾分なりとも埋めてくれるのではないと思われるのである。

これは、逆に言えば、教育というものの手から、現実

には、いろいろなものが落ちてしまっている、いろいろなものが落ちざるを得ない、ということを示すものでもあり、教育の届きうところを冷静に見直す視点を与えてくれるのではないとも思われる。

2. メタ認知とは何か

「メタ」という接頭辞は、「それ自身についての」というような意味を持っている。とすれば、メタ認知とは、認知それ自身についての認知ということになる。Flavell (1976)の定義に従えば、「その人の認知過程の所産、それに関連したすべて」であり、現在進行中の認知活動について意識を働かせ、その活動を評価したり制御、調整したりする働きということになる。

因みに、認知という言葉は、知識の獲得から利用までを意味する。自分が獲得している知識を基に、外からの情報を取り入れ、外界に関する新しい情報を生成したり蓄えたり、他者へ伝えたりすること。また、この様な情報を使った適切な行為を選択したり、適切な技能を使うための情報収集・処理活動を意味する言葉である。(佐伯, 1981)

メタ認知の機能について、よくあげられるものは次のようなものである。(Flavell, 1976; 佐伯1981)

①メタ認知的目標の自覚ないし意味づけ 課題の目標に対する自覚を中心にした機能である。

課題があったとき、求められているのは何かを念頭に置きながら課題に取り組むとか、他の課題との関連を考えたり、また、一緒に行動する人の認知活動の目的や意義、役割を考えたりすることもここに含まれる。「この問題なら適当に形だけ整えておけばいいんだ。」とか「課題の説明には書いてなかったが、もう少し先の事までやっておけばみんなの役に立つだろうな。」「この仕事はあの人がやるんだろうな。」等というようなものである。

②メタ認知的行為ないしストラテジーの選択 目的達成のためにどういう場合にはどのような方法が有効かなどの判断や認識を意味する。

例えば、「ここで今までの事をまとめておいた方が後のことがやりやすくなるからまとめておこう」とか「これはすぐ忘れても構わないことだから特にメモなど取る必要はないだろう。」というような注意や努力についての自覚も含まれる。

③メタ認知的経験 自分の活動状態をチェックするこ

と。認知状態のレベルについての実感と言ってもよい。例えば、「今日の講義はよく分かった。」とか「今度のやり方の方がうまくいくみたいだ。」というような自分の理解についての状態をチェックすることである。

④メタ認知的知識 自分自身・他者・経験・課題・理解・学習とは何か、などについての知識で、認知活動の達成度や効率と言うものに影響を与える諸要因についての知識である。これは世界知識の一部であり、ある領域内容についての知識と同じように、「知識」として保持されるものである。

例えば、「自分はこういう問題は苦手だ。」「あの人と仕事を一緒にやるのは不愉快だからいやだ。」というようなものである。

これらの機能が実際にどの様に働くのか、例えば、問題解決のために関わってくるメタ認知について、①から④の機能との関係を見てみると、次のようになる(Brown, A. 1978)。

- 1) 自分の能力の限界について予測を立てること。
(これは、④のメタ認知的知識の問題。覚えるのが苦手だと思ったら、メモしたりするのがこれである。)
- 2) 今何が問題なのかを明確にすること。何が分かっていないか、何を持って分かったと考えるかと言うことも大事である。(①の目標設定、④の知識)
- 3) 問題解決の適切な方法に気付いたり、選択したりすること、そして、問題解決に至るまでの予定を立てること。(②のストラテジーの選択)
- 4) 点検すること。問題解決のための複数の活動の各々が目標とずれていいか、手順はいいか点検すること。(③の理解状態のチェック)
- 5) 最後に、実行した結果と目標を考え合わせ、実行しているやり方を続けるか止めるかを判断すること。(②及び③)

このような過程を繰り返しながら解決に至るというわけである。

3. メタ認知的知識について

さて、ここで特に取り上げたいのは、この中のメタ認知的知識である。上にも述べたように、学習の効率や、達成度の設定に大きく影響する要素だからである。

メタ認知的知識の対象となるのは、今あげた通り、認知活動が行われるもの全てに及び得るわけであるが、中でも大事なことは、これが、習得の到達度、効率、更にはものの考え方、物事に対する構えの形成にも影響するということである。

それには次のようなものが含まれる。(Flavell, 1979; 稲垣, 1982)。

①自分自身の可能性についての認知

これはたとえば、「自分は何をやっても駄目な人間なんだ。」とか「体力なら誰にも負けない。」というような自分の能力についての認知である。

よく言われる‘無力感の獲得’というのもこれで、解決できない問題をやり続けることによって、あるいはまた、否定的な評価を与え続けられることによって形成される、自分自身に対する認知の一つである(Abramson et al., 1978)。もちろん逆に、“達成感”が評価や課題の与え方によって形成される可能性もありうる。

②課題あるいは問題の性質についての認知

当面の問題の処理をどの様にしたらいいのか、何をすべきか、あるいは何ををしていいのか、するとしたらどの程度にすべきか、というようなことを考え、判断する、その種の認知がこれである。

例えば、超電導に関心を持ったとしても、全ての人がそのことの探求を始めるわけではない。超電導のような問題は、自分が手を出す分野のものではない、と言う認知が働いているわけである。

また、日本語教育ならできそうだからやってみようかと思うのも、当面の課題、日本語教育という職業が自分にとって、適応可能なものだという認知に基づいているわけである。

③理解ということの認知

何ができるようになったことを「分かった」と言えることと考えるか。数学ならば、速く問題が解けることをもって「分かった」と考えると、言葉だったら、文法が分かることを持って、「理解した」と考えるか、さまざまである。

これは教育に即して言えば、学習のスタイルを決めて行く要因にもなるだろうし、また、すぐに教師との「理解についての理解」の食い違いが障害にもなっていくだろう。

ここまでは、稲垣(1982)等に挙げられている分類であるが、更に付け加えるとすれば、次のようなものもあるだろう。

④学習とは何か

上の「理解」についてどう考えるかと言うのと似てくくるが、学習と言うものをどう考えるかということも、おそらく知識の一部たり得ている。学習内容だけでなく、学習の形態、制度までもを含めた認識があって、外国で勉強するときには乗り越えられるべき問題の一つになるだろう。「学習というものは、教室で、教師の説明を聞くものである。」とか「学習をするのは学校だけで、義務でもあるし、或は、世の中での通りをよくするために通らざるを得ない階段に過ぎない。」などと考える様なことである。

⑤他者との関係

他者との関係をどのように認知しているか、他人は

自分と融和的であるか、対立的であると見るか。

これも、認知の効率とか、問題解決の達成度に大きく影響する要素の一つである。例えば、教師との関係は「三步下がった」関係であるべきなのかとか「教師といえども人格に触れるのは許されない」などと考えるか。

4. メタ認知の形成

それでは、メタ認知はどのように形成されていくのか。日常の行動の中であれ、学校という環境の中であれ、メタ認知は働き得る。その経験を通して、メタ認知の経験が形成されていく。この、経験を通してと言うことが大事な点である。メタ認知の知識は、前述のように、世界知識の一部であるから、歴史の年号を覚えるように、外から知識として与えることができるものである。

しかし経験なしに「注入」された知識というものは、例えば、何かを覚えるときにカテゴリー化して覚えればいいと言うことを教えたとしても、その時はいい結果を生んだとしても、普遍化されない傾向があるようである。また、やり方に関する知識を先に教えられることによって、当面の問題解決ができることになり、表面的には学習が進んだように見えることもあり得るわけであるが、その時に、「やり方は教えてくれるものだ。」「教師の言う通りにやっていればいい。」或は、「教師の言う通りにやらないとまずいのかも知れない。」というように、自発的に問題解決のプランを立てたり、また、要求されたところ以上に好奇心を発揮したりと言うような活動が抑制されてしまう可能性もある。(稲垣, 1982)

ここに「学び方学習」というようなものの一つの危険性がある。

5. メタ認知の働かない時

また、メタ認知に関してよく話題にされることであるが、メタ認知が働かない場合というものがある。

例えば、あるやり方に慣れてしまうと、事情が変化しても、それまでのやり方を続けてしまうというようなときである。これは、信念の問題として同じやり方を続けるというのとは異なる問題である。新たな問題が出てくれば、対処すべき事態にその方法が適切かどうかの判断を、常にするであろうが、事態に対する認識が不十分なため、点検が行われなくなったのである。

これは注意の配置と同じ事で、問題がないと見なししている事態に対しては、メタ認知の働きが弱まるのである。

また、目標が定まらないとき、というのもメタ認知が働きにくい。例えば、日本語学習者に限らず、ただ、手紙を書きなさいと言っても、読み手が誰か、何のために書くのか等が決まらないうちになかなか書けないであろう。書けと言われただけでは、読み手のイメージがなく、自分の行動の目標を設定することができず、手紙を書き上げるまでのプランを立てることができないからである。(伊藤, 1985)

6. おわりに一方法論議の盲点

教育で何を扱うべきかということについて、若干の思潮の変化がある。確かに、教育が、知識を伝達する(だけの)ものではないことも、認めなければならないだろう。これまでの議論の流れから言えば、学習者は、知識の獲得の過程で様々な経験をし、それにとまって、様々なメタ認知の経験を重ねる。そして、そこからメタ認知的知識を獲得し、自己イメージを作り上げたり、問題解決の独自の方法を考案したりしているからである。

しかし、メタ認知の出発点は、なんと言っても、具体的な「もの」への好奇心・興味である。これは、自分自身の知識獲得過程そのものへの興味であろうと、同じ事である。

そして、学習という言葉を、世界知識の獲得過程というふうに広く考えれば、学習の対象は、いわば教科書に書かれた内容領域、予定されたシラバスの範囲に留まるわけではなく、非常に日常的なことで、例えば、教師が学習者をどの様に扱っているか、教室の中で協調的か、時間には正確か、というようなことから、教師自身がどの様な知識の、或は興味の体系を持っているのか、どんな価値観を持っているのか、というようなことまでが、メッセージとして学習者に伝わって行くわけである。

教育の方法論議というものがある、学習はどの様に行われるのか、とか、言葉の習得はどの様に行われるのかなど研究成果を踏まえて、確かに、言語教育の内容は豊かになってきているのだが、一方で、どの一つだけを用いても、旨く行かない、現場では、折衷的にならざるを得ないという現実があるのも事実である。

これには、もちろん言語教育の方法論が未だ成熟していないからと言うことも与っているのだろうが、未成熟の原因の一つがここで述べたメタ認知というものに対する認識の不足にあるのではないかと思うのである。

学習者の学ぶものは、その対象、方法だけではなく、教師からの反応を始め、学習という経験に含まれるすべてのものなのである。どれが大きな比重を占めているかは、この際問題ではなかろう。要はメタ認知のような認知の仕方があること、そこで行われることについてどの様な態度を取るかもメタ認知の対象となるのであること、その様なことを教師側がひとまず認識しておかなければならないと思われるのである。

メタ認知的知識は知識の一部であると同時に、人格の一部でもある。知らないことは恥しくない、という言い方があるが、自分の方法、態度によって知り得なかったことが問題にされたときは、問題の性質は変わる。ことは、かなり敏感なのである。

参考文献

- Abramson, L., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. 1978. Learned Helplessness in Humans: Critique and Reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87:49-74.

- Brown, A. 1978. *Knowing When, Where, and How to Remember: A Problem of Metacognition*. LEA.
(邦訳 湯川良三・石田裕久・『メタ認知』サイエンス社 1984)
- Brown, D. 1987. *Principles of Language Learning and Teaching*. 2nd ed. Prentice-Hall.
- Flavell, J. H. 1976. Metacognitive Aspects of Problem Solving. In L. B. Resnick (ed.), *The Nature of Intelligence*. LEA.
- Flavell, J. H. 1979. Metacognition and Monitoring: A New Area of Cognitive Developmental Inquiry. *American Psychologist*. 34:906-911.
- Gattegno, C. 1987. *The Science of Education*. Educational Solutions.
- 伊藤昌子 1985「手紙文の産出過程」『基礎心理学研究』4:19-26
- 稲垣佳代子 1984「メタ認知とモニタリング」『認知心理学講座4』東京大学出版会
- 佐伯 胖1981「認知・メタ認知」の項『新版 心理学辞典』平凡社
- 波多野誼余夫(編)1980『自己学習能力を育てる』東京大学出版会

Abstract of ANOTHER ASPECT OF COGNITION

The recent trend in language teaching focuses more on learning processes than on language itself. The significance of learner training is often discussed, and eclectic approaches are advocated after unsuccessful efforts to prove the superiority of one approach over another. The author introduces the concept of meta-cognition to clarify what is actually at issue.

Meta-cognition has four functions: 1) meta-cognitive awareness of task objectives, 2) meta-cognitive selection of behavior and strategies, 3) meta-cognitive experience, and 4) meta-cognitive knowledge.

The author claims that of the four functions, meta-cognitive knowledge affects efficiency and achievement of learning the most because the first step toward problem solving is to predict one's potentials and limitations on the basis of meta-cognitive knowledge.

Supplementing the three categories of meta-

cognitive knowledge suggested in Inagaki (1982), the author divides meta-cognitive knowledge into five categories: 1) cognition of one's potentials, 2) cognition of the nature of the task, 3) cognition of the nature of understanding, 4) cognition of the nature of learning, and 5) cognition of one's relationship with others.

In the process of learning a second language, learners also acquire meta-cognitive knowledge which extends far beyond planned syllabuses and the content of textbooks. Teachers play an important role here. Their attitude toward learners, views on understanding and learning, and their value system are among the factors that influence learners' meta-cognitive knowledge.

By taking into consideration a learner's meta-cognition and the teacher's role in forming it, teachers and researchers will be able to gain new insights into learning processes and teaching methodologies.

日本語教育 SIG

東京と仙台の日本語教育 SIG は、2 カ月に 1 回の割合で、ゲスト・スピーカーを招いて、ミーティングを開いています。詳しいことは、下記のコーディネーターにお問い合わせください。

東京 北澤美枝子 03-485-3204

安達幸子 03-788-0884

仙台 神谷京子 022-239-2444



Teaching Japanese SIG

Tokyo and Sendai Teaching Japanese SIGs have meetings with guest speakers every month. Contact the following coordinators for information.

Tokyo: Mieko Kitazawa 03-485-3204

Sachiko Adachi 03-788-0884

Sendai: Kyoko Kamiya 022-239-2444

Special Issues of *The Language Teacher*

1988

August

Team Teaching - Jack Yohay

November

The Learner in Large Classes - Torkil Christensen

December

Publishing - Commercial & Academic

1989

March

Intercultural Communication - Linda Viswat

April

Pragmatics - Bruce Wilkerson

May

Music & Songs - Dale Griffiee

June

The Role of Grammar in the
Teaching of Foreign Languages - Richard Day
July-December (open)

**Please contact the Editors if you would be
interested in guest-editing an issue of The Language
Teacher on a specific topic.**

第二言語習得におけるストラテジーの研究例 Selected Studies in L2 Strategies

by **Kensaku Yoshida, Sophia University**

上智大学 吉田研作

0. 日本語教育と第二言語習得の研究

ここ数年、日本語教育が国内外において盛んになってきている。しかし、日本語教育に携わっている人の中でいわゆる、第二言語関係の研究成果を十分に利用している人、あるいは、その必要性を認識している人は、まだ少ないように思う。事実、日本語関係の言語習得研究で、日本で実施されたものは殆ど見ないのが現実である。

著者は元来英語教育が専門だが、日本語教育がこれほどまでに盛んになってきていることを考えると、現在、英語教育を中心とした、いわゆる、第二言語習得の研究分野で、どのようなことがなされているかを少しは紹介する必要があるのではないかと思うようになった。なお、今回の記事では、できるだけ日本語との関連を持たせる意味で、著者たちが今までに日本人学習者を対象に行なってきた英語習得関係の研究をある程度詳しく述べることにした。

1. 学習者言語の研究

近年、いわゆる学習者言語あるいは、中間言語と呼ばれる分野の研究が盛んになってきている。従来は、第二言語学習者が犯す『誤り』は、母国語の構造が第二言語の構造に転移されるために起こるとされていたのに対して、学習者言語の研究の立場からすると、第二言語学習者には、第二言語学習者なりの独自の言語構造があり、それは客観的な研究の対象となるもので、必ずしも『誤り』と考えることができないということになる（例えば、Dulay, Burt&Krashen, 1982）。そして、このような考え方に基づく研究が盛んに行なわれるようになった結果、学習者が身につけている独自の言語構造というものが、単に言語の構造上の違いのみから生まれるのではなく、学習者一人一人のモチベーション、学習やコミュニケーションの方法（ストラテジー）などに大いに影響されるということが分かってきたのである。

2. コミュニカティブ・モチベーションの重要性

さて、学習者言語を研究していて必ずぶつかる問題がある。それは、第二言語学習者の場合、果たして、学んでいる目標言語のネイティブ・スピーカーと同じレベルの言語のコミュニケーション能力（Canale&Swain, 1980; Canale, 1984; Savignon, 1983ら参照）が身につくのだろうかということである。

例えば、文法的な意味での言語能力について言うならば、Widdowson (1984) は、目標言語の言語能力は、あくまでも一つの『目標』であり、100%身につけるこ

とはできないだろうし、また、その必要もないと言っている。むしろ、言語は本来コミュニケーションのためにあるのだから、それをより効果的に、よりスムーズにするために、学習者自身が必要と思えば、その必要性に応じた文法知識を覚えるだろうと言っている。さらに、Hughes (1983) のような極端な考え方をする人は、いわゆるビジン化現象も、基本的には、学習者のコミュニケーション・ニーズを充足させるものであるならば、それを文法的な形に変える必要はないと言っている。

このように、文法知識よりも何よりも言語のコミュニケーションの道具としての重要性を強調した考え方は、第二言語習得分野のみでなく、母国語習得分野においても大きな影響力を持っている。Clark (1983) は、子どもが大人と同じような文法能力を身につける過程は、子どもが大人とコミュニケーションをしているうちに、それを最も円滑にするには、大人と同じようなコミュニケーションのストラテジーを身につけることが必要であることに気づくところから始まると考えている。つまり、大人とのコミュニケーションをよりスムーズにするために文法を習得するというのである。もちろん、言語習得が全てこのような心理的要因によって決まるというわけではない（例えば、Bowerman, 1982は、人間は元々言語の構造を学ぶべくして学ぶのだから、必然的に文法は身につくと言っているし、Roeper, 1982やPinker, 1984らは、子供は、生まれながらにして既に持っている普遍文法のパラメーターを、実際に生まれ出た言語環境のものにセットして行けばよいと言っている）が、相手との『コミュニケーション』を最も効果的に、スムーズにしたいという願いが文法のような抽象的な言語構造を習得するための最も大きな要因の一つとして考えられていることは、一考に値する（Yoshida, 1985; 1986参照）。

3. 第二言語研究者にとってのストラテジー

さて、たとえモチベーションが基本的には同じでも、言語を習得、あるいは、運用する際、人はそれぞれ独自のストラテジーを使うと言われている。そして、それは、学習者一人一人の学習スタイルや認知スタイル、また、パーソナリティーの違いに由来する（Brown, 1987）と考えられている。

ところで、ストラテジーという用語には二通りの意味がある。一つは、無意識的なもので、主に母国語習得に関わるもの、例えば、The cat chased the mouse という文の最初の名詞が『動作をするもの』で後にくるのが『動作を受けるもの』だとか、最も目立つ音節（アクセント

(cont'd on page 11)

New from LINGUAL HOUSE



...expanding
communicative
skills

by Marc Helgesen
Steven Brown
Thomas Mandeville

- *textbook 136pp
- * cassette (C70X1)
- * teacher's manual

ENGLISH FIRSTHAND PLUS is here!
Building on the successful format and refreshing
approach Of **ENGLISH FIRSTHAND**,
ENGLISH FIRSTHAND PLUS helps students expand
and connect their communicative abilities.

Developing
Communicative
skills...



Please use the coupon below or give us a call.

To: FILMSCAN/LINGUAL HOUSE
Dorumi Yoyogi #1107, 1-57-2 Yoyogi
Shibuya-ku, Tokyo 151
Tel. (03) 320-4170 Fax. (03) 320-5039

Please send me a free inspection copy of

NAME: _____

SCHOOL: _____

ADDRESS: _____



FILMSCAN/LINGUAL HOUSE

Dorumi Yoyogi #1107

1-57-2 Yoyogi Shibuya-ku, Tokyo 151

Telephone (03) 320-4170 Fax. (03) 320-5039

(cont'd from page 9)

が強い音節)の音から覚えるというようなものである(Slobin, 1985参照)。それに対して、主に第二言語習得でストラテジーというのは、第二言語使用者がコミュニケーションの過程で何か問題が起きた時に、それを意識し、さらに、それを意図的に解決しようとして取る方法のことを言うことが多いのである(Faerch&Kaspar, 1983参照)。そこで、学習者一人一人が独自のストラテジーを使うという立場をとると、無意識的、意識的のいかに関わらず、普遍的なストラテジーというものはないということになる。しかし、普遍的なものの存在を確認することは確かに不可能かもしれないが、第二言語習得の研究者たちは、実際に実験を行なうことにより、

(統計的に見て)より一般的な傾向というものを見出そうとしているのである。

さて、ここで、そのような『一般的傾向』を少し紹介しよう。ただし、ここに挙げる例は、学習とコミュニケーションの区別はされていない。というのは、学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジーの違い自体が時としてあいまいになりがちで、同じ一つのストラテジーでも、見方を変えれば学習ストラテジーともコミュニケーション・ストラテジーともとれるものがよくあるからである。また、ここで扱う例は、あくまでも著者自身が興味を持っているものに限られているので、より詳しく色々な分野の研究を見たい人は、Ellis (1985) ; Hatch (1983) ; Hyltenstam&Pienemann (1985) ; Davies, Criper&Howatt (1984) ; McLaughlin (1987)、『英語展望』1985年秋季号などを参照されることを勧める。

4. 発話ストラテジーの例

まず、音声習得の傾向から見てみよう。音声習得は、昔の対照言語学的手法が最も有効に働く分野といわれてきた。

さて、第二言語習得の研究からも、基本的にはこの考え方を支持する結果がでている。例えば、Gatbonton (1978)の拡散モデル(diffusion)によれば、まず、母国語の音韻構造が徐々に目標言語の構造に置き替わっていくとされているし、Eckman (1981)の研究では、一見母国語の影響が見られないような場合でも、よく見ると、その音が現われる音的環境によっては、学習者の母国語の影響が現われるというのである(例えば、英語の語末にくる有声子音を発音する際に、日本人はあいまいな音であるshwaを挿入するが、カントン語話者の場合は、無声化してしまう)。

ところで、このような母国語の影響が最も強く現われる音声習得の分野でも、いくつか気をつけなければならない点がある。その一つは、Dickerson (1975)の研究にも見られるように、同じ子音の発音でも、その音が語頭、語中、語尾など、どのような音環境の中に現われるかによって習得度が違うという点。つまり、我々は、普通、語頭の子音の発音練習をすることが多いが、その他

の音環境も十分考慮する必要があるということだろう。また、もう一つ大切なのは、母国語の音声習得の研究でよく言われることだが(Gamica&Edwards, 1976; Macken, 1980)、学習者がある音の発音を習得したように見えても、その回りにまだ習得できていない音があり、その音を一生懸命練習していると、それまでできていたはずの音の発音がまたできなくなってしまうという一種の交換現象(trade-off)が見られることである。つまり、Krashen (1982)の言葉を借りれば、一見習得されたように見えた発音も、実は、まだ意識的な学習の域を出ていないということになろう。このような現象は、単に音声習得だけでなく、統語規制や形態素の習得の研究でも十分考えなければならない問題である。

さて、発話のストラテジーとして、コミュニケーション能力に直接関わってくるものの中に、特に初期の頃の学習者がいわゆる未分化表現を丸暗記してコミュニケーションに役立てるということがある(例えば、母国語習得では、Peters, 1983;第二言語習得では、Hakuta, 1974; Wong-Fillmore, 1976)。小さい子どもなどの場合、最初のうちは、個々の音声だとか、形態素ではなく、語、あるいは、さらにそれより大きなI don't knowなどの語句単位で言葉を覚えてしまう。つまり、それらの語句を未分化の単語として使っていることがよくある。これらの未分化の表現は、コミュニケーションという観点から考えると、個々の音声や形態素などよりずっと有効な手段で、コミュニケーション・モーティベーションの重要性を裏付ける強力な証拠と言えよう。Krashen (Krashen&Terrell, 1983)なども、このような未分化表現が第二言語習得/教育の初期において大切であることを述べている。

ところで、我々が第二言語、あるいは、外国語を勉強する時、目標言語の慣用表現や諺を覚えようとするのがよくある。ところが、Kellerman (1978)らの研究を見ると、第二言語学習者があることを言おうとした時に、ひょっとしてその表現が目標言語に存在しないのではないか(例えば、『花よりだんご』)という意識が強ければ強い程、その言い方を第二言語に転移させないということが分かる。学習者は、できるだけ文化的色彩の少ない普遍的な意味を持った表現を転移させるのである。従って、場合によっては、自分ではかなり普遍的な言い方だと思っている表現を第二言語に転移させた時に、誤りが起こるということになるのである(例えば、『保険に入る』という表現は極当たり前の表現だし、英語にそのまま訳しても構わないと思うかもしれないが、実際に訳してみると、*Enter an insurance policyという表現が英語には存在しないことに気づく)。

5. コンプリヘンション・ストラテジーの例

前章では発話のストラテジーについて見てきたが、この章では、言語のコンプリヘンションに関するストラテ

ジーについて考えることにする。なお、ここで抜く例も著者の興味により選んだものなので、その点は了解願いたい。

まず、音の知覚の問題から見てみよう。現在までの外国語の音素認識の実験は、純粋に音の違いのみを見ようとしてきた。そのために、刺激音に無意味な音節を使ったり、刺激音とそれに対する反応との間隔を短くして、短期記憶に残っている音声のみを見ようとしてきた。しかし、実際にある言語の『音』を聞く時、我々は果たして、その音声的特徴のみを知覚しているのだろうか。

Barton (1978) は、英語を母国語とする子供たちが、実は、語の意味と結びつけて音素を覚えていることを報告した。つまり、ある最小対立を成す音素のペアがあったら、その違いの認識は、それぞれの音素の聞き取り能力によるのではなく、その音素が含まれている語の意味を知っているかどうかによって決まるというのである。

そこで、第二言語習得においても、意味を使って音素を聞き分けるというストラテジーが使われているかどうかを、吉田ら (Lobo&Yoshida, 1982; 1985; 吉田他, 1988) が調べた結果、ある音を、少なくとも外国語あるいは第二言語として、聞いた時、我々はその音が現われる語の意味を考え、それに合った音素を選ぶということが分かったのである。ただし、本当にその言語に習熟した、例えば、バイリンガルなどの場合は、純粋に音声的基準で識別できることも分かった。また、Arai (1988) は、より大きな文脈の中に、問題となっている音素を含んだ語が現われた場合、その文脈の意味の理解が音素の識別に影響するかどうかを調べたが、多少は影響するものの、やはり一番影響力が大きいのは、語の意味の理解だということが分かった。さらに、(最初のうちはその音素の出現頻度とも関係するだろうが) 語の意味を知っていると言った場合でも、どれだけよく知っているかによって、結果が違ってくことも分かった。つまり、単にある語の意味を知っているだけではだめで、それが自分のものになっていることが大切だということになるのである。

このように、第二言語の音の聞き取りは、その音が現われる言語環境が意味的に理解されているかどうかに大いに影響されるので、第二言語学習者の音声知覚や音声教育を考える際にも十分考慮する必要があるだろう。また、習熟度の程度により、学習者が音声知覚に用いるストラテジーが変わることも念頭に置いておかねばならない。

さて、今度は、リーディング・コンプリヘンションの研究について見てみよう。ここでは、主に、最近のシェマ理論 (人間は必ず何らかの『見方』を持ってものを見る) に基づいた第二言語におけるリーディングの研究の実験結果などを紹介しよう。まず、第二言語学習者と母国語話者のリーディングの大きな違いを見てみると、母国語話者は第二言語学習者よりコンテクストをよく利用

する、背景知識をよく使う、また、top-down 式の読みかた、つまり、文章全体の意味をまずとらえてから、その後で徐々に細かい点を読んでいくという特徴が見られる。それに対して、第二言語学習者は、bottom-up 式の読みかた、つまり、まず細かい単語などの意味をとらえてから徐々に全体の意味を読むということが分かってきた (Carrell, 1983)。また、理由と結果、比較と対比など、文章の書き方にも色々な文体があるが、その文体に関する知識 (シェマ) がリーディング・コンプリヘンションに役立つ (Carrell, 1985) という結果が得られた。

ところで、背景知識がリーディング・コンプリヘンションに影響するかどうかの実験では、キリスト教文化の中で育った人とイスラム教文化の中で育った人に、それぞれキリスト教的内容とイスラム教的内容の文章を読ませ、そのコンプリヘンションを測定した結果を見ると、やはり、自分が背景知識を持っている文章の方が理解しやすいことが証明された。また、同じ実験の中で、いわゆるパラグラフ構成がはっきりしている文章とそうでない文章のコンプリヘンションも比較されたが、多少の違いはあるものの、内容に関する背景知識の方が影響が大きいことが確かめられた (Carrell, 1987)。

なお、いわゆるリーディング・ストラテジーと言われているもので、phrase reading の有効性については既に知られている (Graf&Torrey, 1966)。また、いわゆる、key word (重要語句) の認識とリーディング・コンプリヘンションの関係について、Tachihara (1988) が実験した結果、日本の高校生でも、やさしい英文であれば、文章の内容を伝えるのに重要な key word を正しく拾い出せる人は、内容に関する設問に正しく答えられ、また、その逆に、設問に正しく答えられる人は、正しい key word を拾い出すことができているという結果が得られた。さらに、母国語 (この場合は日本語) でやさしい文章を読んだ場合は、key word と内容に関する設問の答えの間に有意な差はでなかった。つまり、ここでも、ある程度以上の能力を身につけてしまった人と、現在まだ習得過程にある人では、違ったストラテジーを使うことが示されたと見えるのである。

6. 結語

第二言語及び外国語習得の研究では、実に様々なことが実験されている。中には、なぜこんなことをわざわざ実験で確かめなければならないのかと思うようなこともあるし、最初から直観的に『分かっていた』ことがよくある。しかし、実証するということは、結局は、我々の直観が本当に正しいのかどうかを確かめ、それをより確実な『知識』のレベルにまで上げることなのである。時には、実験することによって、直観的に思っていたことが間違っていたことが判明することもあるれば、その副産物として、考えてもいなかったことが分かることもある。

日本語を日本にいる外国の人に教えるということは、日本語を第二言語として教えることである。そして、現在まで内外で行われてきた様々な研究が第二言語習得に関するものが多いことを考えると、その成果は十分日本語教育の場でも利用できるのではないと思われる。

言語教育には、理論と実践が必要だと言われるが、それと同時に、その橋渡しをする『研究』分野も忘れてはならない。

参考文献

- Arai, K. 1988. Perception of English Phonemes With and Without Context in Second Language Acquisition. M.A. thesis, Sophia University.
- Barton, D. 1978. The Discrimination of Minimally-Different Pairs of Real Words by Children Aged 2;3 to 2;11. In N. Waterson & C. Snow (eds.), *The Development of Communication*. John Wiley.
- Bowerman, M. 1982. Reorganizational Processes in Lexical and Syntactic Development. In E. Wanner & L. Gleitman (eds.), *Language Acquisition: The State of the Art*. Cambridge University Press.
- Canale, M. 1984. A Communicative Approach to Language Proficiency Assessment in a Minority Setting. In C. Rivera (ed.), *Communicative Competence Approaches to Language Proficiency Assessment: Research and Application*. Multilingual Matters.
- Canale, M., & Swain, M. 1980. Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics* 1.
- Carrell, P. 1983. Three Components of Background Knowledge in Second Language Comprehension. *Language Learning* 33.
- Carrell, P. 1985. Facilitating ESL Reading by Teaching Text Structure. *TESOL Quarterly* 19.
- Carrell, P. 1987. Content and Formal Schemata in ESL Reading. *TESOL Quarterly* 21.
- Clark, E. 1983. Meanings and concepts. In P.H. Mussen (ed.), *Handbook of Child Development*. John Wiley.
- Davies, A., Criper, C., & Howatt, A. P. R. (eds.). 1984. *Interlanguage*. Edinburgh University Press.
- Dickerson, L. 1975. The Learner's Interlanguage as a System of Variable Rules. *TESOL Quarterly* 9.
- Dulay, H., Burt, M., & Krashen, S. 1982. *Language Two*. Oxford University Press.
- Eckman, F. 1981. On Predicting Phonological Difficulty in Second Language Acquisition. *Studies in Second Language Acquisition* 4.
- 『中間言語の総研究』『英語展望』1985年秋季号 ELEC
- Ellis, K. 1985. *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Faerch, C., & Kasper, G. (eds.). 1983. *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman.
- Garnica, O., & Edwards, M. 1976. Phonological Variation in Children's Speech: The Trade-off Phenomenon. In G. Nickel (ed.), *Proceedings of the Fourth International Congress of Applied Linguistics* 1. Hochschul Verlag.
- Gatbonton, E. 1978. Patterned Phonetic Variability in Second Language Speech: A Gradual Diffusion Model. *Canadian Modern Language Review* 34.
- Graf, R., & Torrey, J. 1966. Perception of Phrase Structure in Written Language. *American Psychological Association Convention Proceedings*.
- Hakuta, K. 1974. Prefabricated Patterns and the Emergence of Structure in Second Language Acquisition. *Language Learning* 24.
- Hatch, E. 1983. *Psycholinguistics*. Newbury House.
- Hughes, A. 1983. Second Language and Communicative Language Teaching. In K. Johnson & D. Porter (eds.), *Perspectives in Communicative Language Teaching*. Academic Press.
- Hyltenstam, K., & Pienemann, D. (eds.). 1985. *Modeling and Assessing Second Language Acquisition*. Multilingual Matters.
- Kellerman, E. 1978. Giving Learners a Break: Native Language Intuitions as a Source of Predictions About Transferability. *Working Papers on Bilingualism* 15.
- Krashen, S. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Pergamon Press.
- Krashen, S., & Terrell, T. 1983. *The Natural Approach*. Pergamon Press.
- Lobo, F., & Yoshida, K. 1982. The Perceptual Acquisition of English Phonology by Japanese Students. In H. Byrnes (ed.), *Contemporary Perceptions of Language*. Georgetown University Press.
- Lobo, F., & Yoshida, K. 1985. The Influence of the Lexical and Semantic Content in the Perception of English Phonemes. In K. Jankowsky (ed.), *Scientific and Human Dimensions of Language*. Benjamins.
- Macken, M. 1980. Aspects of the Acquisition of Stop Systems: A Cross-Linguistic Perspective. In G. Yeni-Komishian, J. Kavanaugh, & C. Ferguson (eds.), *Child Phonology I. Production*. Academic Press.
- McLaughlin, B. *Theories of Second-Language Learning*. Edward Arnold.
- Peters, A. 1983. *The Units of Language Acquisition*. Cambridge University Press.
- Pinker, S. *Language Learnability and Language Development*. Harvard University Press.
- Roeper, T. 1982. The Role of Universals in the Acquisition of Gerunds. In E. Warner & L. Gleitman (eds.), *Language Acquisition: The State of the Art*. Cambridge University Press.
- Savignon, S. 1983. *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice*. Addison-Wesley.
- Slobin, D. 1985. Crosslinguistic Evidence for the Language-making Capacity. In D. Slobin (ed.), *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition 2: Theoretical Issues*. Lawrence Erlbaum.
- Tachihara, M. 1988. The Relation Between Key Words Memory and Reading Comprehension. B.A. thesis, Sophia University.
- Widdowson, H. 1984. Competence and Capacity in Language Learning. In *Explorations in Applied Linguistics* 2. Oxford University Press.
- Wong-Fillmore, L. 1976. The Second Time Around: Cognitive and Social Strategies in Second Language Acquisition. Ph.D. dissertation, Stanford University.
- Yoshida, K. 1985. How Much Grammar - A Communicative Viewpoint (Part A). *Gengo no Sekai* 3.
- Yoshida, K. 1986. How Much Grammar - A Communicative Viewpoint (Part B). *Gengo no Sekai* 4: 1.
- 吉田研作他 1988 『第二言語習得における音素知覚と単語の知識』 Sophia Linguistica 22

Submission to the Special Issues of The Language Teacher

Articles concerned with the topic of a Special Issue may be submitted either to the Editors or to the guest editor for that particular issue. It is recommended that one or the other be consulted beforehand, to avoid content overlap, and that plans be made to submit the article approximately two months before the issue date.

For further information, please contact the Editors.

Abstract of SELECTED STUDIES IN L2 STRATEGIES

The teaching of Japanese as a second or foreign language has enjoyed a tremendous boom in recent years. However, there is still little being done in terms of research. The purpose of this paper is to give examples of what sort of research has been conducted in L2 learning and teaching, and to show that much of it can be applied to actual teaching situations.

First, in applied linguistics, we hear so much about the importance of motivation in language learning. The recent trend here is to place primary emphasis on what many people call the motivation to communicate. Although there are studies which show that innate "universal" grammar is an essential component in language development, what is needed to trigger this mechanism is the motivation to communicate. Some people go so far as to say that grammatical rules are acquired because the learner is always thinking about the most efficient way of communicating with those who already have grammatical competence in that language.

The above is an example of a "strategy" in language acquisition. However, it's difficult to determine whether it should be considered a learning strategy or a communication strategy. It seems that, in many similar cases, the distinction between the two is actually non-essential. Therefore, the distinction has not been made in introducing the following studies.

Studies in the production of language show several characteristics the most important of which is that, after all that has been said about the non-significance of L1 transfer, people are again emphasizing the importance of L1 transfer. Theories such as the diffusion model and the markedness hypothesis, as well as theory of core meanings versus idiomatic meanings, all show that the L1 is far from a negligible factor in L2 acquisition.

Studies in the perception of language show the importance of prior knowledge and meaning in the acquisition of L2 phonemes as well as in learning how to read in the L2. It has been shown that the knowledge of the meaning of the word in which a phoneme appears, and, to an extent, the sentential context in which that word appears, influences the perception of the phoneme. In reading comprehension research, schema theory has been receiving much attention of late. On the basis of this theory, background knowledge, knowledge of the style in which a passage is written, as well as the paragraphic structure of the passage have all been shown to influence reading comprehension.

Although it is true that both theory and practice are important in language teaching, it should be kept in mind that research is the essential bridge connecting the two.



インタビュー——サイレント ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ What's Behind the Silence: Underlying Principles of the Silent Way

Interview with Fusako Allard by Keiichi Koide

アラード・房子・小出慶一

言語教育の中でも、アウェアネスという言葉がしばしば口にされるようになってきた。アウェアネスとは何で、それはどんな意味を持ち、教師はそれを育てるために何ができるのか。学習者のアウェアネスを教育の中心と考えるサイレント・ウェイでの日本語教育に永年携わっている語学文化協会のアラード・房子氏に小出慶一氏がインタビューした。

小出 この間、送っていただいたガテーニョ氏の本を読んで、新しい学問というのはどういうふうに出てくるかみたいな話で始まっているという点で非常に面白かったんですけども、サイレント・ウェイ（SW）というのは、必ずしも言語教育だけを考えているわけではないみたいです。

アラード SWというのは、方法とかテクニックではないんです。言語なり何なりを、学習者がどうやって学んでいくかを勉強する心構えがSWなんです。SWというと、先生はまったく沈黙を守っている方もあるかもしれないけど、もともとSWっていうのは先生が何をやると決まっているのではなくて、生徒が何を必要としているか、どうすれば生徒自身の力を使ってそれを習得できるかということから出発しているので、言葉を使えればもちろん使うし、耳が聞こえないとか、生徒の母語をまったく知らない場合は、全然話さない。生徒にいちばんいいように使い分けるわけです。

どこがSWかって言うと、目標言語のモデルは全くしないということ。言語でも、他のことでも、私たちは他の人のやることを見たり聞いたりして、それを蓄積していった習得したのではないとガテーニョ先生は考えています。赤ちゃんは一つの細胞の時から意志を持っていて、自分の意志で呼吸とか、消化とか、排泄とか、歩くとかいった身体の機能を発達させる。こういう機能は教えられる。SWが他のアプローチと大きく違っているのは、言語をコミュニケーションとしてではなくて、身体の機能のひとつとして考えているところだと思います。第一言語は誰も教えてくれない。でも、皆ほとんど例外なく母語はマスターしたでしょう。第二言語を教える場合も、先生にできることはアウェアネスを育てること、自分のものとしてわかったという学び方ができるように生徒を導いていくことだけだとSWは考えるんです。

小出 なぜアウェアネスをそんなに重視するようになったんですか。

アラード 知識を与えることが人に物を教えることだと

するような教育の中では、生徒は先生の話の聞いているだけで何か学べると思われてるけど、その中でも聞いて興奮した事は暗記しなくても覚えてるってことあるでしょう。そういうのが、アウェアネスをもって接した事は、保持されやすいってことです。例えば泳ぐことを考えると、泳げない状態から出発して、ちょっとこうやってごらんとか、そうやったらだめだとか、先生に言われて、それに従っていろんなことをやっていくうちに、自分の持っている指標が狭まって行って、結局自分で何かを見出す。それが学習とか習得とかいうもので、教えることは全く違う。だから、全てがアウェアネス。学ぶことはアウェアネスが変わることです。それしか教育するものはないんです。

小出 ガテーニョ氏が考えるアウェアネスは、そういうものを持っている自分についてアウェアネスを持つという二重構造みたいなところがありますね。

アラード そうです。Inner Game of Tennisという本があるけれど、スポーツの先生だって、同じこといってます。教えることはできないって。知っている事と、知らない事の区別ができる、自分が今まで学んできたことと、まだ知らないこととの区別がつくというのが、学習の最後の段階としてあって、それができて、次の段階に行けるということです。

小出 その事に関してなんですが、そうすると、アウェアネスに領域の特殊性みたいなものはないんですか。例えば、碁ができるやつが、同じ勝負事だからって、将棋やったら全然ダメってことがありますね。

アラード うーん。そうですね。結局アウェアネスを持つということは、学び上手になるってことなんです。だから、一つの事が上手に学べる人は、いろんな条件を同じにすれば、他のことも上手に学べる。碁はできるけど将棋はダメっていうのは、条件が違うからと違いますか？態度というか、碁は好きだけど、将棋はどうもというような既存概念があって、これは苦手だと決めている所がたくさんあるでしょ。子供はそれをしていない。歌は不得手だとは言わない。体の機能にまで戻ってみると得手、不得手なんてないでしょう。

小出 そうしますと、自分はこれを苦手であるという心理的な壁がある場合は、それを壊そうとするんですか。

アラード します。言葉でも何でも、私、前は暗記が大事だと思ってきたから、勉強なんて全然できない。数学なんてわかんない。でも、何かひとつうまく乗せられてやってみて、私もなんか学べる人間なんだと思うように

(cont'd on page 17)

SHORT COURSES AND COURSE SUPPLEMENTS

LISTENING COMPREHENSION

Seido materials have always been praised for their emphasis on listening. All of the textbook series contain abundant listening material, offering practice for any age or level. Some of the supplementary materials are devoted exclusively to Listening Comprehension. See the descriptions below to find what fits your needs.

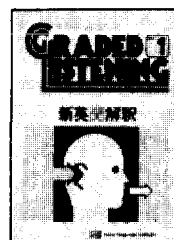
ACTIVE LISTENING FOR BEGINNERS

Introduces a new dimension to the development of listening skills with systematic training in comprehension (understanding meaning: the goal of listening) and **perception** (accurate recognition of sentence **form**: needed for fluent speaking skills). There are 60 lessons of active listening in two Workbooks, Narratives and Dialogues are alternated throughout the lessons in a gradual build-up of syntax and vocabulary. The course can be used with beginners of any age who have completed the first year of junior high school English. The material motivates students to intensive concentration and brings the satisfaction of success on the listening tasks.



GRADED LISTENING

Tapes and Workbooks using the listening comprehension passages of *Modern English, Cycle One*. The three sets of 20 lessons each are a lively supplement to any elementary or intermediate course. The exercises focus attention on unstressed words, elicit spoken responses in natural question/answer formats, quiz students on overall meaning, and provide brief written practices for reinforcement. The gradual build-up of material makes a careful lesson-by-lesson integration with your present curriculum unnecessary.



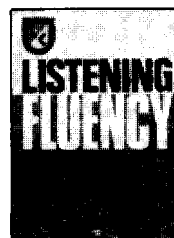
CYCLE TWO LISTENING COMPREHENSION

The very popular Cycle Two conversations for listening: 80 extended listening passages grouped into eight themes. Workbooks for home-study or classroom use; a variety of topics and situations; speech that is alive and natural, enhanced by sound effects; a large number of voices of all ages and accents. The tapes are functionally organized, and a **Functions for Speaking** section follows each Conversation. The Worksheets focus attention first one way, then another. Students gain greater and greater mastery of the Conversations moving from overall meaning to details, and from meaning to form.



LISTENING FLUENCY

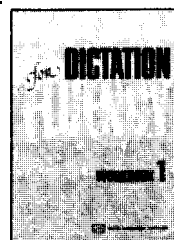
Eight units of extended, realistic conversations with exercises designed to lead students quickly to full comprehension. Useful functions are noted and practiced in typical sentence structures, and many possible classroom procedures are described in the Teacher's Guide. In each conversation useful phrases have been deleted to build up a speaking repertoire of natural phrases on the basis of listening. Also for speaking, a shorter version of each conversation is provided which accommodates all these **Useful Phrases**. A **Useful functions** section, extends some expressions to other situations. Two cassette tapes available.



DICTATION FOR FLUENCY

An application of the Comprehension Approach to conversation courses, based on the consideration that accurate speaking depends on accurate **hearing**. Attention is focused on exact wording with the guidance of specially designed Worksheets. Sentence rhythm, stress, and recognition of reduced forms develop naturally. The approach is pleasant and engrossing for everyone. Two sets of Workbooks with 50 Worksheets each. Teaching Scripts and tapes are available.

The second volume of the Workbooks, dealing with more advanced sentence structures and vocabulary of conversational English, is now available.



seido language institute

12-6 Funado-cho, Ashiya-shi, Hyogo 659, Japan



セイドー外国語研究所

〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL0797(31)3452 FAX0797(31)3448

COUPON
63-U
(JALT-7))

(cont'd from page 15)

なると、ある事は今はダメかもしれないけど、他の事はできるだろうという自信ができてくる。すごく人間って可愛い。

小出 そうですね。

アラード 何をやる時でも、成功したという気持ちで、その次のチャレンジをつくるわけでしょう。できるとか、できないじゃなくて、自分がこれをやろうがやるまいが、数学なんて誰にもできる、やり方さえ正しければ自分もできるんだと思うようになる。私も全然だめだと思ってたのが、上手にできないにしても、何でもできるって思うようになりましたもの。

小出 それは、ある程度一定の作業を持続しないと意味がないわけですね。入口の問題もあるでしょうけど、達成感といいますか、どうやって持続させていくか、そこらへんは、どういうふうに考えていらっしゃるんですか。

アラード 持続させるのは、一つ新しい音の発音ができるようになったとか、動詞の使い方がわかるようになったとか、そういうものの連続って見えています。

小出 うまく入れなくて、続けられない人というのを、どういうふうに考えるんですか。

アラード 皆が全部理解できなきゃいけないという、ひとつの目標を設定しなければいいんです。一人一人が教室を出ていく時に、一つか二つ新しいことができるようになってればいい。全ての人が同じことを習得していくことはあり得ないんだから。どうしても『の発音できないんだったら、今はいい、またこの次やりましょうって』いえないわけですね。

小出 SWは、教育はどういうふうに行われるべきかという問題意識から出発したんじゃないかと思うんですけど、そこから言葉の分野に行った背景は、どういうものなんでしょうか。

アラード 教育の問題としては、どんな分野でも同じことだと思います。水泳なら水泳、料理なら料理、言語なら言語から出発しないで、もっとずっと前、赤ちゃんがお腹にいる時のことから出発すると何でも一緒だっていうんです。生徒は、教室に入ってくるまでに膨大なことを学んできたわけでしょう。手足を動かしたりとか、そういうことから出発して。全ての人が、そこまでいろんなことをやってきたんだから、この上何か一つ学ぶのなんか何でもないみたいな考え方。

小出 そうしますと、学習者の側に、そういう意識があるとないとで、ずいぶん成功の具合が違ってくるんじゃないですか。

アラード そうね。ガテーニョ先生は教師のセミナーでサウンド・カラー・チャート読ませたりして、学生ができないっていうと、この教室に来るまでにおまへはどれだけ大変なことをしたか考えてみろっていうの。このセミナーのあることをどっかで読んで、覚えておいて、い

い時間に家を出て、歩いて、正しい電車に乗って、道も間違えないで、溝にもおちないで、自動車にもぶつからないで来た、それはすごいことだって。おまけにみんなひとつの言葉をマスターした。だいたい一つめの言葉が一番難しいのに、それをマスターしたじゃないかって。そういう人が何でこれくらいのこと難しいっていうのかって。

SWの言っていることは、本当はすごく単純なことだと思うんです。赤ちゃんは言葉でも何でも問題なく学んでいくでしょう。結局SWは人の中にある赤ちゃんの要素にどうやったら一番訴えられるかということで、教材つくったり、方法つくったりしているんです。赤ちゃんと違って、私達の場合はいっぱい障害物があって、それを一回どけないと、赤ちゃんのレベルに到達しない。そのために言葉以前にやらなければならない作業がいっぱいあるわけね。それが段々とわかってきたから、授業を始める前に生徒にちょっと話したりするんですよ。そうすると割合スムーズに入っていく人もいるし、面倒臭いから早く日本語教えろっていう人もいるけど。

小出 そうしますと、日本語を教える時に使っている言葉の内容そのものは、特に問題にはならないということですか？

アラード そうなんです、確かに。何でもターゲットになりうる。だけど、教育の効率の問題があります。赤ちゃんはいろんな音をいっぱい聞いているわけでしょう。その中で、何に重点をおいて何を無視するかを聞き分けるから、学んでいく。それから大切なのは、今まで学んだことを従属させて、それを統合して、それを支えにして次の新しいことにいくというやり方ね。だから、そこにはいつも、今はこれが一番大事で、他との関係はこういうふうになっているんだという意識がある。教師の仕事は生徒がいかに少しのエネルギーでたくさん覚えられるかを考えること。そういう意味で、学習項目の配列のしかたって、すごく大切です。

小出 いわゆる中上級は扱わないっていうお話でしたけれども、そこらへんのところを……。

アラード 扱わないっていうよりも、私達は歩き方を誰にも教えてもらってないわけでしょう？ところが、子供は立てるようになったら、この次は動きたくなくなる。あそこにお母さんがいるから、あそこに行きたくなくなるとか、それがチャレンジになる。そういうことは教えないでもいい。言葉も、ある程度のところまで付き合って、順路を示してあげれば、後は手を貸してやる必要はないと考えてます。子供は小学校に行くようになれば、言語は勉強しなくても、言語を使って算数とか国語とか社会とか歴史を勉強するでしょう。それと一緒に、ある段階までいったら、目標言語で、その人の興味のある科目を勉強すればいいんです。そうすると、言語の教師は何もかも教えられるわけがないから、例えば、古典を勉強したい

と言われたら、古典の先生を紹介するということになるわけですね。だから、そこからは先生というより、コンサルタント、インフォーマントってことになるんです。

小出 会話を扱わないっておっしゃいましたけれども。
アラード コミュニケーションは、教えません。なぜかといえば、言葉は表現のためにあるんです。上手に表現しても相手がわからなかったら、コミュニケーションにならないでしょう。コミュニケーションとか会話っていうのは、別の芸術でしょう。コミュニケーションが本当に必要なだったら、パントマイムでみせる方が手っ取り早いわけ。そういうことも、教えます。

小出 そうすると言葉の教育の中で何が大事だとみえるわけですか。

アラード 結局言葉の魂を生徒に伝えるっていうことが一番大事なことです。日本語の魂を伝えるようなものを短期間でたくさん与えたいわけだから、日本語独特の、嫌だから後に回したいようなことでも全部入れてしまう。それに、これが難しいとか、やさしいとかいうのは私たちが決めるようなことではない。生徒の側に立てば私たちが難しいだろうと思うことだって、難しくないということもあるわけでしょう。

言語の魂はどこにあるかという、まず音にある。音の中には、発音とか、メロディー、イントネーションがある。それから、構文。その二つをきちっとやれば、誰でもネイティブのようになるんです。そこで落とされるのは語彙と構文に関係のない文章。こんにはとか、さようならとか、決まり文句をいくつ覚えたらって新しい文は作れないけど、棒一本増やせば何千の文章が作れるわけです。そういうことを重視するから、慣用句とか挨拶の言葉とか、あんまり文法を含まないものは教えません。ところが、そういうものにこそ、言葉のイメージが現われてくるわけでしょう？ 文法がないんだから。そういうものは、サウンド・カラー・チャートで意味を教えないで、音としていわせるんです。意味を与えると自分の言葉のイントネーションに変えてしまうから、何をいっている

かわからないでいる間に、きれいにいえるようにしてしまおう。赤ちゃんはメロディーをたくさん聞いてるわけでしょう。それと同じようなこと。

音はメロディーと違って、いい加減な聞き方をしては聞こえないんです。自分が発してみて、自分の中から聞いたり、人から違うっていわれたりして、自分の中に指標が確立されないと聞こえない。だから最初はやかましくやります。絶対日本語の音しか受け入れない。[φ]とか、[y]とか、そんなものは受け付けません。

小出 さっきおっしゃった易しい、難しいという問題なんですけど、やりもらいがかなり早く出てくるとか、普通の日本語の教科書とは並べ方がかなり違うようですが。

アラード これは面白い面。最初、教材は英語で、それからフランス語とか、ヨーロッパの言葉のものが作られたんです。だから、どうしても、それに影響されてるんですね。その結果として、やりもらいが早く出てくることになった。giveなんてなんでもない言葉だけど、日本語にすれば……

小出 面倒臭い。

アラード ところがね、日本語をよくわかってない人達が、ただそこにあるから使ってみたら、何にも困らないの。後まで待たたって同じじゃないかってことになった。今結果としてみて、早く出てきて有り難いと思います。日本語は何か違うんだ、何か知らないけど、ややこしいものがあるとわかって、後ですいぶん楽になるみたいな気がします。

SWやってて、教科書でするより好きだなんて思うのは、20時間とか60時間の中では、ひとつのことを詳しくは教えてあげられないけれども、日本語の森全体みたいなものを早くみせてあげられること。詳しい本1本ずつは自分でやんなさいということで。それが言葉全体を早くつかめる理由かもしれないですね。教科書はどうしても1本ずつの本からはいらなきゃいけないから。

小出 そういう基本的な考え方を、我々日本語教育をやっていく人間がどういうふうに受け入れていくかとい

J.S.L.



See that your Language Teacher follows you. Send this form
 ALONG WITH YOUR CURRENT MAILING LABEL to the
 JALT Central Office: c/o Kyoto English Center, Sumitomo
 Seimei Bldg., Shijo-Karasuma Nishi-iru, Shimogyo-ku, Kyoto
 600

Name _____	Date effective _____
New Address _____	
	Postal Code _____
New- Home Phone _____	New Work Phone _____
New Employer _____	

う問題の中で一つ、SWの基本的な考え方には共鳴できるんだけど、実際の方法とか教材とかでうまく入れないってことがあると思うんですね。だから、いいところだけ貰おうとか考えたりして。

アラード それでいいと思うんですよ、結局は。ローマ字を使って教えるのが嫌だと思ってた人は、これが答えだと思ってSWに入っていくわけ。ところがね、そういう入りかたをすると、やっぱりどこかで、もっと役に立つ言葉があるのに何でこんな言葉ばかり見せるんだろうと思って変えたりする。私なんか最初に全面的に変えちゃった。だけど、生徒に向くようにと思ってやってるうちに、だんだんガテーニョという人がどこが偉いかわかってきたんです。結局、あの人は生徒の目で言葉を見られる人なの。そうしないと生徒の役に立つ先生にはなれないんだと思うようになりました。

じふん ぶんご ぐらい とし
かん いっす ぎきょう こんねん
さき おととい ちゅうじゅう しゅう
いま まいごころ あしたきのう
げつ どし あさって すいか がつ
ようび びょうもく にち きん

教材は日本語を見せるためのものじゃないから、変なものでもいいんです。極端に言えば、少しぐらいまちがっ

ていても、そのほうが生徒が入っていきやすかったら、それでいい。そういうことがわかってこない、SWの教材は使えなくなっちゃうことがあるんですね。最初はやっぱり、どこに「は」があって、どこに「が」があってとか覚えなければいけないでしょ。これはすごく値打がある、生徒に役に立つものだと思います、時間を費やして一生懸命やれるけど、義務的になっちゃうと、入っていけない人がでてくるのね。そのへんで、確かに先生としてSWを使うことはそんなにすんなりとはいかないんでしょう。

ガテーニョさんは、トレーニングを受けないと、この教材を使っちゃいけないといったことはありません。教師も生徒と同じで永遠の学習者なんだから、何でもやってみて、失敗しているうちにアウェアネスが段々豊かになっていく。だから、どんどん間違えなさいというんです。生徒はそんなひ弱なものではないから、失敗しながら、生徒から学びなさいって。だから、余計やりにくいんですね。人はそれぞれ違うものを持っていて、その人の性格とかが授業に直接現われてくるから、一人として同じ先生はいない。SWというのは、教材はあるんだけど、その使い方は先生の自由だし、みんな自分のSWを作って、違うことをやっています。

小出 さっきおっしゃった、生徒と同じ視点に立てるってのは、ガテーニョ氏のような天才だけが成しうることなんでしょうか。

アラード それは、アウェアネスの問題だと思います。生徒と一緒にやっていく経験を通じて、自分の知識を忘れてしまえるようになるんです。ゼロで始めた生徒が何時間かSWやって、次の日に教室に入ってきた時に、どこにいるかがわかって、すぐにそこから始められるようになっていくみたいです。

面白いのは、一人一人の生徒が何をしているのか、彼らの中で何が起きているのか、見える時もあるし、わからない時もあること。いったいどうしちゃったのかしらと思ったら、ゆうべボーイ・フレンドと喧嘩したとかいう場合もあります。だから、フィードバックはたびたびやります。一時間半とか、一時間とかSWやって、どうって聞くわけです。一番始めは、「どうでしたか」っていても、皆「よかった」で終わっちゃうから、「どんなことを学びましたか」とか、「自分の学び方で、何か気がついたことはありましたか」とか、そういうことを聞いて、学び方を教育していく。

SWで、もうひとつものすごく重視しているのは、眠るということです。眠っている時は、赤ちゃんの状態になって、外の邪魔が一切ないから、自分の中で習得したものをきれいに並べ変えたり、はっきりわからないものは忘れてしまったりできる。どうもうまくわかんなかったのが、あくる朝にわかったっていうことがあるでしょう。それは、眠っている間、私たちは休んでいるん

じゃなくて、ずっと学び続けているからなんです。

小出 SWの背景になっているのは、生理学なのか、脳科学なのか、わかりませんけれども、普通の教育の考えているところと領域が大分ちがう感じがするんですけど。
アラード それは、ガチーニョさんが、生理学者でもあり、数学者でもあり、心理学者でもあり、物理学者でもあり、それから言語学を勉強してみたり、いろんなことをやっているからだと思います。最初はお医者さんになろうと思ったそうで、西洋医学もやったし、東洋医学もやっている。ピアジェの本を英語社会に紹介したのもガチーニョさんだし。あの人なりに全てがどっかでつながっているんじゃないかなと思うんですけどね。哲学を説明できないものだといって嫌うんです。教育は科学にしないからダメなんだって。

小出 すると、ガチーニョっていう人が一人で、理論的な背景を支えているって形になっているんですか。

アラード あの人は、いろんな人から説をとっておいで、その人達にクレジットをあげないって、批判されているけども、そんなことないんですよ。モンテソーリなんか引き合いに出してね、ミセス・モンテソーリがやっていることは、これなんだよとか、そりゃいろんな人の名前を出すんです。ロッドだって、キューイジネアの使っているのを見て、目から鱗が落ちたとかいってます。そういう経験を沢山抱えているんだけれども、どうしてだか、あんまりビブリオグラフィ書かないから、そういうふうに使われているんですね。本当はごく謙虚な人なんですよ。

小出 SWって知識を求めてないんで、ある意味で、教える方も、学ぶ方も、非常に緊張っていうか、精神のエネルギーが高まってないとうまくいかないし、うまくそれがあった時に、何かが自分の中にできてきたという感じが持てるのかなって気がするんですけど。

アラード そうね、確かにね。ガチーニョさんは attention っていうのは at tention ています。だから、注意を向けるというのは、皆が、at tention でなきゃなんないけど、それは relaxation と必ずしも反対のものではないと思います。リラックスして、集中して、注意を向けていると、一番いいんです。

先生のエネルギーは関係ないと思います。元気だと思う時はやりすぎて、生徒不在になっちゃうことがあったり、しんどいなと思っている時の方が、生徒の力に頼って、うまくいくようなことがある。先生はエネルギーを内に持っていないといけません。でも、こっちからエネルギーを送ってやる必要はないんです。先生はたずなは引いてるけど、生徒が自分で何かやってる時は、いていないような存在なんです。先生が要るようじゃだめで、生徒が私の顔見出したら、チャートみなさい、私の顔もって、買い物にいけないでしょうっていつも怒るんですけどね。慣れてくると、私の顔なんか全然見なくなるし、

先生はすぐお払い箱になってしまうような感じ。それを目的としているようなやり方なんだけど、時には、なんてむなしい存在なんだろうと思ったりする。60時間位で、もう先生要らないから出ていきなさいということになって商売にもならないし。損なやり方だと思います、先生にとっては。生徒ばかり得して。

小出 そうですね。

アラード だけど、人に教えるごとに先生としてもすごく教育されるんです。どんなやり方だってそうだけど、人は全部違うから、一人一人関わっていくと、一つ一つが全く新しい経験になる。報いはそれだけです。

小出 あんまり大量生産には向かないですね。

アラード いや、大勢のほうがいいんです。生徒が多ければ、先生要らない。生徒達、5~6人でやってたら、全員が間違っただって間違いは6種類しか出てこないでしょ。20人でやってたら、役にたつ間違いは簡単に出る。そうすると、生徒がそこから学んでいく。難しいけれど、生徒に上手にチャレンジして、常に注意をひきとめておければ、50人のクラスでも、7人位前に出してやっていきます。後ろでは気楽にみてるけど、明日はわが身と思うと、待たされているのを利用しないと損という気が出てくる人もあるんですね。自分も見えてやってみようということになる。だけど小人数だけはダメ。生徒のわがままを扱わざるを得ない。生徒が多くなると、嫌だとか何とかいってられないでしょう。嫌なことも仕方なくやる。20人ぐらいが一番いいのかしら。1対1はものすごく難しい。先生とクラスメートという二つの役割をきれいに使い分けないと、結局モデルしちゃうことになるし、効率も悪いですね。

小出 集団の力みたいなのもかなりあるんですか。

アラード あります。ゲームだから、このルールでやってくださいって、始めに言っとくと、後でお互いに、そのルールがあるってさっき言ってたやんとか言い合ったりしていますよ。それをCLLでは契約って言うけれども。

小出 教師はルールを支えてるっていうか、いつも教室全体の要にはなっているんですね。

アラード そう。おまわりさんみたいな存在にはならないとね。そこがむずかしいところなんですよ。目に見えないたずなをくっつけて絞ってないと、変な所に行って、迷子になってしまっって、日本語きらいになったりするから。

小出 媒介言語がなければ、言葉は使わないっておっしゃいましたが、ゲームの規則を説明するとか、フィードバックをするとか、言葉の必要な要素も多いですね。

アラード そう、難民の場合なんかは本当に何も使わないでやってるから、つながりがすごく持ちにくいです。やっぱり、相手の言葉はわかるに越したことはないと思います。あんまり通じるとしゃべりすぎる時もあるけれど

ど。知らん間にのせられて説明してたりね。

説明というのは一番ダメ。教師が生徒に与えられる言葉の量などわずかなものでしょう。だから、残りの膨大な部分を生徒は独力でものにしていくなか。それには、生徒一人一人のアウェアネスに働きかけ、学び上手な人間を作っていく方が手っとり早い。言語習得は人間成長の副産物みたいなものです。

☆ ☆ ☆

日本語でのサイレント・ウェイに関する文献には次の

ようなものがあります。

アラード・房子 (1987) 「アメリカにおけるサイレント・ウェイとC-L/C L Lの普及の実態」『日本語教育』61号

カレブ・ガデーニョ (1973) 『赤ん坊の宇宙：その驚くべき自我のはたらき』土屋澄男訳 リーベル出版 1988

三枝恭子 (1987) 「サイレント・ウェイによる日本語入門——学習者と教師にとっての初日の重要性」『日本語教育』63号

Abstract of

WHAT'S BEHIND THE SILENCE: UNDERLYING PRINCIPLES OF THE SILENT WAY

Fusako Allard has been teaching Japanese by the Silent Way for ten years and has organized seminars and workshops for Dr. Caleb Gattegno in Japan. In the following interview with Keiichi Koide, she talks about how the Silent Way views learning and language.

Allard defines learning as 'a change of one's awareness.' Successful learning in one field makes students good at learning in other subject matters.

The Silent Way regards language as one of the mental functions of human beings. Babies develop these functions on their own without being taught. In teaching a second language, what a teacher can do is to educate students' awareness to put them back on the track of lan-

guage acquisition which they followed when acquiring their first language. After about 60 hours of classroom lessons in the Silent Way, students no longer need a teacher and are able to learn on their own.

In the Silent Way, language is thought of as a means of expression before becoming a means of communication. What is important in teaching language is conveying to students the spirit of the language. This is done at all stages starting with the sound system and functional vocabulary necessary to construct all of the new language's grammatical structures. Lessons are carefully structured and controlled by the teacher to economize the energy students spend on learning.

J.S.L.

Books from TESOL . . . Geared to What You Need and What You're Doing.



(Member discount prices in parentheses)

THEMATICS

Children and ESL: Integrating Perspectives. Edited by Pal Rigg and D Scott Enright. ESL Teachers as Language Advocates, ESL Children's Writing, Reading in ESL, A Children's Story: Use Everything You Have to Teach English. \$12.50 (\$10.00) Softbound

Current Perspectives on Pronunciation: Practices Anchored in Theory. Edited by Joan Morley. The pronunciation component of oral language how it operates to transmit meaning, how it can be learned, how teachers can facilitate learning. \$14.00 (\$12.00) Softbound

Research in Reading in English as Second Language. Edited by J. Devine P. L. Carrell, and D. E. Eskey. Contributions from more than 20 authors with the view of reading as an active process involving readers and text variables in complex interaction. \$16.50 (\$15.00) Softbound

TESTING

Reviews of English Language Proficiency Tests. Edited by J. Charles Alderson, Karl J. Krahnke, and Charles W. Stansfield. Describes and evaluates the major ESL/EFL tests being used in the world today. Includes more than 40 test reviews with extra reference materials. \$16.50 (\$15.00) Softbound

Technology and Language Testing. Edited by Charles W. Stansfield. New developments in measurement theory and methods of test administration. Papers from 7th Language Testing Research Colloquium. '65. \$12.50 (\$10.00) Softbound



We accept Visa and Mastercard. Publications list and order form mailed upon request.

1118 22nd St., NW, Suite 205
Washington, DC 20037 USA
Telephone (202) 872-1271

REFERENCE GUIDES

Directory of Professional Preparation Programs in TESOL in the United States: 1966-1966. Edited by Julia Frank-McNeil. Identifies programs granting degrees in TESOL, surveys state certification requirements. \$15.00 (\$13.00) Softbound

Selected Articles from the TESOL Newsletter: 1966-1963. Edited by John F. Haskell. More than 100 articles on methodology, language and culture, linguistics and grammar, language assessment, composition, ESP, reading and vocabulary. \$16.50 (\$15.00) Softbound

1967 TESOL Membership Directory. Alphabetical and geographic listings of more than 11,000 individual, commercial, and institutional members, listings of affiliate and interest section presidents and newsletter editors. \$12.50 (\$10.00) Softbound

Add 15% Postage & Handling on all orders

アリソン・ミラー、サジェストペディアを語る Interview: Alison Miller on Suggestopedia

by Naoko Aoki, Sammo Junior College
産業能率短期大学 青木直子

アリソン・ミラー氏はサジェストペディアの創始者であるゲオルギ・ロザノフ博士のトレーニングを受け、過去8年間にわたって、この教授法を実践してきた人である。1986年から88年の2年間は日本において、英語、スペイン語の教育と教師の養成に携わった。離日前にサジェストペディアの基本的な原則を語ってもらった。

青木 まずサジェストペディア（S）がどういうものか簡単に説明していただけますか。

ミラー ふつう人は過去の学習環境とか、教育のシステム、両親とか教師とかに、学習の潜在的な可能性に対して、一種の限界を設定されてしまっているんです。学校の成績が良い悪いって事には関係なく、ほとんどの学生は、もっと色々な事が出来るのに、それを出来ないと感じこんでいます。ブルガリアのゲオルギ・ロザノフ博士という精神分析のお医者さんが、暗示のプロセスを通じて、私たちはこうした外から与えられた限界から自由になれることに気がついたのです。そのきっかけは、記憶障害のある患者さんが催眠状態では、ある詩を一回読んでやっただけで、暗示する事が出来たという出来事です。もちろん教育の中で、催眠を使っていいわけではありません。けれども、必要な条件がそろえば、覚醒状態での暗示が、催眠を通して得られるのと同じ効果をもたらすのではないかとロザノフは考えたんです。

Sには三つの原則があります。まず第一の原則は、喜び、そして緊張がない事。学習の障壁を作るストレスがない。これは、集中しているリラックス状態と言います。一種の心理的なリラクゼーションと考えていいと思います。第二の原則は、顕在意識と潜在意識の統合です。意識と無意識とよくいいますが、全てのものは意識されているんです。ほとんどのコミュニケーションは、潜在意識のレベルで行われている。ロザノフは90%以上だろうと言っています。例えば、教師のイントネーション、立ち方、歩き方、ジェスチャー、そういう全てのものがメッセージを伝える。言葉で何を言ったかという事だけではないわけです。だから教師は学生に、あなたは学習が出来るとですよというメッセージを全てのモードを使って伝えて行かなくては行けない。それと同時に学生を理解するのも顕在意識と潜在意識のレベルのメッセージを読まなくては行けません。

青木 イントネーションとかボディ・ランゲージは、顕在意識のレベルで読むことはできないんですか。

ミラー 出来ることもあるし、出来ないこともあるんです。学生の中には、自己の評価が非常に低いのに、それ

がほとんど表面にでてこない人がよくいるんです。暫く時間がたって、やっと教師の直感で、ジェスチャーとか、イントネーションとか、ボディ・ランゲージが表現している隠された問題を見ることが出来る。意識のレベルで、そういうメッセージを読むことも確かに助けになるんだけれども、やはり潜在意識で学生を理解しなければならない場合はあるんじゃないでしょうか。

第三の原則は、だいたい私達は脳の90数パーセントの部分は使っていないんです。これをロザノフは、リザーブ・コンプレックスと言っています。こうした脳の中の使っていない部分に働きかけて、学習を加速させるんです。

青木 学習の障壁には3種類あるということの本で読みましたけれども。

ミラー そうですね。まず1つは論理的障壁です。例えば、語学の教師が学生に、何千もの単語を練習もしないで、努力もしないで覚えることが出来るんだよと言ったら、学生は、そんなことが出来るわけはないと思う。ですから始めは、200語か300語ぐらい覚えられようと言う教師は学生の持っている論理的障壁を破壊しようとしては行けない。むしろ、自然の障壁と一緒に進んでいくことが大切なんですね。学生が、その教授法に論理的な疑問を持っても、懐疑的であってもいいような。

第二の障壁は、直感的障壁です。学生が、「この先生は、何か変なことをさせようとしているな。ちょっとつきあいたくないな。」と思うということなんです。教師は学生が変な気持ちを抱かないように授業を進めていかなければいけないんです。

青木 Sは、学生1人1人が、実際と違った名前と職業を選ぶわけですよね。学生の中には、自分自身ではなくて、他の人のように振る舞うことが好きではない人もいると思うんですけど。

ミラー Sはそういうことを強制している訳ではないんです。ただ、こういうことも出来るのが唆しているんです。そういうところで、教師の本能とか、直感が、大切になってくるんですね。1日目に自分の選んだ職業のことを、それ以降絶対に口にしない学生とか、役割練習をするのが嫌だという学生ってたくさんいるんです。嫌なら嫌で、それは構わないんで、座ってて、それで得られるだけのものを得てくればばいいんです。確かに、Sには、新しいアイデンティティを獲得するという側面があるわけだけれども、例えば、名前というのは、考え方によっては、マイ・ネーム・イズ なんとかという言葉の練習として捉えることも出来る訳なんです。学生には、それ以

上の重要性があると思わせてはいけません。悪い感じを持つんだらば、放っておいてあげなければならないんです。信頼感があれば、やがて学生が学習の障壁を乗り越える瞬間、ブレイクスルーといいますが、それが起きる確率が高くなる。ゲームをやりたくない学生がいたら、座ってみて下さいと言えればいいんです。ゲームって面白いですから、そういうことはあんまりないですけどね。

青木 ということは、必ずしも、インファンティライゼーションが起こらなくてもいいということですか。

ミラー よく誤解されるんですけど、インファンティライゼーションとゲームとは全然関係がない。ロザノフの定義によると、子供は、いろんな経験の中から、人間は信用出来ないと学んでしまうけれども、それ以前の段階では、人間に対して非常に開放的な信頼感を持っている。親に対して抱く信頼感ですね。インファンティライゼーションというのは、そういう種類の信頼感を権威のある人に対して持つことなんです。子供みないな態度をとるという意味ではないんです。

ゲームは、もし学生がそうしたければ、より直感的な方法で学ぶことにつながるんです。けれども、やりたくないと思う人には、別に無理してやらせる必要はない。座って見てればいいんです。ただ、日本では、ちょっと難しい。やりたくないと思っている人も、座って見ていくことにすごく抵抗があるみたいです。だから、グループの中の全員がそこにいることに居心地良く感じられるようになるまでに、より長い時間がかかる。アメリカでは居心地が悪いからといってドロップアウトする学生は一人も見えたことはなかったんですけど、日本ではそういうことは結構、起こる。

西洋の文化の中では、個の意識が非常に発達していますから、自分はこれは嫌だということをはっきり表現しますよね。日本の場合、そういうことがないので、私には、学生が何を考えているかという判断をするのが難しいんです。当惑する学生がいるのは、多分私が必要以上に何かを強制してしまったんだと思います。でも、こういう問題は、日本人の先生がうまく解決法を考え出せると思います。

青木 倫理的障壁の話をしてなかったんですけど、私の教えているアジアの学生の中には、勉強は、真面目に、一生懸命にやらなければならないものだと考えている人がいるんですね。だから、勉強を楽しむことが倫理的に悪いことだと感じることもあるみたいなんですけど。

ミラー そういうことは、アメリカでは出来のいい学生でよくありましてね、ピューリタンの倫理観がかなり影響しているかもしれませんね。本当に努力して得たものでなければ、得るべきではないと信じている人は、結構たくさんいるんです。そういう人がいたら、それは真剣

に受けとめてやらなければならない。そういう学生には、これは心理的な教授法で、今も一生懸命勉強しているだろうけど、もっともっと学習が進むようにできるんだといえます。Sの場合に、伝統的な暗記主義みないな勉強の仕方がうまくいかないとすれば、新しい勉強の仕方を教えてあげなければいけない。たとえば、教科書を家に持って帰って、寝る前とか、朝起きたばかりとか、特殊な心理状態にある時に15分間、本当に熱心な学生だったら、音楽も適当なものを探してきて、音楽をかけながら教科書読むと。ガリ勉しちゃういけない、信じなさいというんではないんです。それは、やはり、倫理的障壁に敬意を払っていないことになります。とにかく障壁と調和して真面目にとりあげていくことが大切なんだと思います。そうしないと学生は、きちんと自分のことを考えてもらってると思わないだろうし、この教授法から得るものも多くないだろうと思います。

青木 ということは勉強の仕方について学生と話し合うわけですね。

ミラー そういう時もありますけども、直接話さない方がいいこともあるんです。クラスで、この教授法で勉強できる量を獲得していない人がいるみたいな気がする。この教授法はものすごいブレイクスルーを皆さんに経験させることができるんだ。それは、一日の中のある時間に勉強することで得られる。そういうことを学生全体に言います。本当に難しい場合には一対一で話しますが、だいたいこういう非指示的なアプローチの方がいいみたいです。

もう一つ、倫理的障壁の中に、パーソナリティを守ろうという要素もあります。

青木 そうですね。例えば、日本人のビジネスマンなんて、どちらかというと、無口であると思われた方がいいというところがありますよね。

ミラー そうですね。大学生でも同じですね。Sはものすごく演劇的で遊びの要素が入っているから、ついていけないところがあるかもしれない。だから、内気な性格は尊重しなければいけない。性格を尊重するってすごく大切なことだと思います。大人は遊びに戻っていくのが恐ろしいんです。陽気だと言われているアメリカ人もそうなんです。例えば、コースの始めによくやるイス取りゲームは、知らない人同士が親しくなるのに効果があるし、自分自身やクラスメートに対して抱えている感情から自由になるという点でも良いゲームなんですけども、日本人のクラスの場合、全部に使っているわけではない。それぞれのグループにあったゲームを取り入れます。イス取りゲームには向かないクラスでも、勝負とか、チャレンジの要素のあるゲームは結構好きだったりするんですよ。

青木 次に、暗示としての学習環境について話していただきたいんですけど。

(cont'd on page 25)

NEW FOR 1988



THE CARSAT CRISIS

The Carsat Crisis is a 13-part film drama which teaches the English of science and technology at upper-intermediate level and above. The aim of the course is to help scientists, engineers and students of technical subjects to operate more effectively in English within their own specialist fields.

The video, shot on location in England and Germany, tells the story of a crisis in space. It features characters of different nationalities using English as a medium for professional and social communication. A wide range of settings, from formal conferences to relaxed domestic scenes, provides opportunities for the study of language and behaviour under differing circumstances.

- 2 videocassettes, 1 course book and 1 teachers' book

THE LOST SECRET

The Lost Secret is a book and video course intended for users whom its authors, Robert O'Neill and Martin Shovel, describe as 'false' or 'daring' adult beginners.

The video consists of an adventure story in 11 parts about a British archaeologist, Dr. Ross Orwell, who is an expert on an extinct South American civilisation, the Mepatecs.

With its strong, intriguing story, the video makes use of learners' interest in the unfolding narrative as a means of helping them understand.

- 2 videocassettes and 1 coursebook



INTERNATIONAL LEARNING SYSTEMS (JAPAN) LTD.

Matsuoka Central Bldg., 1-7-1 Nishishinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo 160 Tel: 03-344-3412 Fax: 03-344-3405

Osaka Office:

Osaka Ekimae Bldg. No. 4 15F, 1-11-4 Umeda, Kita-ku. Osaka 530 Tel: 06-347-4733 Fax: 06-347-4734

(cont'd from page 23)

ミラー まず第一に、教室を教室じゃないみたいな雰囲気にするということです。というのは、部屋の第一印象が、過去に教室という所で自分にどんなことができたかという記憶と結びついちゃうんです。それがストレスになることもある。だから、イスの並べ方も変える。小さいグループだったら、円になって座るとか、半円を作るとか。少し人数が増えたら二重の円をかくて座るとか。そうすると会話が成立しやすくなるし、グループの中にいるという感じがです。あとは、部屋の居心地の良さというのも大切です。

ロザノフは、暗示の一番大きい源泉として、芸術を挙げています。偉大な芸術家の作ったものは、調和に関して一つの原則を持っているんです。それには人の心の中にある攻撃的な要素を静めたり、感情を柔らかにする効果があるんです。レオナルド・ダ・ビンチの描いた絵とかギリシャの彫刻とかが学生のインスピレーションになることもあるわけです。

青木 そこに、文化的な要素は、含まれていると思いますか。

ミラー もちろん、それもあると思います。ただ、文化的な要素より大切なのは、あらゆる芸術が持っている普遍的原則です。黄金分割というんですが、この割合は、自然の中でもものが育って行く時の原理と同じなんです。例えば、巻き貝の大きくなり方は、 $1+1$ が2で、 $1+2$ が3で、 $2+3$ が5で、というようになっている。人間の体もそういうふうになっていく。だから、この原則は文化的、歴史的な背景に関わらず、全ての人に同じ効果をもっているわけです。

芸術と同じぐらい力があるのが自然です。本当だったら、ドアを開けたらその先に滝が見えるみたいな環境で教えることができたらい。それから、音の環境も大切。小鳥のさえずりとか、木の葉が風にそよぐ音とか、自然音の中にもメッセージがある。

音楽も黄金分割に基づいて作られています。ほとんどの音楽はオクターブに基づいているでしょ。 $1+1$ が2で、 $1+2$ が3で、その次が5で、8、これが、オクターブですよ。音楽のハーモニーも、自然の割合と同じ感覚で出来上がっていると考えていいと思う。だから、不協和音がでてきても、どこかにいって、それから元に戻ってくるという期待感がありますよね。バロック音楽は、こういう原理を守って作られています。古典派になると、もっと感情が勝ってくるから、元の場所に戻ってくるんだけど、そこからまた広がっていくところがある。

青木 美術とか音楽は確かに普遍的な要素を持っていると思うんですけど、本当に文化から自由なんでしょうか。例えば、ブライアン・イーノの環境音楽は、人をリラックスさせるために作られたものですよ。あれを教室で使ったことがあるんですけど、ある学生が、気

持ち悪いから止めてくれと言ったんです。

ミラー それは、面白いことですね。本当に調和のとれた音楽に対してでも、そういう反応を示す人はいるんです。理由はいろいろあるんですが、例えば、アメリカでは、バッハのオルガンは教会を連想させることが多いわけですよ。ある時それをかけたら、一人の人がすごく嫌がったわけ。後でわかったんですが、彼の両親はすごく押しつけがましいカソリックで、オルガンを聞くと教会へ行くのを強制された昔のことを連想するんだそうです。

ニュー・エージ・ミュージックとか、それから、Sをやっている人達の中で、ラルゴの楽章だけ使う人が多いですけど、そのことで私が心配しているのは、学生の中には、かえって不安を感じる人がいることです。ロザノフに聞いたことがあるんですが、ラルゴは深い催眠状態に人を導く効果があるんだそうです。そういう瞑想状態に入る準備のできている学生を相手にしている時にはいいけれども、準備ができていない学生には、ネガティブな性格をひきだしてしまうとか、まだその人に対決する力のない嫌な記憶を思い出させてしまうとか、病気を引き起こすことだってありうる。だから音楽は全曲かけた方がいい。第2楽章でラルゴがでてくるけれども、第3楽章でまたテンポが速くなるでしょ。で、深い瞑想状態に入ることを防ぐ。ニュー・エージ・ミュージックも、人を深い催眠状態に導く効果があって、そういうものに興味のない学生とか、心の準備ができていない、個人的な問題のある学生だったら、脅威と受け取られかねない。

物理的な学習環境で次に大切なのは色ですね。明るい色を使った方がいい。灰色がかった青とかはよくないんです。たとえば、何か大切なことを覚えてほしいと思ったら、紫色でふちどりをする。紫は高貴な色でしょ。黄色とか、そういう明るい色は幸福感とか陽気な雰囲気とかを引き起こすものだから、それが必要な時には使えばいい。赤はだめです。赤は人の血圧をあげるんです。カーベットが赤だったらまずい。そういうふうに、色やポスターの使い方にも教師は気づくようになってほしい。物理的環境というのは、もちろん、普通の教室と違って、事も大切なんだけど、それと同時に教師がどうコミュニケーションをしたいかを考えて、それを助けるような雰囲気にしとかなくちゃいけないということなんです。

それから物理的な環境でもうひとつ、ロザノフがこういう研究をしてるんです。実際に教えるなくても、学生は、たとえば壁にはってあるチャートの内容を学習してる。教師が時々それに無意識的な注意を向けさせることが、またさらにその効果を生むわけです。だから、文法のチャートなんか壁にはっておくといい。

青木 この頃、学習環境としての教師の役割ってことを考えるんですけど、▶

ミラー 学習環境は、ひとつには今までずっと話してきたような心理的な効果を狙ってるわけだけども、あともうひとつは、学生にとって何かを学習する時の手がかりの機能もあるんです。Sは伝統的な教授法と全然違って、かなり遊びの要素、陽気なところがあるわけだけれども、学習には儀式的な要素も必要なんです。そういう意味でコンサート・リーディングは真面目にやります。教師は背筋を伸ばしてゆっくり動く。社会的に重要な人たちは必ずそういう態度をしているんだそうです。ロザノフは記憶のテストをやっているんですが、有名な人の書いたものは、無名の人の書いたものよりも、よく暗記できるそうです。だから教師はエキスパートであることを示す責任があると思います。けれどもそれと同時に、遊ぶことを怖がらないで、リラックスして学生と一緒に床の上に座り込んで、話すこともできなくてはいけません。権威と愛情がいっしょに存在できなくてはいけません。ほとんど友達みたいなんだけど、本当に友達になっちゃうと権威が消えてしまうからいけない。それをロザノフは、ディスタント・インティマシー、一歩距離を置いた親しみという言葉で表現しています。



青木 Sは、クラスメートからの暗示を考えるんですか。
ミラー そうですね。クラスメートからの暗示はいいものも、悪いものも大きな影響があります。ですから、Sの教師の役割をひとことで言うとしたら、オーケストラの指揮者みたいなものだと考えればいい。さっき言った芸術作品とかを含めて環境を組織する。それから、グループの中のコミュニケーションを組織する。そういう意味での指揮者なんです。

青木 ということは、学習する事柄は、だいたい教師からでてる、クラスメートから何かを得ることはないと考えていいんですか。

ミラー はじめのうちはそうですね。ほとんどの人は、ブレイクスルーを経験して自分に自信を持てるようになってくると、はじめの頃よりはずっと簡単に言葉を拾うことができるようになってきて、教師が学生の世話をすることもそんなに必要なくなってくるし、クラスメート

からの影響も心配がないからクラスメート同士のインターアクションにも、自由を与えることができるようになってくる。そういう意味では、フォーカスが教師から学生の方に移っていきますが、始めのうちは授業の50%以上の部分で、教師がフォーカスされています。パーソナリティの問題で言葉を使うことができないとか、そういう問題に気をつけなくてはならないから。

青木 教師の役割で、心理学者ということをおっしゃっていますが。

ミラー 心理学者っていう言葉を使うのは、ひとつには教師がある分野の権威で、その場をコントロールしているということが、学生にとって模倣すべきモデルとして機能するということだと思うんですね。何か学習の障害になるものを持っている学生には、それが治療的であると言える場合もある。ストレスや頭痛を訴えていた学生が、Sのコースの後ではもっと自分をコントロールできるようになったという例はたくさんあります。学生達には偶然そうだったと感じられるでしょうけど、実をいえば、Sの教師が治療的な雰囲気、援助的な雰囲気をつくるようにトレーニングされているからなんです。非常に健康的な、楽しそうな様子をしている。学習に関してだけではなくて、生き方の問題としてそういうふうになっている。学生が、何かに対して不安を持っているとか、自分の能力に自信が持てない状態にあったら、Sの中の経験が教室の外の経験に転移することは充分ありうと思います。けれども、本当に深いところで心理的な問題がある場合には、Sはそれに対処できるものではないと思います。Sは心理療法ではないし、万能に効く薬ではないんです。

教師が心理学者であるっていうのは、非常に思いあがった言い方だと思うんです。わたしはSを知ってから8年間実践してきたわけですけど、心理学者である、本当に治療的であるということではできません。けれども、手段はできるだけたくさん学んだ方がいい。心理学を学ぶのはそのためです。特にグループ・セラピー、音楽療法、サイコドラマは応用の価値が高い。全ての教師がもっと心理学を勉強すべきなんです。心理学は、教育に本当に役に立つ学問だと思います。教師は学生に対してどういう影響を与えようかってことに全然アウェアネスを持ってない先生がたくさんいるんじゃないですか。

青木 最後に3つお伺いしたいことがあるんですけども。まずひとつは、学生がブレイクスルーを経験した後は、教師は必要なんでしょうか。

ミラー ま、いらないということだと思います。ロザノフによれば、本当のブレイクスルーの後は、学生は自分が何をしたいかわかっているし、学習へのアプローチを変えることで、もっとたくさん学習できるのを直感的に知っている。遊び心も持つことができるし、自分の記憶能力に安心感を持てるし、リラックスして、勉強してい

る時の自分をコントロールできる。だから個人としては教師はいらないことになるわけですね。ただ、サジェストペディアのコースの後で一種のクラブのようにして、クラスの人たちが定期的に集まり続けたことがあったんですが、学習という面では満足できる結果が得られなかった。Sは、グループによってはじめて成り立つ教授法ですし、それを組織する教師の役割が大きい。学習のための綿密なプランが必要なんです。そういう教師の役割はこの人たちには果たせなかった。

青木 自己学習とか、学習者のオートノミーって言うことがよく言われますよね。あれは、最終的には学習者が教師なしでも学習ができることを前提にしているわけですよ。

ミラー そうですね。それがいちばん大切なことだと思います。正式にトレーニングされたSの教師はやはり、その辺を狙うことになると思うんです。でも、いつもそういう結果が得られるわけではない。教師のトレーニングはいつでも理想的に進むわけではないし、グループにどういう人達が集まっているのかにも左右されますし。そういう意味では、オートノミーを考えるのであれば、Sよりも役に立つ教授法があるんじゃないかと思います。どんなブレイクスルーを経験したとしても、グループなり、教師に心理的に固着しているとすれば、学生はそこに依存してるわけですよ。たぶん、そういう意味でロザノフは、教師は学生と関係が近くなりすぎたはいけないうて言ったんだと思います。学生と近い関係を持つことは誘惑なんですけどね。

青木 ラルゴばかり使うのは危険だという話がありましたが、ヒューマニスティック・アプローチっていうのが流行っていて、低い声で話したり、ゆっくり動いたりというような催眠的なテクニックを使ったり、学生に触ったりとかする人もいるでしょう。ああいうテクニックにも危険性はあるんじゃないでしょうか。

ミラー そうですね。本当に気をつけてやらなきゃいけないんですよ。助けになりたいと思っていても、知らないうちに、学生を個人として敬意をもって扱うのであればやらないことまでやってしまうことが、よくあると思うんです。ニュー・エージ・ミュージックを使うとか、催眠的な動きをとるとか、学生に触るとか、そ

ういうことを流行であるとか、人気のあることからやるというのは、教師の職業的な見識に基づいた行為ではないという気がする。私達はもっと責任を持った行動をしなければいけないと思うんです。教師が学生にどういう影響を与えるのかを分かっている人がたくさんいる。教師との接触が、ひどく悪い経験でもあり得るんですよ。学生の中には、他人に触られるのが嫌いな学生だっているわけで、そういう学生に「だいじょうぶよ、私は、あなたのお友達で、こうやってそばにいて、助けてあげることができるのよ。」というようなアプローチをするのはいけないんです。

青木 それでは、最後なんですけど、Sに興味を持った先生方で、正式なトレーニングを受けるチャンスが無いとか、制約があって100パーセントSを取り入れられないとかいうときに、とりあえずやれることは何かあるでしょうか。

ミラー そうですね。ある程度のトレーニングは必要だと思うんですけど、私自身もやはりトレーニングを受ける前に、Sについて読んで、実験的にいろんなことを試していたので、そういう経験から言えば、音楽とか美術とか、グループ・セラピーとかに興味のある人だったら、そういうことを勉強して使えばいいのではないかと思います。ロザノフ・リストにある音楽を取り入れるとか。

青木 音楽とか、美術とか、安全なものから始めなさいということですね。

ミラー ええ、そうですね。そういうものは安全ですね。心理的な側面は、もう少し考えて使わなければいけないと思います。きちんとしたバックグラウンドがあればいいんですが、催眠とか超心理学は玩具ではありません。

☆ ☆ ☆

サジェストペディアの日本語の文献には次のものがあります。

- 壺岐節子(1987a) 「楽しい学習『サジェストペディア』
『日本語教育』 61号
- (1987b) 「サジェストペディアの考え方」
『児童英語21』 第7号
- (1986) 「サジェストペディア学習理論に基づく授業効果の一考察」 『産業能率短期大学紀要』 第19号

Abstract of INTERVIEW WITH ALISON MILLER ON SUGGESTOPEDIA

Alison Miller was trained in Suggestopedia by Dr. Georgi Lozanov and has been a Suggestopedia practitioner for eight years. She has taught both English and Spanish and trained teachers in Japan since 1986. In this interview she describes the principles of Suggestopedia and talks about how to harmonize with the students' logical, intuitive and ethical barriers; the physical learn-

ing environment (classroom setting, music, art, and colours); and the role of teachers. The interview was originally carried out in English and an edited version is available on tape from the guest editor. Send a 90-minute cassette tape and a self-addressed envelope along with ¥170 stamp to: Naoko Aoki, 2-17-26-201 Senzoku, Meguro-ku, Tokyo 152.

Are your students
having problems with listening?
Take a look at



Listen for It is particularly suitable for
Japanese students who have studied English for several
years but still lack the ability to understand
conversational American English.



Oxford™

American
English

To: OXFORD UNIVERSITY PRESS

3-3-3 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112 ☎ (03) 942-1101

Please send me a FREE inspection copy of *LISTEN FOR IT*.

Name: _____

School: _____

Address: _____
(Home/School)

Developing Self-Instructional Materials for JSL Learners

by Naoko Aoki, Sanno Junior College

Dickinson (1987) raises five justifications for self-instructional language teaching systems. They solve several practical problems learners often face: class scheduling, school location, and the failure of courses to meet specific learning purposes. They also satisfy the learning needs of individual learners who differ in aptitude and cognitive and learning styles. They improve learning efficiency, develop learner autonomy, and stimulate motivation. Learners can learn how to learn foreign languages through self-instruction.

Unfortunately systems, as described by Dickinson in support of self-instructional language learning, are not available to learners of Japanese in Japan. The following are some suggestions for foreign language teachers who are learning Japanese as a second language and who may be interested in developing their own self-access learning materials.

Most of the following activities require one or two Japanese informants. The informants do not have to be language professionals so it is possible to recruit some of your students to help you learn their language.

For Beginners:

TPR

Prepare a list of TPR instructions in your language and ask your informant to give you the instructions in Japanese. Divide the list into smaller sections so that you can control your pace of learning. (You can ask your informant to give you the instructions for items in a particular section or in a combination of sections.) Record the instructions for your revision.

Task Listening

『暮らしの中の日本語』 is a text of beginner task materials. It contains monologues you may hear every day: announcements in department stores and train stations, weather forecasts, and the news.

As a pre-listening activity, predict vocabulary that you may come across in the recorded passage by looking at the visual cues on the task sheets. If you do not have the words in Japanese, make a list in your language and get your informant to give you the Japanese equivalents. Read through the task sheets. (Again your informant can help you by giving you the *kanji* readings you are not familiar with.) Listen to the tape. (The book does not provide any key to tasks or tape scripts.) Ask your informant to prepare key and scripts so that you can check the answers yourself.

Dialogues

Stevick (1986:24-25) suggests a question technique for help in forming verbal and non-verbal images of a dialogue in the learner's mind. For every line of dialogue you have three types of questions: a picture question, such as whether the speaker was seated or standing (these have no right or wrong answer); a function question, to clarify the speaker's intention in using the phrase spoken; and a rephrasing question, to look for other ways to express the same intention. This technique could be used with any model dialogues from Japanese textbooks. Get a friend who is also learning Japanese and listen to the tape as you read the text. Discuss the answers to the three questions for each line of dialogue and check your conclusions to the last two questions of each set with your informant, in any language, before you actually act out the dialogue. This demands of your informant a little more sophisticated sense of language than the activities described above. Choose the right person.

The usage drills in "An Introduction to Modern Japanese," which are meant to be practice of the target structure in conversational discourse, are one of the resources that can be effectively exploited with this technique.

For Intermediate Learners:

Pair Work

Most pair work activities are adaptable to self-instructional learning although you will need a partner who is on a similar level of language competence. Ask your informants to carry out the same activity in Japanese. Observe and record the session to provide you with the language for the speech acts necessary in the activity. The following are adapted from activities in **Keep Talking** (Klippel, 1984). (The numbers after the names of the activities correspond with the activity numbers in the book.)

Most Names (20): Think of a famous person and have your partner guess who you are by asking you yes/no questions. Take turns until you begin to lose interest in the exercise.

What are the differences? (30): Get two copies of the same cartoon. Each person makes three to five minor changes to their cartoon without showing their partner by penciling in elements or deleting them with white-out. Ask about each other's cartoon and discover what has been changed.

One day in Tokyo (96): It is a beautiful Sunday morning, but both of you forgot to go to the

bank on Saturday and all you have is ¥2,000 each. The good thing about it is that you have plenty of food in your refrigerator. Discuss how you would like to spend the day together.

Close Reading

Photocopy a text of not more than 800 Japanese characters that you can understand and white out every seventh character. Read the text aloud as if every character were there. Get your partner to help you from the original in case you get stuck. This student-student correction technique is from *Self-Access Pair Learning* (Ferguson & O'Reilly, 1980). When you are confident in reading it, fill in the missing characters and check it against the original. This technique can be used with any reading materials. 日本語表現文型 中級 I、II has many short passages with different topics and discourse complexities together with the *kanji* readings at the end of each chapter. It does not, however, give any clues as to what the topic of each passage is and the learner must figure it out for him/herself.

Project Work

Find an expert in the field you are interested in. Prepare questions to ask the person in advance, perhaps with the help of a bilingual informant. Make a list of the technical terms you might come across in your own native language and find the Japanese equivalents with the help of your informant or the dictionary. Carry out an interview. It does not matter whether you completely understand the interviewee at this stage. As long as you know when to provide back-channel feedback (Aoki, 1987b), the person will keep talking until he has finished what he has to say. Record the interview and listen to it whenever you are in the mood. The results can vary: you may build another association in your semantic network, you may analytically process a structure, or you may pick up a discourse marker. In any case, you will gain a feel for professional discourse with this task.

For Advanced Learners:

News

Record a news programme for one week. (The late evening news around 11 p.m. is good because it is better prepared and each news item is fairly short.) If you have access to video equipment, all the better. Choose one current topic to follow. Prepare a list of key words that may appear in the commentary on the topic. Have your informant provide you with the Japanese equivalents to the key words, perhaps from newspaper articles on the same topic, and transcriptions of the chosen news items.

The simplest task is listening for the key words you listed and counting the number of times they appeared in the commentary. Check

it with the transcription. Supplement the list, if necessary.

Next is extensive listening for global information: when, where, who and what. Use the knowledge acquired through your own language to support your comprehension of the topic. Check your results with the transcription.

Read through three or four days' worth of transcriptions and look for register, style and discourse patterns that repeatedly appear. If any of these features are not clear, discuss them with your informant.

For the remainder of the recorded items on the topic, construct questions for information you would like to obtain through the news, listen for the answers, revise the questions if necessary, and check your answers with the transcription.

Exchanging your questions with somebody doing the same set of activities on different news items is a good way of extending this exercise.

References

- Aoki, N. 1987b. Nods, Gaze, Ees's and Haa's: On Japanese Turn-taking Mechanisms. *The Language Teacher* 11(6).
 Asher, J. J. 1986. *Learning Another Language Through Actions: The Complete Teacher's Guidebook*. 3rd ed. Sky Oaks Productions.
 Dickinson, L. 1987. *Self-Instruction in Language Learning*. Cambridge University Press.
 Ferguson, N., & O'Reilly, M. 1980. *Threshold*. CEEL (available from Didasko).
 Ferguson, N., and O'Reilly, M. 1980. *Self-Access Pair Learning*. CEEL (available from Didasko).
 Klippel, F. 1984. *Keep Talking: Communicative Fluency Activities for Language Teaching*. Cambridge University Press.
 Mizutani, O., & Mizutani, N. 1977. *An Introduction to Modern Japanese*. The Japan Times.
 Stevick, E. W. 1986. *Images and Options in the Language Classroom*. Cambridge University Press.
 筑波大学日本語教育研究会編 1983『日本語表現文型 中級 I、II』凡人社
 お茶の水中国語同者日本語学校 1986『暮らしの中の日本語』凡人社

JALT RESEARCH GRANTS

JALT annually offers small grants for research or the development of experimental materials. Contact the JALT Office for specifics.

HAVE YOU CHANGED JOBS RECENTLY?

The JALT Central Office needs to keep its computer files up to date. Please inform us of your new school/institution's name and telephone number at your earliest possible convenience.

Discreet Correction and Dictation

by Mario Rinvolucrí

Can I ask you to think of the last two or three times when you gave someone a piece of good advice? It may have been to a family member, a friend, or to someone at school. Do you happen to know the result of your advice-giving? Was the advice relevant to the person, in **their eyes**?

Can you recall people recently giving you advice? You may have immediately rejected the suggestions made, postponed thinking about them, or you may have embraced them eagerly and acted on them.

All I am saying is that giving advice and receiving it is a complex business. As I write this article, I am very much aware that I am setting out to give advice on pedagogical matters and yet I don't know you, your state of mind as you read this, or how you normally react to advice.

With your students you have the advantage of knowing them. So when you correct their mistakes, you can observe their reactions to your advice. I know that with my own students, individuals react very differently to styles of correction. Take the correcting of a written script: I have had students who have told me: "I like the way you write the correct words in the margin – my other teachers just underline the mistake and expect me to guess what it is." When I have used underlining and writing a code in the margin like G = grammar, SP = spelling, students have said to me: "Your system makes me think, I have to understand what's wrong." In other words, any style of correction is going to fail to reach some of the people in a given group so it is important to have a wide range of techniques up one's sleeve. To always correct the same way is to continually miss the boat with one or another student. What follows is a look at some of the new correction techniques that Paul Davis and I have read about, learnt or come up with in working with elementary and intermediate students over the past three years.

1. Dictate to the teacher

In this exercise the student is put in a position to correct her own pronunciation mistakes herself. If she really can't see what's wrong, the others come in and help. The teacher's role is to wait, to watch and to remember what has gone on. The teacher is not involved in the active correction process. This way of correcting their own mistakes really appeals to some students and mistakes corrected this way sometimes reappear less frequently and wither away.

- Take a story a few sentences long, preferably one with a strong narrative line and a problem to solve. Chop it into separate sentences and give these out to students round the class.

- Tell the group their task is to dictate the story to you at the board. The student who reck-

ons she has got the first sentence reads it out. You take it down exactly as she says it:

"John and sirteen oser men were
shipwreckED on a desERT iSland."

Ask the student if she is happy with what you have written. Tell her she can correct what you have written by pronouncing correctly. Only accept pronunciation suggestions from others in the class if the dictating student can't see what is wrong for herself. As far as possible let her find the right pronunciation in her own mouth. After all, only **she** can get it right for her.

The student who reckons she has the second sentence in the story dictates it to you and the same correction process is repeated, if needed. You have to be quick off the mark the first time you do this to find clear ways of transcribing what the students say so they can see the mistakes in writing. The mirroring of mistakes made in speech in the medium of writing is quite a powerful way of allowing the student to see her mistakes in a different perspective.

If you feel like using the above correction technique, here is a possible story for intermediate level:

John and thirteen other men were shipwrecked on a desert island.

As the island was nothing more than a rock in the ocean, the men began to starve.

One day John woke up and the others told him the thirteenth man had drowned.

They also told him they had trapped an albatross and were going to eat it.

A month later John and the remaining twelve men were rescued.

The first thing John did when he got back to his hometown was to go to a restaurant.

He ordered an albatross stew.

After one mouthful he got up, paid, and left the restaurant.

The moment he got outside the door he shot himself.

(You'll find more of this kind of story in ***Towards the Creative Teaching of English***, edited by L. Spaventa, Heinemann, 1980.)

(John shot himself because restaurant albatross tastes different from "thirteenth man" stew.)

In "Dictate to the teacher" the students work on their own pronunciation independently – they grope towards feeling the right pronunciation in their own mouth and throat muscles. The teacher offers no model. This exercise fits with the model of Montessori discovery learning and the kind of language work proposed by Caleb Gattegno, the originator of Silent Way teaching.

Some students don't like it. They don't like working on their own pronunciation in front of the whole group. They feel exposed. Maybe for

them more 'secret' techniques work better. No one technique is good for everybody.

2. Pass the buck

In this exercise students work on listening and spelling and each person has a chance to correct the next person's work. While in the previous exercise one student works as protagonist in front of the others, in this one each person is given technical help by several classmates as a highly social form of correction in which people are interdependent, working together to achieve a correct final text.

Here's the procedure:

- Dictate the first sentence or clause of your text.

Ask the students to pass the paper they have written on to the person on their right. Each student looks at the writing s/he has received and **underlines** any mistakes.

- Dictate the next bit of text. Students pass papers to their right. Each student **corrects** any mistakes in the first bit of writing and **underlines** any in the second bit.

You dictate the third bit, etc.

At the end of the dictation, ask each person to check all the sentences before giving them out a text to check against. This kind of dictation is well done on a passage from the coursebook you are using,

In some classrooms the above technique may seem very odd to the students. The teacher is assuming that they have the criteria to judge each other's work and invites them to do so. The best students are being asked to work hard to bring up the level of text produced by weaker students. The process is subversively social and collaborative if you compare it with the traditional classroom where we all faced the teacher side by side but isolated from one another. "Pass the buck" carries an educative message as well as being one of the most technically active forms of dictation I know.

Like any technique it isn't right for all situations. I remember a class in Cambridge in which I had a mixture of Arabic and Japanese speakers. The former were rather good at oral language while the latter were much better writers and spellers. I used "Pass the buck" with the group and soon noticed the Japanese showing signs of despair at the plethora of Arabic speakers' spelling mistakes. The technique was not right for this group as the technical gap between one group of students and the other was too great. With the Arabic speakers I would have done well to try the idea that follows.

3. "I'm sure to get it wrong/right"

- Choose a short passage from the last unit of the textbook the students have worked through.

- Remind them of it and ask them to try and

remember which were the words in the passage they would find hard to spell. Each student makes a list from memory. They compare lists and look the words up in the dictionary.

- Give them the dictation.

- They compare with the original text.

This technique, which I learnt from Adrian Underhill, is in Silent Way style thinking. Each student is asked to decide for himself what is going to be hard for him in the exercise ahead. He then focuses on these points, plies his dictionary and forearms himself. He is learning, and planning his own learning. He takes responsibility while the teacher observes. The exercise has a delightful paradoxical side to it, as the student will mostly get things right precisely because he was able to predict he would get them wrong! Like the marvellous paradox quoted by Fanselow in **Breaking Rules**: "For God's sake shut up so I can hear what you're saying!"

I have had plenty of students for whom this overt, serious way of going about things was wrong. Margarita from Madrid in the summer of 1985 simply refused any form of systematic work on any of her mistakes. She wanted to and needed to use language and let the mistakes pour out. Over an intensive two-week course I noticed that she stopped making a whole range of mistakes. They simply dropped away and certainly not as a result of systematic work by me or her, **consciously**. She replaced the set of mistakes she made the first week with others that were contingent on a richer and more advanced use of language. Overt, serious, sensible work on accuracy is a waste of time for people like Margarita.

4. Look up left

You may tell me that an acceptant attitude to students like Margarita is no use in a rigid secondary school system where all students, whatever their learning ways, have to take accuracy-focused tests. If they do badly on these, they have to repeat the year. Maybe one can reach the Margaritas by using this technique we learnt from Herbert Puchta, an Austrian secondary school coursebook writer:

- He pulls all the hard-to-spell words out of the text he is going to dictate, and puts them on large cards.

- He stands on a chair at the front-right of his classroom, from his point of view, and holds up the first hard-to-spell word. The children have to look up and to their left.

- He tells the children to write the word they have seen but working **backwards**.

Then he gives the dictation. They take this down normally.

What Puchta is doing here is working with parts of the students' sensory and cognitive apparatus that they themselves are not aware of. Researchers in Neuro-Linguistic Programming,

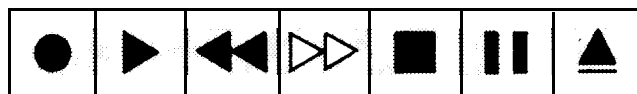
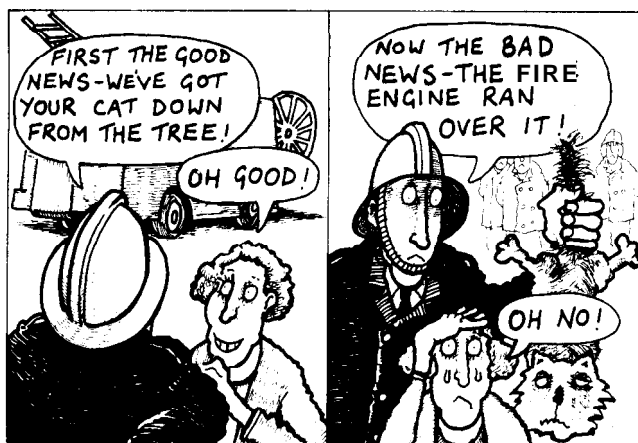
(cont'd on page 34)

FAST FORWARD

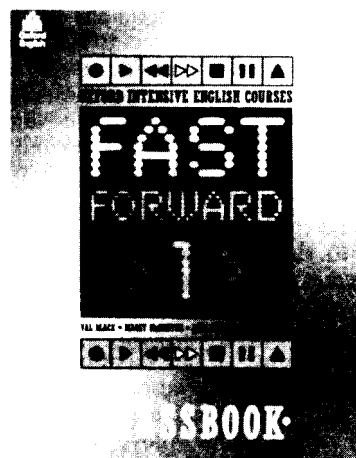
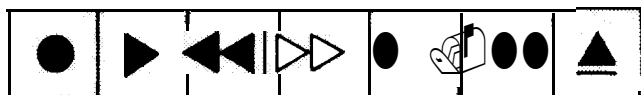
– The course that lives up to its name –

Fast Forward is Oxford's functional course for false beginners. Among the functions covered is:

Making the appropriate response.



Use the coupon below to order your **FREE** copy of **Fast Forward** – the course that lives up to its name.



To: OXFORD UNIVERSITY PRESS

3-3-3 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112 ☎ (03) 942-1101

Please *send me a FREE inspection copy of FAST FORWARD.*

Name: _____

School: _____

Address: _____
(Home/School) _____

(cont'd from page 32)

like Bandler and Grinder, have established fairly clearly that when a person is operating visually and trying to recall an image, it is normal to look upwards and to the left. To take down a dictation a person needs to assess her powers of visualisation, to see the spelling of the words. Hence the place Puchta stands in the room.

The reason for asking people to take the words down backwards is to jerk them into really *looking* at them. For some people words are much stronger auditorily than on the page.

Puchta's technique is relatively new in my classroom work and I have not yet discovered who are the students for whom it is ineffective. By definition there have to be some.

5. Secret correction

In my own mind the most effective correction techniques are those in which the person corrected is unconscious of being corrected. All teacherly correction has a paternal or maternal tinge to it, and for some adolescent students this is negative. Among adult students I have often noticed that the people who most clamour for heavy teacher correction are those least able to internalise it and make it part of their own unconscious system.

A good example of secret correction is when the teacher writes letters to his/her students. The teacher writes a letter to "Dear Everybody" and each student who wants to replies. The teacher then replies to each individual (a lot of work, but rewarding and interesting). The teacher does not return the students' letters to them and certainly does not correct them. To do so would be to wreck the correspondences. The teacher's letters offer the student a model and very often the student 'steals' grammar, phrases and words from the teacher's letter in replying to it. When a Greek student of mine wrote about the "1922 micro-Asiatic expedition," I naturally referred in my reply to the "1922 Asia Minor campaign." This was secret correction in the sense that the student was reading my letter for content and yet was picking up the correct form of the phrase she had got wrong. If she was one of those people *who* dislikes being corrected in this instance, there is a good chance that her defences were circumvented. The above should perhaps be called 'incidental' rather than 'secret' correction.

Let's look at a composition and dictation technique that involves secret correction:

- Ask each student to write five sentences about HOME.

- Take in the students' papers, scan through them, and pick out 10-15 sentences which are interesting and which contain errors.

- Tell the students to rule a piece of paper into three columns with these headings:

I agree	Few people in my family would agree	I disagree
---------	--	------------

Tell them you will dictate some of their sen-

tences back to them. They are to take them down in the most appropriate column.

- Dictate the sentences, reformulating and correcting where necessary. Only the person whose sentence it is will perhaps notice that you are correcting. If s/he *does* notice, s/he will have the extraordinary feeling of having been corrected in the presence of the group but secretly!

- Ask students to share their categorisation of the sentences.

Both the activities described above fail with certain members of a group. In my classes there are always some people who really don't want to write letters. They find it artificial to write to someone they see every day. Normally their distance-communicating is done by phone or telex. Letters give them a feeling of retreating into the 19th century. There are people who don't want to *write letters to me*. In any small class of 15 there are three or four people for whom I am the wrong correspondent.

The HOME exercise does not appeal to students who feel that you mostly learn a foreign language from working on external text, from the book, from newspapers, from literature, from video. People like this have a tendency to feel badly about working on text generated within the group. They feel they want to be fed from outside.

Choosing the right technique

Twenty years ago the problem for the language teacher was that she had a very narrow range of classroom activities available to her. Take dictation as an example. How many ways of using dictation did most of us teaching in 1968 know? I had heard about traditional dictation (read once through, dictate, read again) and cloze dictation (the students write in the missing words in a gapped text as the teacher reads). I was completely unaware that the techniques outlined in this article might even be worth searching for. Dictation to me then was simply dictation. I lived in a *technically* very unaware and uncreative way in 1968.

All that has changed. Language teachers now have a vast range of technical alternatives to choose from. The practitioner's skill now lies in choosing the best instrument for working with a given student or a particular group. All techniques, like most drugs used by doctors, have undesirable side-effects for some students, or are inappropriate to a particular person's way of learning.

When I am teaching a class nowadays, a lot of my preparatory thinking revolves round the right activity to choose for this particular group at this moment in the course. Three things I have to bear in mind are: language considerations, the dynamic of the group, and individual learning styles. Most of my lessons are compromises reached after weighing the above factors against each other. ►

Dictation Ideas

Paul Davis and I have enormously enjoyed dreaming up a new methodology for dictation. The strength of many of the ideas lies in their simplicity, e.g.:

- Students take dictation from their own voices in the lab.
- Students type their dictation into a computer which gives them feedback.
- Students take dictation from one of three voices they choose the voice they prefer, e.g. a child of ten, a baritone actor, an old lady.

Mario Rinvolutri, of the Pilgrims School in Canterbury, England, will be one of the main speakers at JALT '88 in Kobe, and will also be one of the presenters in the pre-conference workshops. He has visited Japan before and given workshops and talks in several cities, so he is already well known to Language Teacher readers. His presentations are often on the teaching of grammar, correction techniques and dictation. Among the texts and resource books he has authored is Dictation (with Paul Davis, CUP, 1988).

Children and ESL: INTEGRATING PERSPECTIVES

"We are writing to classroom teachers, both mainstream and ESL, to those who educate classroom teachers, and to those who study teachers and children working together in the classroom."

Edited by Pat Rigg and D. Scott Enright

ESL Teachers as Language Advocates for Children.. Courtney Xazden

ESL Children's Writing What We've Learned. What We're Learning Sarah Hudelson

Reading in ESL Learning from Kids Pat Rigg

A Children's Story Carole Uza

Use Everything You Have to Teach English. Providing Useful Input to Young Language Learners D. Scott Enright

\$1 00 members. \$12 50 non-members. plus \$1 50 postage

Teachon of English to Speakers of Other Languages
Suite 205, 1118 22nd Street NW, Washington, USA D.C. 20037

VIDEO GROUP RECOGNIZED BY TESOL

At the 1988 Annual Convention of TESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages), the Executive Board voted to recognize the TESOL Video Group as an official unit of the international organization. At a meeting of the TESOL Interest Section Council, delegates voted against giving full-fledged interest section status to the group at this time. However, at a later meeting in Chicago, the TESOL Executive Board awarded the videophiles official "group" status with responsibilities including:

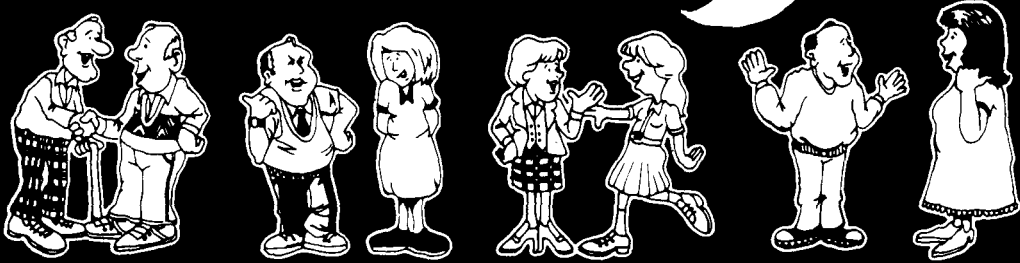
- up to 5 refereed presentations at TESOL annual conventions
- responsibility for overseeing the Video Theater
- a \$200 fund for communication expenses
- a Video Hospitality Room at TESOL '89 in San Antonio, Texas
- official recognition as an integral part of TESOL

Video was very much in the convention picture at the TESOL '88 in Chicago. Over 30 presentations either used video as part of their sessions or were specifically concerned with the production and use of the medium in ELT. Additionally, a video hospitality room made possible informal screenings of video materials and frequent small group meetings and discussion among video enthusiasts. A colloquium, "Video in Language Teaching: Is the Medium the Method?", sponsored in cooperation with the IATEFL (International Association of Teachers of English as a Foreign Language) Video Special Interest Group, brought users and producers together to provide an overview of the history of ELT video as well as a look at current research and pedagogical approaches.

At a business meeting of the TESOL Video Group in Chicago, members selected Susan Stempleski (Hunter College of the City University of New York) as Chair, and Paul Arcario (LaGuardia Community College of the City University of New York) as Associate Chair. Important projects launched at the meeting include a database of existing ELT video materials and a library of classroom and teacher-training videos to be made available on loan to TESOL members. The *Video Newsletter* will continue to be published under the editorship of Paul Arcario.

Membership in the TESOL Video Group is open to TESOL members who have signed the petition to form a Video Interest Section in TESOL. For further information and copies of the petition form, please contact: Susan Stempleski, Hunter College IELI, 1025 East Building, 695 Park Avenue, New York, NY 10021, U.S.A.; tel. 212-772-4290.

What's
Everybody
Talking
About?



SIDE BY SIDE

A Complete Communicative English Program

Books 1, 2 or Split-editions 1A, 1B, 2A, 2B

Workbooks, Tapes, Teacher's Guides, and
the Reading/Writing companion text:

Line By Line

Steven J. Molinsky & Bill Bliss

Go Ahead... Make Our Day! Ask Us For A Copy!*

*Please specify full or split-edition, and number.

HARRY T. JENNINGS

NAOTO ONO

PHR

PRENTICE HALL REGENTS

Prentice Hall / Regents of Japan

Jochi Koimochi Bldg., 3F, 6-1-25 Kojimachi, Chiyoda-ku, Tokyo 102, JAPAN

東京都千代田区麹町6-1-25 上智麹町ビル3階

Telephone (03)238-1050 Fax (03)237-1460 Telex 650 295-8590

(For telexes from outside U S precede with U S Access Code 23 from most countries)

JALT News

NEW NATIONAL PROGRAM CHAIRPERSON



John Laing

Gary Wood, who served diligently as National Program Chairperson since January, 1987 and in a number of national and chapter positions previously, returned permanently to the United States with his family last February.

The Executive Committee has elected John Laing, of Shizuoka, to serve out Gary's term (through December, 1988).

John Laing, Tokai University Junior College, 101 Miyamae-cho, Shizuoka 420; 0542466861.

C

NARA CHAPTER RECOGNIZED

The petitioning group from Nara was officially recognized as JALT's 32nd chapter at the May Executive Committee meeting which was held in Kobe on May 28-29. The group had met all of the requirements for recognition for chapter status - with 25 or more members, an acceptable constitution and by-laws and an officially constituted executive committee - all one month prior to the Executive Committee meeting, as stipulated in the national by-laws. Congratulations!

NARA CHAPTER OFFICERS

President: Denise Vaughn, New Shiba Heights 205, Shiba Machi 2-5-5, Saidaiji, Nara 631; 074249-2443

Recording Secretary: Cathy Duppenhaler, 7-651 Otda-cho. Ikoma 630-02; 07437-6-8730

Treasurer: Bonnie Yoneda, 470 Misasagi-cho, Nara 631; 0742-44-6036

Membership: Kathy Yamane, Aoyama 742, Nara 630; 0742-22-5326

Publicity: Yoshihiko Yamaguchi, 305 Sanwa Mansion, 10-10 Akashino-Satsuki-cho, Nara 631; 0742-35-2699

Facilities: Julie Carpenter, 369-6 Tawaraguchi, Ikoma 630-02; 07437-4-7970

Program Chair: John Williams, 1-20-16 Shichijo Nishimachi, Nara 630; 0742-45-6872



ASSOCIATE MEMBER REPRESENTATIVE SLOT CREATED ON EXECUTIVE COMMITTEE

The Executive Committee, at its May meeting, created a position of "Associate Member Representative" to the JALT Executive Committee.

This representative, to be chosen from among the four largest Associate Members based on their financial contribution to JALT in the previous year, shall receive all mailings sent to the Executive Committee and be able to participate in the decision-making process with voice, but no vote.

The position was created out of recognition of the need for direct input from the Associate Members on policies which might affect them such as conference planning and advertising rate changes.

JALT NATIONAL AND LOCAL ELECTIONS FOR 1989

Once again it is time to start the nomination and election process. Procedures for 1989 officer elections are outlined below.

National Elections

National elections for the positions of Vice-President, Recording Secretary, Program Chairperson, and Public Relations Chairperson for 1989-1990.

1. A postage-paid postcard for recommending candidates for nomination to both local and the above national offices is included with this issue of *The Language Teacher*. Please fill it in and mail it in time to arrive at the JALT office by July 20. Joint and group members who receive only one card for two or more members may make photocopies and mail them in an envelope.

2. Immediately after the July 20 deadline, the Nominations and Elections Committee will send each chapter a list of those recommended for nomination to national offices.

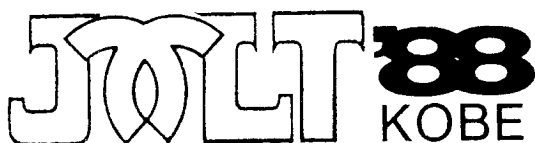
3. The chapters, using these recommendations, plus any suggestions received from their own memberships, should submit by Aug. 20 a slate of no more than one nominee per position to the chair of the Nominations and Elections Committee. The Acting Chair for the Committee will be Sonia Yoshitake, 1-14-22-609 Tanaka-cho, Higashinada-ku, Kobe 658; tel. 078-412-2866.

4. The Committee will confirm the willingness of each nominee to run for office, then present a list of nominees to the JALT Executive Committee at its meeting on Aug. 27-28. The Executive Committee will review the list of nominees, making adjustments and/or additions, but no deletions. The nominees will again be contacted and the final slate of nominees will appear in the November issue of *The Language Teacher*.

5. The November issue of *The Language Teacher* will also contain all relevant voting information, plus a postage-paid postcard ballot. Information on how to submit secret ballots will also be provided.

6. The deadline for voting is Nov. 20. The results will be announced in the January 1989 issue of *The Language Teacher*.

(cont'd on page 40)



CONFERENCE UPDATE

Things may seem a little quiet on the fronts this month, but under that serene surface is a beehive of activity. The program committee is busy sorting through proposals and finalizing details with invited speakers, the conference services committees are identifying needs and rallying volunteers, and the fund raising committee is seeking sources of support that will allow us to help bring people to the conference who could not otherwise afford to come. The details are slowly sifting into place and JALT '88 is taking shape nicely.

V

Pre-Conference Workshops

Final committee approval has been given for pre-conference workshops to be held on Fri., Oct. 7, the day before the opening of the main conference. This will be the first time that JALT has offered pre-conference workshops, and it represents a significant enhancement of the conference program. At least six workshops will be offered, with a selection of topics. Each workshop will last half a day, some to be held in the morning, the others in the afternoon. Participants will be limited to 25 for each workshop, to be accepted on a first-come first-served basis.

The workshops will emphasize practical training, and will give participants the opportunity for small-group hands-on activities. They also provide the chance to get to know some of the conference speakers through direct personal contact, in action on some of the aspects of language teaching that these specialists feel most strongly about.

Some of the workshops are already settled as to presenter and topic, though the exact schedule has not yet been worked out. Conference main speaker Mario Rinvolucris will be doing a workshop on **Correction Techniques**. Sonoko Mizuta (Interlink Educational Systems, Tokyo) and John Ratliff (Ibaraki Christian College, Hitachi) are offering a workshop on **Bringing Intercultural Communication into the English Language Classroom**. The British Council will sponsor a workshop on using **video for language teaching**, but the speaker is not yet determined. Other topics will probably include the teaching of grammar by non-native-speaking English teachers, and teaching with computers. The final schedule and list of topics and presenters will appear in the August issue of *The Language Teacher*.

Persons interested in participating will be able to indicate this on the conference pre-registration form, which will also come out in the August LT. The fee for each workshop will be ¥3,500. The 25 openings may get filled up very quickly, so begin now to make your plans to take advantage of these pre-conference offerings.

V

New Members Campaign

Don't forget last month's announcement of bonuses for JALT members who bring new members into the Association in connection with the conference: For every new member (up to 5) you convince to take out membership in JALT, you will receive a ¥1,000 discount from your conference registration fee. Now, isn't that an attractive deal for both you and the Association?

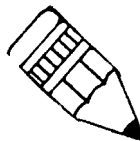
V

Opportunities for Volunteers

There are still openings for volunteers to contribute to the success of the conference by: 1) leading a discussion group at the end of the program day; 2) guiding dinner groups with a conference speaker at one of Kobe's famous restaurants; 3) accepting conference participants for homestay in your home if you live nearby, on Port Island or in Kobe proper, and many other ways that will help to make this a really good conference.

Contact Terry McDonough to lead a discussion group: (078-801-8835); call Michiko Inoue to head a dinner group (06-323-1153); get in touch with Natsumi Onaka if you can take in a homestay guest (0196-54-5410); or call the JALT central office or the conference chairpersons to offer any other kind of help.

See you next month with a lot more information.



Registration Information

Registration information for JALT '88 will appear in the August and September issues of *The Language Teacher* with the deadline for submissions being Sept. 1. If you will be out of the country for the entire period, please contact the JALT Office for an advance copy.

My Share

As language teachers, we all come up with our share of ideas and activities. We also use our share of ideas from other teachers. My Share is your opportunity to share your ideas and activities. Articles dealing with activities for classroom application should be submitted to the My Share editor (see p. 3). Articles should be based in principles of modern language teaching and must follow JALT manuscript guidelines. Please include a 25- to 30-word biographical statement.

学習者のニーズに見合う応用練習

～インドシナ難民に条件表現を教える場合を例に～

(Pattern Practice That Meets Students' Needs: Teaching Indo-Chinese Refugees Japanese Conditional Verb Forms)

国際救援センター

増田みどり

(Masuda, Midori)

1. 授業目的

在日インドシナ難民は3か月(429時間)の日本語教育を修了すると、数か月以内に就職し、庇護されていたセンターを退所しなければならない。従って、この教育現場で日本語教師に求められるのは、3か月という短い期間内に彼等に退所後すぐ役立つ語彙・表現を与え、運用力を会得させることであろう。

しかし、主教材として一貫して使われている『日本語の基礎』は特に難民を対象に作成されたテキストではなく、現行の日本語教育の場で一般的な、グラマティカル・シラバスを採用しており、オーディオ・リングルの哲学を踏襲している。従って、知識としてではなく、実際のコミュニケーションの場で生きた日本語の使用を要求される彼等に対して型通りの手法でこのテキストを使っているのは、彼等のニーズに十分応えることは難しいというのが実感である。

そこで、時間及びテキストによる制約の中で、彼等が現実に出会うであろう場面を設定し、実践的な練習を与えて、少しでも実生活に役立つことを教えるという目的で、筆者は次のような応用練習をしばしば授業に採り入れている。

2. 授業内容

条件表現「たら」「ても」を教える場合を例にとると、まず、オーソドックスな方法で導入と文型練習をし、その後、学生に彼等の就職について話す。ここで、給料・月給・ボーナス・残業・社員・寮などの雇用条件に関する語彙を与えながら、日本の雇用制度及び難民の就職状況についても、易しい言葉で少し説明する。給与からの天

引きなどを知らないために雇用主とトラブルを起こすケースもあるからである。

さて、応用練習は、職業相談員に対して自分の希望条件を示すという設定で行なう。まず、事前に提出していた語彙を含め、以下のように品詞別にキューを出し、「～たら、働きたいです。」への単純な変換練習をさせる。

- ・いい会社だ／面白い仕事だ／月給が15万円位だ
- ・社長が親切だ／仕事が簡単だ
- ・月給が多い／残業が少ない／仕事が面白い／女の社員が多い
- ・同じ国の人がいる／寮がある

次に、「たら」への接続を否定形にし、「～なかったら、あまり働きたくないです」を練習させる。同様に、「ても」の練習を行なう。その後、キューを与えず、学生各自に希望条件を言わせる。そして、いよいよ、教師が職業相談員の役で学生と次のようなやりとりをすることになる。

1) 教師：この会社はいい会社ですよ。ここで働きますか。

学生：仕事が面白かったら働きたいです。

2) 教師：この会社の社長は大変親切です。仕事も面白いと思いますよ。ここで働きますか。

学生：同じ国の人がいたら、働きたいです。

3) 教師：この会社は月給が高いです。でも、残業が多いかも知れません。どうしますか。

学生：残業が多くても、その会社で働きたいです。

優秀クラスには、「たら」と「ても」を組み合わせて、「給料が高かったら、仕事が大変でも、その会社で働きたいです。」とか、「いい会社でも、同じ国の人がいなかったら、働きたくないです。」などと少し複雑な文を考えて言わせると、面白がる。

〈注意〉「月給が30万円位だ」とか、「有名な会社だ」等の非現実的なキューは出すべきではない。もともと、就職に不利な要素を持つ彼等の就職先は大抵中小企業であり、加えて、最近の円高不況の影響で求人も減っているため、就職状況は益々厳しくなっているのである。日本語の授業も、このような現実を踏まえたものでなければならない。

3. 授業効果

難民にとっての最重要課題は、一日も早く経済的に自立し、生活基盤を確立することである。従って、就職は彼等には極めて重要であり、かつ、差し迫った問題なのである。その意味で、就職に際して自分の希望を述べるといふこの応用練習の意義は明らかである。こうして、将来の生活に直結した事柄を授業に採り入れれば、学生は学習していることの有用性を理解し、学習意欲は当然高まる。教師に対する信頼感も増すであろうし、退所後の不安も軽減されるものと思われる。▶

(cont'd from page 37)

Local Chapter Elections

Elections are carried out according to the procedures described in the chapter constitutions, and vary from chapter to chapter. The first post-card mentioned above will contain space for recommending nominees for local office, and these recommendations will also be sent to the chapters by the end of August. Each chapter should solicit nominations and inform its membership of election procedures, either through direct mail or via *The Language Teacher*.

The chapters must complete elections for 1989 officers by the end of 1988, and furnish to the JALT Central Office a list of those elected by Jan. 10, 1989 for publication in the March 1989 issue of *The Language Teacher*.

A REMINDER FROM THE EDITORS

The Language Teacher welcomes meaningful, well-written contributions, but requests that the guidelines in the editorial box on page 3 be followed. Those wishing unused manuscripts to be returned should include a stamped self-addressed envelope. AU Japanese-language copy must be submitted to the Japanese Language Editor.

My Share (cont'd)

4. 追記

国際救援センターでは、今年4月から、難民の聴解力を高め、コースの内容をより実生活に役立つものにすることを目的として、従来からの授業に、TPR方式の授業を加え、生活指導に交通期間の利用、買物などの戸外学習を採り入れた。総時間数も572時間に延長された。当記事は、このカリキュラム変更以前に書かれたものである。

〈参考文献〉アジア福祉教育財団難民事業本部「ていじゅう」第18号

田中望『外国人に日本語を教える本』アスカビジネス

**Abstract of
'Pattern Practice That Meets
Students' Needs: Teaching
Indo-Chinese Refugees Japanese
Conditional Verb Forms'**

In a three-month language training course for Indo-Chinese refugees based on a structural syllabus, the author has attempted to make pattern practice meaningful and useful for her students.

In teaching Japanese conditional verb forms, the author used a job-hunting situation to provide the students with a chance to learn some of the vocabulary necessary to describe their future jobs, negotiation skills helpful when speaking with job counselors, and knowledge of the Japanese employment system and current employment conditions.

JALT

UnderCover

All books reviewed here are originally written in Japanese. The following is a list of the direct translations from the Japanese titles in the order of appearance:

1. Tanaka, Nozomi. 1984. *A Book on Teaching Japanese to Foreigners*. Asuka Shuppan.
2. Kitao, Norihiko. 1986. *Teachers Who Help Develop Self-Instructional Abilities*. Toshio Bunka-sha.
3. Sasaki, Masato. 1987. *The Human Body: The Origins of Cognition*. Tokyo Daigaku Shuppan-kai.
4. Tsuruta, Yoko, Rossiter, Paul, and Coulton, Tim. 1988. *Social Skills in English: Politeness Systems in English and Japanese*. Taishukan.
5. Tanaka, Harumi. 1987. *Language Acquisition and Teaching English*. ELEC.
6. Kitade, Ryo. 1987. *Communicative Activities in English*. Taishukan.
7. Neustupny, J. V. 1982. *Communication with Foreigners*. Iwanami Shinsho.

『外国人に日本語を教える本』田中望、明日香出版、1984年、201ページ、1200円

私の専門は英語教育であり、日本語教育の経験はほとんどない。従ってこの本の書評を書くにあたっては、次の二つの視点から書くことになる。

この本は、外国語として日本語を教えることについて書いたものである。外国語としてある言語を教える場合には、それが何語であろうともある程度共通の原則、キーポイントがいくつかある。そこで、まず外国語教育という面から、この本に書かれていることを考察する。次に、前書き(p.2)に、「この本は、いわば日本語教育のプロではない人のために書いたもの…」と書いてあるように、この本が対象としている、日本語教育のしろうとの一人としての感想を述べてみたい。

この本の最大の特徴は、一般論から入るのではなく、極めて具体的な(架空の)ケーススタディから始まっていることである(第一章 どんな人が学ぶのか—モデルの設定—)。

学習の目的や学習者の背景、習熟度といったものに合わせた指導をしてこそ、学習の効果が十分に出るという点が考慮されている。特に教師役がしろうとである場合、こういう点がはっきりしていないと教えるのは難しい。

こうして学習者の背景、目的、習熟度を設定した上で「ことばはその行動目的を遂行するための道具」という

立場を明確にして、学習者が真に必要なとする言語の分析（ニーズ・アナリシス）をする。その中にコミュニケーションがうまく行かなくなった時の対処法も含まれている。こうした場面をフローチャートを使って整理して、教える言語材料をしばるよう指導している（第二章 日本語を学ぶ目的は何か—教えるための準備—）。

さらに第三章では、規範的なものになりやすい会話を自然なものにするにはどうすればよいかという注意があり、特にしろうとは（気づかないことが多いので）貴重なアドバイスといえるだろう。この後には文のコミュニケーション上の機能についての説明が続き、教える日本語の全体像がしだいはっきりしてくる。

第四章ではどういう読み書きが必要であるかというキーポイントが述べられている。その具体例として宿帳と券売機があがっているが、非常にわかりやすく、的がしぼられているのには感心させられる。

第五章では、コミュニケーションがうまく行かない時の対処法がより具体的に、聞き直し、確認、確認求め、その他の四つのストラテジーとして論じられている。

第六章は、文法と発音について述べてある。ここでは知識としての文法が「コミュニケーション能力をつけるという点からは、かえって害になることがある」という立場が明確にされていて、あくまで学習者がある表現を理解しやすくなるための文法が必要だとしている。発音については、英語との対比から問題点が簡潔にまとめられている。

第七章は、学習者の経験、経済状態、学習にかけられる時間、利用できる機材といった、教える時の条件を考えての日程表の作り方が説明してある。学習者の経済的状态などは、つい見過ごしてしまいそうだが、円高で苦しむ最近の日本語学習者にとっては大切な問題だろう。

第八章では、いよいよ具体的な教え方の問題に入っていく。ここで中心となるのはテープを使った聞取りの訓練である。教材の準備から、文法と意味の説明、内容理解のチェックの仕方、実際の手順といったことが要領良くまとめられている。

第九章では、コミュニケーションを成立させるキーとしての文化の問題を取り扱っている。日本人の行動パターンや、しぐさ、身振りという点も学習者にとっては大変有用だろう。

その他にこの本には、付章として「日本語教育の現状と将来」で日本語教育の簡単なイントロダクション、「日本語教師への道」で一章から九章までで述べたことの言語教育の理論的な立場からの整理、「日本語教育の研修」では日本語教育の研修の案内といったことがのっている。

さて、まず外国語教師の日でこの本を振り返るとこの本にはコミュニケーション・アプローチを始めとする近年の外国語教育研究の成果が随所に見られる。付章「日本語教師への道」を読めば著者がそうしたものに通じているのがはっきりするが、それをこねた形で初心者向け

の本にこれだけ詰め込めるとは著者の力量は並みではない。また具体的で、細かい点にまで目が届いていることから、著者の豊富な実践のキャリアが感じられる。この本を読んでいる間に、自分が英語を教える時にこんな点まで配慮しているだろうかと考えさせられてしまうことが一度ならずあった。そういう意味ではこの本はたと言語学教育のベテランであっても、自分のやっていることをチェックし直すという点で、読んで損はないだろう。

日本語教育のしろうとの目からみると、一歩ずつ、具体的に書いてあるので、このとおりやって行けばどうにかできるような自信がわいてくる半面、一つ一つの場面では、手間暇のかかることが多く、やはり、しろうとはいえ、中途半端なことではとてもやれないことがわかった。

残念なことといえば、ページ数等で仕方がないことだが、学習者のモデルがたった一つしかないことである。別のモデルの場合（例えば漢字文化を共有する中国人の場合、etc.）の著者の料理の仕方を見たいし、こうしたモデルが多数載っていれば、もう少しいろいろな場合に対処できるだろう。応用問題の苦手なしろうとにとっては特にありがたい。また同様にこの著書によるプロ向けの部分のもう少し詳しいものを読んでみたい気がする。

とにかく、軽い表紙にだまされてはいけない。この本はただものではない。

小室俊明 (Komuro, Toshiaki)
二松学舎大学

『自己教育力を育てる先生』北尾倫彦、図書文化社、昭和61年、237ページ、1200円

書店で教育関係図書の棚を見ると、「自分で学ぶ〇〇」、「自己教育力を伸ばす〇〇」、「個別化〇〇」といった題名の本がずらりと並んでいる。この「自己教育力」という概念は、昭和58年に中央教育審議会によって打ち出されて以来、教育改革に関する論議の、まさに「キーワード」になった。ところが、実際にはことはだけがひとり歩きして、内実はいまいな状態だった。その中で、「自己教育力とは何か」を定義しようとするよりも、むしろ、教師として「どうやったら自己教育力を育てることができるのか」を実践的に考え、論じた本が、この『自己教育を育てる先生』である。

この本は小・中学校で教えておられる先生方のために書かれたもので、日本語教育は全く念頭においていないが、私たち日本語教師にも違和感を抱かずに読みすすむことができる。もともと講演の録音収録をもとに肉づけして書かれたもので、たいへん読みやすい本だ。

題名にある「自己教育力」とは、将来どのような社会がやってきても——つまり、どのような場であっても——自ら学び続け、自らを教育することのできる力ということである。技術や知識が細分化し、価値感の多様化した社会では、画一的な内容を全ての子ども（学習者）

(cont'd on page 431)

Longman 

Functioning in Business

P Lance Knowles and Francis Bailey

About the authors...

Functioning in Business was developed over three years working with students on the intensive English programme at the Language Institute of Japan.




P. Lance Knowles, formerly Director of the Language Institute of Japan, continues his association with the Institute as Consulting Director.



Francis Bailey was formerly Academic Supervisor at the Language Institute of Japan.



For further information please contact Heather Saunders or Mike Thompson at Longman ELT, Longman Penguin Japan Company Ltd, Yamaguchi Building, 2-12-9 Kanda Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo.101 Tel. (03) 265 7627.

Longman 

Functioning in Business

integrated text/tape material for developing skills in business English at early intermediate level

- ◆ Develops recognition and efficient production of key functional phrases
- ◆ Extends general business vocabulary
- ◆ Provides listening practice, and oral/written practice
- ◆ C60 cassette **tape** of recorded dialogs and exercises
- ◆ Separate Answer Key
- ◆ Can be used for class work or self-study

(cont'd from page 41)

に詰め込んでも役に立たない。むしろ、学校を出て実社会に放り出されてからも、どうやったら自分の必要なものを身につけられるか——そのための力を習得することが大切になる。そしてこの「自己教育力」を育てるため、著者は「求同求異の教育」をめざすべきであると考えている。自己教育力の前提として、教師は学習者のひとりひとりの個性や創造性を活かすことを考えなければならないが、そのためには基礎・基本を徹底しておかなければならない。学力を二つに分け、「全員に個人差のないように完全に習得させなければならない学力」については「求同」の教育、「自由な選択を許容し個性を活かすこと」に関しては「求異」の教育を行なうべきだということである。

さて、このあたりで日本語教師としての毎日を振り返ってみると、「求同」の教育に集中するのは良いが「求異」についてはどれほど対策を講じているのか。そもそも全員に等しく到達させる学力も穴だらけの現状に頭を悩ませているのではないか。「基礎力」を確実につけて「個性」も活かし、しかも日本語コースを終わってから自分で向上し続ける力をつけるには、どうしたらよいのだ

ろうか。この難問に対して、著者は具体的な答えを用意している。

基礎を固めるには、

- ・最低限の学習目標をきちんと押さえ、小刻みに目標の達成状況の評価確認して、補充指導などの手だてを講じる。
 - ・評価を確実に学習者にフィードバックする。
 - ・教師は「わかる授業」のため教え方の技術を磨く。(話す速度は速すぎたりゆっくりすぎないか? がなり立てでないか? 学習者の答に対して、それが正しいかどうかの情報を確実に返しているか? など)
- そしてさらに個性を引き出すためには、
- ・例えば「トピックス学習」を取り入れる。学習者の興味、関心を尊重して選んだトピックを中心に、本や映像を通じた間接的な経験(二次的経験)だけでなく、直接現実にもふれる経験(一次的経験)も取り入れて学ばせる。
 - ・教師は資料や機器などを豊富にそろえて、学習者が自由に選択できるようにする。
 - ・結果よりも学ぶプロセスを自覚させるように指導する。

J.S.L.

第20回 英語教育者のための サマースクワッシュ'88

本年度20年目を迎えるこのワークショップは、中学・高校の英語教師の方々を対象とし、期間中の講義・生活の全てを英語オンリーで行うTotal Immersion方式を本格的に採用し、経験豊かな外国人教育者とグローバルな視点で英語教育の問題点を探り合う教師による教師のためのセミナーです。

●特別招待講師による Special Lectures & Workshops

Mr. Robert O'Neill (Kernel シリーズ著者)

Mr. Richard Via (East-West Center)

Mr. Yasushi Suzuki (横浜市教育委員会)

他5名の特別招待講師に加え、歴代校長、教務主任12名

●Afternoon & Evening Workshops (自由選択制)

さまざまな教材や、教授法、新しい理論など実践的なものを取り上げ、その紹介やデモンストレーションを行うプログラムです

●Language Study Classes (一部選択制)

参加者自身の英語力の向上を図るクラスです

1クラス12名前後

●特別講演 開講日と閉講日の著名人による特別講演

(公衆) Special Presentations by Participants

特別奨学生(2名)参加者に自己研究の成果やアイデアを発表する機会を与えるもので、採用された方は一部受講料が免除されます

●定員 150名 (韓国・中国・タイ国から特別奨学参加者招へい)

●期間 1988年8月7日(日)~8月12日(金)

●全学費費用 90,000円

案内書無料

CROSS CURRENTS

A Journal of Language Teaching and Cross-Cultural Communication

Cross Currents is a semi-annual journal published by the Language Institute of Japan. It is concerned with ESL/EFL teaching methodology, curriculum, classroom activities, and cross-cultural topics.

The current issue (Vol. 14, No. 2) includes:

- * *The Power of English Prepositions*
- * *CLL Revisited : Addressing Socio-Cultural Factors in Language Learning*
- * *Learner Problems in Self-Access Learning : A Case Study*
- * *Five Mini-Activities for the Language Classroom*
- * *Newspaper Summaries : An Integrated Skills Activity*

JALT members receive a special discount on subscriptions!
Please use the postal account form in The Language Teacher.

LIOJ

LANGUAGE INSTITUTE OF JAPAN
〒250 神奈川県小田原市城山4-14-1 アジアセンター内
LIOJ事務局 ☎0465-23-1677

・教師は一方的に教えるのではなく、タイミング良く適切な助言を与えるアドバイザーとしての技術を磨いておく。

など、ここでは一部を紹介するにとどめる。

「どうしたら学習者への働きかけをもっと有効にできるのか」「学生の動機づけが落込んでしまったが、どうしたら各自の興味を引き出せるだろうか」「教科書の日本語から、実生活で使いこなせる運用力へつなげていくには、どうしたらいいだろうか」——本書は、こうした課題に私たちが自分で答えをみつけるための方策を数多く提示してくれるだけでなく、教師としての自己批判・自己診断のきっかけとしても、示唆に富んでいる。「教師として専門家たろう」という意欲をかきたててくれる、「元気のもと」になる。

ひとつ残念なことは、参考文献がほとんどあげられていないことだ。そこで、自己教育力に関してさらに考えるうえで、もう一冊『自己学習能力を育てる一学校の新しい役割—』、波多野誼余編・東京大学出版会UP選書・1980年・232ページ・1200円、を勧めておきたい。

バルダン田中幸子(Tanaka-Bardin, Sachiko)
筑波大学

『からだ：認識の原点』（認知科学選書15）佐々木正人、東京大学出版会、1987年、231ページ、1800円

「外国語の勉強は自転車乗りや泳ぎと同じで、からだで覚えるのが一番だ」という言い方をするが、「先生、からだで覚えるには、どうやったらいいんでしょうか」などと質問されたら、「日本人と話す機会が多ければ多いほど、いいですね・・・」とごまかすより他ない。どうしてかというと、私たち教師の仕事の大部分は日本語という言語体系を知識として伝達することで、学生がその知識にもとづいて正確に日本語を再生してみせてくれることが目標になっているので、普段の学生とのやりとりはおのずから「頭中心」でしか考えていないからだ。

こうした「頭中心」の考え方によると、認識や習得の「中枢」は脳であり、学習者は目や耳からインプットされたものを脳で認識し、自分から話したり書いたりする働きかけをするのだが、その際、目や耳、手、口は脳の指示に従ってそれぞれがはたらきに動く「道具」ということになる。なかでも目や耳、皮膚といった感覚器官は縦割りに独立して、それぞれ違った種類の情報を受け取るというのが一般的な捉え方で相互の関連性はあまり問題にされない。

本書は「からだ」を硬直した「道具」としてではなく、「認識の主体」として見直すために書かれた。いろいろな実験の結果を豊富に紹介しながら具体的に論を進めている。例えば、漢字の形や英単語の綴りについてきかれた時、私たち日本人はひざや手のひらに指で書きつけたり、目の前の宙に書く動作をするが、著者らはこの動作

を「空書（くうしょ）」と名づけ、このからだの動きがどのような意味をもつのかを分析した。漢字の要素からひとつの漢字を組み上げる課題を用意し（「耳→王→口＝聖」や「口→十→口＝固」など）、要素を口頭で（「耳（みみ）」、「王様の王（おう）」、「口（くち）」のように）与えた。その際の条件として、大学生の被験者グループ2つのうちの片方には「漢字の要素を聞きながら空書してもよい」と言っておき、もう一方のグループの人たちには「空書をしてはいけない」と言った。すると、結果は空書したグループの方が空書を禁止されたグループより、明らかに正答率が高かった。つまり「空書」には、提示される要素を正確にイメージし、可能な組み合わせを思い浮かべ、そして漢字知識と照合し・・・という意識の過程をからだの動きで誘導・制御する働きのあることが明らかになったのである。

最近日本語教育でも、例えば、発音指導の際、「ききとり」と「発音」の両方を結びつけて改善するため、積極的にからだ全体動きや感覚を利用するような方法が使われ始めている。「音は耳から聴くもの」「言語体系は分析的に理解するもの」といった通説をくつがえしてしまうような力がわたしたちのからだに隠されているとすれば、そうしたからだについて考え直すのに本書は役立つにちがいない。但し、いろいろな研究や実験結果が、あまりにも次から次へと紹介されるので、それらが著者の話の本筋とどのようにつながっていくのかわかりにくくなるきらいがある。

バルダン田中幸子(Tanaka-Bardin, Sachiko)
筑波大学

『英語のサン・ヤリスキス』鶴田庸子、ポール・ロシター、ティム・クルトン、大修館、1988、252ページ、1400円

円滑なコミュニケーションのためには、文法能力だけでは十分ではないという指摘が盛んにされているが、それでは適切な言語使用とは一体何かというと、これはなかなかむずかしい。文法に規則があるように、適切さにもなんらかの原則があると考えられる。それでは、文法規則と適切さの原則とを比べてみると、どんな違いがあるだろうか。まず、文法の規則は適切さの原則よりも明示的で、白黒をつけやすい。それに対して適切さの原則は、全ての場合に100パーセントあてはまるものではない。また、ルール違反を犯した時に、どのような反応をひき起こすかという点でも両者は異なる。文法上の誤りは、話者の文法能力が不足しているせいだと解釈されるのに対し、適切さを欠いた発言をしてしまった時には、（もしそれが、中、上級の学習者であった場合にはなおさら）語学力の問題ではなく、その人の人格がうんぬんされてしまう危険性ははらんでいる。

この厄介な適切さの原則について、あざやかな分析と

有効なガイドラインを示してくれるのが、この『英語のソーシャルスキル』である。この本を書いたのは、日本語を教えている日本人と、英語を教えている二人のイギリス人である。三人の著者は、日本語と英語、それぞれの言語で、相手を丁寧に遇したいという気持ちは同じでも、「なにを丁寧に考えるか」の基準やその表現形式が異なることに気づき、議論を重ねた結果、この本を著したのだという。このため、実際の語学教育の経験から、学習者の陥りやすい問題点が、よく指摘されている。また、分析の仕方、型にはまった一般論をふりかざすことなく（例えば、日本は、タテ社会であるといつて全ての現象を片付けるような議論）、語用論やスピーチアクト理論、会話分析などをふまえて、着実になされている。

最近、アメリカで文法能力と共に社会言語学的能力もあわせて測定しようとする Functional test が開発されている。Functional test とは、ある特定の場面で最も適切な発話はどれかを問うものであるが、外国人学習者、特に外国でその言語を外国語として学んでいる者にとっては、このようなテストは決してやさしいものではない。このような新しい傾向のテストに対処するためにも、本書は役にたつであろう。

丁寧に表すための言語形式、及びその基底にある原則について、細かい指針を与えてくれる本だが、非言語行動やパラリンギスティックな面についての言及は、前者に比べて、やや少なめかもしれない。

最後に、本書には『英語のソーシャルスキル』という題がつけられているが、裏返して読めば、日本語のソーシャルスキルについての本でもある。次は日本語学習者、日本語教育関係者に向けて、『日本語のソーシャルスキル』という題の本の出版を希望する次第である。

谷口すみこ (Taniguchi, Sumiko)

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

『言語習得と英語教育』田中春美、玉崎孫治、大塚達雄、有元将剛、松永隆、ELEC、1987、354ページ、2800円

本書は、英語教育に関する海外の情報、資料の収集、

分析を行っている研究者のグループが各自の得意とする分野の刊行物を取りあげ、その内容をまとめた論文を全部で24編、収録してある。これらは、雑誌『英語展望』に1978年から1985年にかけて発表されたものである。内容は、次の四分野に分類されている。

- 1 教授法
- 2 言語学研究の英語教育への直接的な利用
- 3 対照分析、誤りの分析、中間言語仮説
- 4 ハイフンつき言語学と広義の応用言語学

教授法から神経言語学まで広い領域を扱っており、それぞれに興味深い論文であるが、特に第二言語習得研究に関する知見を得るのに有用なものが多い。ただ、1970年代中頃から盛んになった input, interaction を重視する研究や、discourse 分析に関する研究が見当たらないのは残念な気がする。第二言語習得研究は、本格的に始まってまだ20年足らずの新しい分野であり、研究の成果を即、教室に持ちこむというわけにはいかない。しかしながら、文法構造中心のシラバスどおりに教えても、学習者は必ずしも教えられた順序に文法を習得するわけではないといった事実は、外国語教師として最低限知っておくべきであろう。学習者中心の教育を行うためには、学習者の頭の中で何がおきているのかを知らなければならない。第二言語習得研究は、その助けとなるはずである。

谷口すみ子 (Taniguchi, Sumiko)

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

『英語のコミュニケーション活動』北出 亮、大修館書店、1987年、304ページ、2000円

この本は、題名のとおり英語のコミュニケーション活動について書いてあるものである。コミュニケーション活動とはコミュニケーション・アプローチの考え方から来るもので、言語を道具として使用する経験を学習者が自然にできるようにゲーム的要素を取り入れた学習活動のことである。

ここでいうコミュニケーション活動には次の三つの原

J.S.L.



Real Life Spoken English

The real McCoy! - from life itself

実生活米口語

ホンモノだ!! - 生の声 -

Introduction to Spoken English-for anyone having trouble understanding and speaking as Americans do. Also good for little kids and beginners of any age... home and school learning

Basic Course, Slow to Fast Forms Over 600 naturally spoken (200 words a minute) examples give all you need to know to 'hear-say' English like an American.

Real Life Selections - 125 voices Common Expressions - 1,100, 76 real-life voices

Listeners Digest - monthly, up to 100 voices of what is currently heard in the US

Real-life Spoken English Handbook for Learners and Teachers - All, even what you didn't know to ask about, in learning-teaching American English as it really is spoken.

Are you interested in real-life American spoken English? as a student, teacher, editor, publisher, researcher, distributor Japan, world-wide or 'my business' entrepreneur (part/full time) please contact Spoken English 210 W 21, New York, N Y 10011 212-989-2719

実米

★
ヒアリング
の秘訣発見!

理があげられている。まず第一がギャップの原理で、学習者間にある情報、イメージ、文化等のギャップ（片一方にしかわかっていないこと）を両者が協力して埋めていくものである。第二に、聞く、話す、読む、書くといった四技能のいくつかがクロスオーバーする統合的原理である。実際のコミュニケーションではどれか一つの技能だけで済むものはまれだからである。さらに、ここにあげられているコミュニケーション活動は、ゲーム的なものだから、お互に競い合うという競争原理。

本書では、この活動の理論的背景、上述の三原理、学習の手順、教師の役割制りといったことが19ページまでに簡潔にまとめてある。そして後の約280ページはあいさつ活動、予測活動などの相互理解活動やペア活動、文化ギャップ活動などの課題解決活動の具体例で埋められている。今までの類書がともすれば、理論的説明に申し訳程度の具体例しか載せていなかったことを考えれば画期的な本であるといえる。

こうした活動の多くは、外国人に日本語を教える時にも、少し修整を加えれば利用できると思われる。ただし、文化的なものについては、日本人が英米文化に順応できるようにすることを目的として考えられたものであるから、日本語を教える場合にはところどころ、ひっくり返してやる必要がある。例えば挨拶活動の注意事項で、相手の目を見て話す、握手はしっかり、前かがみにならない、といったことがあげてある。しかし日本文化を教える場合は、あまり相手の目を見続けない方が良く、握手でなく、おじぎをする、といったふうにしてやる必要がある。それでもこれだけのまとまった活動集はそうないので、うまく使えば、日本語教育にとっても宝の山になるはずである。

小室 俊明(Komuro, Toshiaki)
三松学園大学

『外国人とのコミュニケーション』J.V.ネウストプニー、岩波新書、1982年、195ページ

この本の著者は、チェコスロバキアに生れ、現在はオーストラリアで日本語教育に従事している言語学者である。著者は、この本で一貫して外国人問題を取り扱っているが、外国語教育に関していえば、現在の外国語教育は、外国人問題に十分な注意を払っているとはいえないと述べている。

外国語学習者は、その外国語を外国人として使うのであって、母国語話者同志が使う規則を覚えるだけでは十分ではない。なぜなら外国人特有の問題があるからである。例えば、学習者は言語運用の規則を一度に全てコントロールすることができず、一部省略することがあるが、その結果、その人のパーソナリティーが誤解されてしまうという危険が生じる。外国人が外国人でありながら、自分のアイデンティティーを失わず、かつ、相手に不快

な思いをさせないようにするにはどうしたらいいのか。外国語で用がたせるだけではなく、真の意図や態度、人間としての感情、知的レベル、つまりその人のひととなり正しく伝えるにはどうすればいいのか。

この要請に従来の文法中心の教育だけでは対応しきれない。そこで著者は、部分的な教授法の改良ではなく、根本的な変革が必要だとして、PAL方式(Post-Audio Lingual)という新しいパラダイムを提唱し、コミュニケーション能力を育てる外国語教育を行うべきだと主張している。

自分は外国人ではないから、外国人問題に関係がないという人がいるかもしれないが、「外国人」というのは、相対的な見方であり、誰もが外国人になりうる可能性をもっている。そんな全ての外国人に一読をすすめた本である。

谷口すみ子(Taniguchi, Sumiko)

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

Stimulate your students' reading with

A WORLD OF BOOKS An Annotated Reading List For ESL/EFL Students

Second Edition, Revised

Dorothy S. Brown

A World of Books will "help students who are fairly proficient in English, but not completely at home in the cultures of English-speaking countries, to find books that they can read with a maximum of pleasure and a minimum of frustration."

(Dorothy S. Brown)

\$6.00 members, \$7.50 nonmembers. Plus 15% postage. All orders must be prepaid. VISA, MasterCard welcome. 6"x9" softbound, 70 pp. ISBN 0-939791-32-3

Teachers of English to Speakers of Other Languages

1118 22nd Street, NW, Suite 205
Washington, DC 20037 USA
202-872-1271

Are your students *out of their depth* when it comes to idioms?
If so, these two books will help them *get the hang* of things!

USING IDIOMS

A Learner's Guide

**J. B. HEATON AND
T. W. NOBLE**

Using Idioms is organised as a **thesaurus** as well as a dictionary of most common English idioms - 1400 entries in all. Readers can **use the book to find** appropriate idioms to use in **certain** circumstances, and as a means **of translating** incomprehensible idioms used by others. Intended principally for foreign learners **of English**, it will also be of use to native speakers.

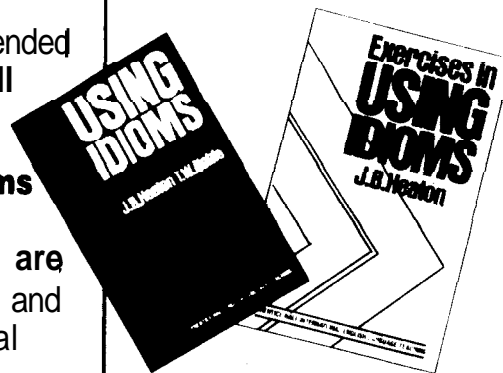
Unlike most dictionaries of idioms, **Using Idioms** groups idioms according to the functions they perform. Various idioms with similar meanings are listed together, making them easy to compare and contrast. A comprehensive functional/notional index is also included.

1987 162pp 13-939505-9 ¥1,200

EXERCISES IN USING IDIOMS

J. B. HEATON

This book can be **used with, or independently from,** Using Idioms by Heaton **and T. W. Noble**. It provides **several different** types of exercises designed to **help users learn** the idioms, actively and **appropriately**.



The material is organised in related groups of **idioms and** cross-referenced with **Using Idioms**.

1987 40 pp 13-294498-7
¥900

PHR
PRENTICE HALL REGENTS

Prentice Hall / Regents of Japan
Jochi Kojimachi Bldg., 3F, 6-1-25 Kojimachi, Chiyoda-ku, Tokyo 102.
Telephone: (03)238-1050

RECENTLY RECEIVED

The following materials have recently been received from publishers. Each is available as a review copy to any JALT member who wishes to review it for *The Language Teacher*.

Notations before some entries indicate duration on the holding list: an asterisk (*) indicates first notice in this issue; a dagger (†) indicates third-and-final notice this month. **All final-notice items will be discarded after July 31.**

CLASSROOM TEXT MATERIALS/
GRADED READERS

- *Forrester. *Frontiers: An Intermediate Course in English* (Student's book, Teacher's book). Collins ELT, 1988.
- *Howe. *American English Today!* Books 1-3 (Student's books, Workbooks, Teacher's books, cassette tapes). Oxford, 1987.
- *Hutchinson. *Project English*, Books 1-3 (Student's books, Workbooks, Teacher's books, cassettes). Oxford, 1987.
- *Rooks. *Paragraph Power: Communicating Ideas Through Paragraphs*. Prentice Hall/Regents, 1988.
- Brieger & Comfort. *Technical Contacts: Materials for Developing Listening and Speaking Skills for the Students of Technical English* ("English Language Teaching" series). Prentice-Hall International, 1987.
- Geddes. *About Britain*. Macmillan, 1988.
- Gossman & O'Connor. *Win the TOEIC Battle*. Prentice Hall/Regents, 1988.
- Knoeller. *Office Communication*. Prentice Hall/Regents, 1988.
- Live. *Yesterday and Today in the USA: Intermediate ESL Reader*, 2nd ed. Prentice Hall/Regents, 1988.
- Malev. ed. "Oxford Supplementary Skills" series. Oxford, 1987. --
- Listening, Elementary*. Nolasco (book, one cassette).
- Listening, Intermediate*. Dunn & Gruber (book, two cassettes).
- Reading, Elementary*. Scott (book only).
- Reading, Intermediate*. Ladousse (book only).
- Speaking, Elementary*. Nolasco (book, one cassette).
- Speaking, Intermediate*. Ellis & Tomlinson (book only).
- Writing, Elementary*. Gruber & Dunn (book only).
- Writing, Intermediate*. Boutin, Brinand & Grellet (book only).
- Mosteller & Haight. *Survival English Through Conversations*, Book 2. Prentice Hall/Regents, 1988.
- Mosteller & Paul. *Survival English: English Through Conversations*, Books 1a & 1b. Prentice Hall/Regents, 1988.
- Mullen & Brown. *English for Computer Science*, 2nd ed. Oxford, 1987.
- Oxford "Open Sesame" series (Student's book, Activity book, Teacher's book, cassette tape). Oxford, 1986, 1987.
- Stage E: *Multilevel Book*. Cellman.
- Stage F: *Ernie & Bert's Red Book*. Harris & Zion.
- Revell. *Impact* (Activity book to accompany video tape). Macmillan, 1987.
- Robertson. *Airspeak: Radiotelephony Communication for Pilots*. Prentice-Hall International, 1988.
- Tafner & Williams. *Intensive English*. Higher Intermediate Level (Student's book, Teacher's book).
- Willis & Willis. *Collins COBUILD English Course*, 1 (Student's book, Activity book). Collins. ELT. 1988.

- †Barlow. *Working with Computers: Computer Orientation for Foreign Students*. Athelstan, 1987.
- †Dale & Wolf. *Speech Communication for International Students*. Prentice Hall/Regents, 1988. . .
- †Krone. *Background to London*. Macmillan, 1988.

Imyers. *Take Another Letter: An Introduction to Writing Business Letters in English* (Student's book, Teacher's book). Macmillan, 1987.

TEACHER PREPARATION/
REFERENCE/RESOURCE/OTHER

- *Carrell et al., eds. *Interactive Approaches to Second Language Reading* ("Applied Linguistics" series). Cambridge, 1988.
- *Crystal. *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge, 1987.
- *Doff. *Teach English. A Training Course for Teachers* (Teacher's book, Trainer's handbook). British Council/Cambridge, 1988.
- Brumfit & Carter. *Literature and Language Teaching*. Oxford 1986.
- Celce-Murcia & Hilles. *Techniques and Resources in Teaching Grammar* ("Teaching Techniques in ESL" series). Oxford, 1988.
- Chaudron. *Second Language Classrooms: Research on Teaching and Learning* ("Applied Linguistics" series). Cambridge, 1988.
- Clark. *Curriculum Renewal in School Foreign Language Learning*. Oxford, 1987.
- Fries, P. H., ed. *Toward an Understanding of Language* (Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science, IV, Current Issues in Linguistic Theory, vol. 40). Benjamins, 1985.
- Marton. *Methods in English Language Teaching: Frameworks and Options* ("English Language Teaching" series). Prentice-Hall International, 1988.
- Newmark. *A Textbook of Translation* ("English Language Teaching" series). Prentice-Hall International, 1988.
- Prabhu. *Second Language Pedagogy*. Oxford, 1987.
- Strong, ed. *Language Learning and Deafness* ("Applied Linguistics" series). Cambridge, 1988.
- tLindop & Fisher. *Discover Britain: A Practical Guide to the Language, Country and People*, 1988-89 ed. Cambridge, 1988.

The Language Teacher also welcomes well-written reviews of other appropriate materials not listed above, but please contact the Book Review Editor in advance for guidelines. It is *The Language Teacher's* policy to request that reviews of classroom teaching materials be based on in-class teaching experience. Japanese is the appropriate language for reviews of books published in Japanese. All requests for review copies or writer's guidelines should be in writing, addressed to: Jim Swan, Aoyama 8-122, Nara 630.

IN THE PIPELINE

The following materials are currently in the process of being reviewed by JALT members for publication in future issues of *The Language Teacher*:

- Boardman & Holden. *English in School*.
- Bradford. *Intonation in Context*.
- Carter & Long. *The Web of Words*.
- Chan. *Phrase by Phrase*.
- Collie & Slater. *Literature in the Language Classroom*.
- Greenbaum. *The English Language Today*.
- Hino.
- Jones & Kimbrough. *Great Ideas*.
- Levine et al. *The Culture Puzzle*.
- Mugglestone et al. *English in Sight*.
- Newby. *The Structure of English*.
- Pattison. *Developing Communication Skills*. ►

Chapter Presentation Reports

Reports written in English on chapter presentations should be sent to co-editor Ann Chenoweth, Yamato Heights 2-102, 7-17-16 Yanaka, Tsito-ku, Tokyo 110. Those written in Japanese should be sent to the Japanese Language editor (address on p. 3). They should reach the editors by the first of the month preceding desired publication, although actual publication dates may vary due to space limitations.

Acceptable length is up to 250 words in English, two sheets or 400-ji genko yoshi in Japanese. English must be typed double-spaced on A4-size paper. Longer reports can be considered only upon prior consultation with the editors. Please refer to guidelines in the January issue of this volume.

CHIBA

MATERIALS FOR THE ACTIVE CLASS

By Dan LaBranche

One of Chiba's own founding members, Dan LaBranche, treated the membership to a smorgasboard of classroom fun at the May meeting. Warning, however, that mothers might not appreciate a regular helping of "games" in the serious business of study, LaBranche suggested using the euphemism "language learning activities" instead. He did offer some solid reasons for including fun activities in the regular lesson plan. By beginning class with a fun activity, students will be encouraged to show up on time, and by using fun as a finale, students will leave the class with a positive attitude.

The "buffet" started off with an old standby, "Treasure Hunt." In this version teams dash about the room looking for prepared slips of paper that contain coloured drawings of various objects. Each slip has a price as well. Students, depending on their level, must either draw or name the object, add or name the colour and note the price on a numbered grid.

After the "appetizer," LaBranche demonstrated activities for practicing conversation management language. In one such activity the teacher mimes the *kanji* for Japanese place names and the students guess the location using

phrases such as "do you mean. . .," "I think it's . . ." or "do it again, please."

For "dessert" a variety of surveys, board games and a "smell kit" were unveiled. The latter is a collection of those tiny soy sauce bottles that can be purchased at any supermarket. Containing various odiferous substances, the bottles give the students an opportunity to speculate while practicing comparative and olfactory sense-related language.

All things considered, Chiba members were treated to a splendid repast, each of us leaving with simple recipes for a more lively classroom.

Reported by Brian Grover

HIROSHIMA

GETTING TO GRIPS WITH A MONOLINGUAL DICTIONARY

By Heather Saunders

When your students inevitably reach for their dictionary, do you ever wonder if there is a better way? While the need for a bilingual dictionary may always be with us, the wealth of information contained in a suitable monolingual dictionary can help teachers and students alike. At the May meeting, Heather Saunders from Longman showed us some of the advantages of using a monolingual dictionary.

The type of dictionary she talked about was a dictionary for learners of English as opposed to a dictionary for native speakers. All examples were taken from the new edition of the *Longman Dictionary of Contemporary English*. We went through a series of exercises demonstrating how a dictionary can help students deal with difficult areas. Finding the right meaning of a word, understanding a phrasal verb, choosing the right collocation, and selecting the appropriate word are places where a dictionary can play an active role as reference source and learning resource. Sometimes, the teachers can be enlightened as well. How would you address an ambassador? What is a "grab bag"? What is a "lucky dip"?

Helpful illustrations, both British and American English, plenty of example sentences, easy-to-understand definitions, and clear grammar explanations should be included in a good dictionary. The advantages for students to keep a monolingual dictionary next to their "trusty" bilingual dictionaries were convincingly shown to us.

Reported by Ian Nakamura

From the Editors

To ease pre-registration for JALT '88, the September issue of *The Language Teacher* will be distributed a week earlier than usual. The deadline for all submissions to *any* editor is July 23.

Pipeline (cont'd)

Peaty. *Alltalk*.

Rooks. *Share Your Paragraph*.

Samovar & Porter. *Intercultural Communication*.

Sanabria. *A Picture's Worth 1000 Words*.

Shortreed & Kelly. *Significant Scribbles*.

Smith, ed. *Discourse Across Cultures*.

Wenden & Rubin. *Learner Strategies in Language Learning*.

Withrow. *Writing Skills for Intermediate Students*.

Yalden. *Principles of Course Design for Language Teaching*.

NAGOYA**WAYS INTO POEMS:
TEACHING LITERATURE AND LANGUAGE****By Richard Cauldwell, Kobe University**

In the February chapter meeting, Richard Cauldwell demonstrated how poetry may be used to teach English and literature. He bases his methods on the premises that students should be given the opportunity to approach real texts as text and not view a lesson as merely a means to learn about language, and that they should learn to appreciate, discuss, and write about the texts in English.

Using poems by Craig Raine, Derek Mahon, and Tony Harrison among others, the audience experienced some of the same feelings and mental activity that Cauldwell's students generate in their classes.

Students are divided into groups of five, and each group selects a group name (so that the teacher may call upon them by the group name). A riddle or poem is distributed, and group leaders conduct discussions of the meanings of various riddles and words or phrases, their significance, and the writer's intentions. After group discussions, group leaders summarize orally the analysis of their groups.

This lecture/workshop (an expanded version of his JALT '87 presentation) proved stimulating for the audience and may encourage more teachers to include poetry in their lessons. In the words of one of Cauldwell's students:

... We could think together, not only (be) given lectures. This is the best point of this class, since there is no other class in which we can think and discuss together."

Reported by Kenjiro Tatematsu**INTERACTIVE GROUP TASKS
FOR LARGE CLASSES****By Carl Adams, Niigata University**

At the March chapter meeting, Carl Adams conducted a lecture-workshop on helping students in large classes obtain the most from such classes. Adams uses Community Language Learning (CLL) techniques to help students generate their own language while working on group tasks.

His guiding principles can be summed up in the acronym SARD (security, attention, assertion, reflection, retention, and discrimination). There are four steps or phases. Phase One: Security and Attention (accomplished by pair work and group tasks such as listening comprehension and information gap exercises); Phase Two: Assertion and Discrimination (accomplished by using chain stories, jigsaw puzzle stories, and the like as vehicles to encourage

students to become more assertive and more discriminating in their use of English); Phase Three: Support and Reflection (by encouraging students to ask questions of each other after small-group tasks have been completed); Phase Four: Independent Learners (accomplished by the students themselves in the course of investing their efforts in student-generated final projects).

The final part of Adams' presentation was devoted to displaying samples of group projects such as story booklets and video tapes produced by the students. One of the most important outcomes of these projects was that students really enjoyed doing them and got a lot out of the experience.

**Reported by George H. Sawa
Gifu Women's Junior College****KANAZAWA****FLUENCY ACTIVITIES****By John Dougill**

The April meeting was a workshop based on the assumption that an active classroom with a high level of student participation makes for a good language-learning environment. John Dougill demonstrated eight activities that can be adapted for different teaching situations and types of student, and emphasised that the final implementation of each activity should vary according to circumstances.

The activities included introduction games and warm-ups; an entertaining and instructive general knowledge quiz; story-telling, based on real-life events or on imagination; a simple to set up, but dynamic role play in which participants try to achieve certain objectives; the use of a short dialogue or script as a stimulus for creative language work. The activities were enjoyable and non-threatening, two ingredients that Dougill emphasised as important in language learning. He also pointed out that the single biggest cause of failure for such activities was lack of clarity; sometimes participants simply cannot understand what they were supposed to do, or are confused about the purpose. Dougill therefore urged that activities be kept simple and that they be demonstrated beforehand whenever possible. Fortunately for those who attended, here was one presenter who was able to put his principles into practice!

Teachers can get staid and stuck in a rut all too easily. Every so often we need the shots of adrenalin that workshops like this provide.

Reported by Gillian Kay

IATEFL members: You can join IATEFL Special Interest Groups for only ¥800 per annum. See the *furikae* forms in this issue for details.

OSAKA**PRIORITIES IN ENGLISH GRAMMAR
AND GRAMMAR TEACHING****By Michael Lewis**

"I hate grammar" is a familiar student complaint. Teaching by function is widely held to be more effective than teaching by structure. However, in our May meeting, Michael Lewis maintained that grammar should not be neglected.

Grammar is important because "grammar means." In a given sentence, both the words and the grammar provide meaning. Out of an array of grammatically possible sentences, a student needs to choose the one which best conveys his or her meaning.

Lewis holds the failure of many grammar-based approaches is that students are not given such practice in choosing. Moreover, many textbook explanations of grammar are so abstruse as to be incomprehensible.

Lewis suggested other techniques for grammar teaching. One was presenting students with pairs of sentences and having students choose the correct one out of each pair. He also described a technique used in Danish schools, where children, after exposure to samples of language (and accompanying pictures), make inductions about the underlying structures. The teacher may, Socratic-style, ask questions to encourage the inductive process, but never gives answers. The children learn to "observe" the language and correct themselves.

While some teachers questioned how applicable such methods were to Japan, Lewis flatly stated that "Japan is not different." Other teachers in the audience reported success in using some of the techniques described.

Reported by Lisa Lei Isobe**SAPPORO****JAPANESE STUDYING ENGLISH ABROAD
AND PAIR WORK****By Peter Grey**

At the Sapporo February meeting Peter Grey courageously took over when the originally scheduled speaker cancelled. The first half of the presentation was based on a debriefing of the canceller, with comments and thoughts appended.

We were told that Japanese studying English abroad manage to turn their classes into replicas

of those in Japan. Exposure to a new environment does not make students relate the learning in the classroom to what is happening outside. Americans learning Spanish in Mexico are apparently little motivated, somewhat like the Japanese studying English abroad, however ready they are to risk using cognates.

Students on homestays generally have very high expectations for their host families, and occasionally feel that the families do not do enough for their guests. This letdown could partly be overcome by the student learning about the homestay community and area before going, and bringing a list of things to do there. Learning to cope when communication breaks down and being told about classroom dynamics (no silences, no relying on neighbors, etc.) could also help.

Japanese learning Spanish in Mexico seem to be quite successful. They are clearly goal-oriented, perhaps because they have been abroad before and are learning their second foreign language. They do not seem to accept that speaking ability generally moves ahead of grammar knowledge, however.

To round off the very instructive afternoon, Grey gave us the ABCs of getting started and keeping going with pair work.

**Reported by Torkil Christensen
Hokusei Junior College****TOYOHASHI****CURRICULUM ENRICHMENT VIA VIDEO****By Ken Toyama, Kanda Gaigo Gakuin**

Ken Toyama described the technology, content and purposes related to producing video materials. One video, "Superman," showed the potential of a video produced with only minimal equipment - a camera, a light and a video machine. Editing is possible if you have another video machine. Any kind of background can be supplied to the picture by using "chromakey" and "telop" adds letters on the picture.

The content Toyama uses includes American TV commercials, scenes from movies, Mother Goose and other folklore items. These items are edited together with self-made shots with the help of fellow teachers and students. "Tell the actors/actresses that it is just a test shot, and you will get lively pictures."

Toyama demonstrated practical application of several videos for writing, speaking and listening tasks. Videos are useful for teaching a sense of rhythm and pitch control, cultural information, vocabulary, idiomatic expressions, body language usually found outside school textbooks, and humor. "A Forgetful Professor," another of his videos, made the participants burst into laughter and would be appreciated in classrooms, too.

Reported by Takashi Miura

Subscribe to **Cross Currents** and **English Today**. Available at substantial discounts only to JALT members. See the furikae form in this issue for details.

Bulletin Board

Please send all announcements for this column to Jack Yohay (address, p. 3). The announcements should follow the style and format of the LT and be received by the first of the month preceding publication.

Notices for this column for the September issue should reach J. Yohay by July 7 or Eloise Pearson (address p. 3) by July 23,

2nd International Language Testing Conference Tsukuba, March 30-31, 1989 CALL FOR PAPERS

Papers are being solicited for this JALT-sponsored gathering from the general membership as well as other interested people on topics related to language testing. Send a brief abstract (50-100 words in English or 200-400 characters in Japanese) plus a short biographical statement to arrive by **Oct. 1**. Applicants will be notified of the status of their proposals by Nov. 1. The complete schedule of events will be published in the February 1989 issue of *The Language Teacher*. Send proposals to: International Language Testing Conference, c/o H. Asano, Foreign Language Center, The University of Tsukuba, Tsukuba-shi, Ibaraki-ken 305, Japan. For further information, contact: H. Asano (0298-51-0485) or V. LoCastro (0298-53-2429 or 52-1848).

The Journal of Educational Techniques and Technologies CALL FOR PAPERS

This journal is a publication of the International Association for Learning Laboratories. Anyone wishing to submit an article for this publication please contact its Far East Editor, Professor A. Barbara O'Donohue, Hiroshima Bunkyo Women's College, Kabe Higashi, Asakita-ku, Hiroshima 731-02; tel. 082-665-3476 or 082-664-3191.

TEMPLE UNIVERSITY JAPAN Distinguished Lecturer Series

July 2-3 (Tokyo), 9-10 (Osaka): **Instructed Second-Language Acquisition**, Rod Ellis, Ealing College of Higher Education

Sat., 2-9 p.m., Sun., 10 a.m.-5 p.m. Information: Michael DeGrande, Temple University Japan, 1-16-7 Kami-Ochiai, Shinjuku-ku, Tokyo 161 (site of the Tokyo sessions), 03-367-4141; or Temple University, Kyowa Nakanoshima Bldg. 2F, 1-7-4 Nishi-Temma, Kita-ku, Osaka 530 (site of the Osaka sessions), 06-361-6667.

JALT members and others unable to enroll formally may attend the Saturday 2-5 p.m. portion of the course at special low fees. See Meetings: OSAKA, TOKYO.

JAPANESE ASS'N OF SUGGESTOPEDIA

(1) Annual Meeting, Tokyo July 9, 4-S p.m.

- Concert and lecture by the Tama Group on the Suzuki Method
- Panel discussion on "Suggestopedia in Future" in language education

(2) Workshop, Tokyo, August 25-30 (36 hours)

The first three days focus on the theory and practice of Suggestopedia and the second on its application to teaching languages in school settings.

For information: Setsuko Iki or T. Kiya, 03-704-4011/03-704-1967.

BE 日本語教育ワークショップ

英語圏の学習者を対象にした日本語教授者のための実践中心サマールワークショップ。昨年出版された「Japanese: The Spoken Language」(E. ジョーデン/野田眞理)を教本に教授法の紹介と実践、デモンストレーション、演習等個別的な指導を行います。

対象：現在、日本語を教授している方

23rd ANNUAL TESOL CONVENTION

March 6-11, 1989

San Antonio, Texas, USA

CALL FOR VIDEO THEATER PROPOSALS

The 1989 TESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages) Convention in San Antonio, Texas, will include a one-day video theater. Each presenter will be allowed a 45-minute time slot. The due date for submission of Video Theater Proposals is October 1, 1988. For proposal forms, please contact: Susan Stempleski, Chair, TESOL Video Group, Hunter College IELI, 1025 East Building, 695 Park Avenue, New York, NY 10021, U.S.A.; tel. 212-7724290.

期 間：昭和63年7月16日(土)～7月22日(金) (6泊7日)

定 員：20名

場 所：成田東急イン (千葉県成田市大山 31)

講 師：野田真理

(ポートランド州立大学日本語講師)

受 講 料：165,000円

問い合わせ：東急セミナー渋谷 BE

☎150 渋谷区道玄坂1-2-2 渋谷東急プラザ8F

☎03-477-6277/井海

SUGGESTIVE-ACCELERATE LEARNING TECHNIQUES (SALT)

by Dr. Donald L. Schuster
Nagoya, August 8-12

Though designed for classroom teachers, this 40-hour workshop is also of benefit to students interested in improving their learning skills. Participants will experience for themselves how to learn with the SALT method. The background and theory and classroom procedures are covered in detail, with opportunity to practice preparing and delivering a complete SALT lesson, which is video-taped and critiqued. At the end teachers are at least minimally prepared to use SALT in their own classroom teaching. Number of participants limited to 23. Fee (including SALT **Book**

and two music tapes): ¥35,000. For more information: Charles Adamson, Academic Director, Trident School of Language, 1-5-31 Imaike, Chikusa-ku, Nagoya 464; 052-735-1600.

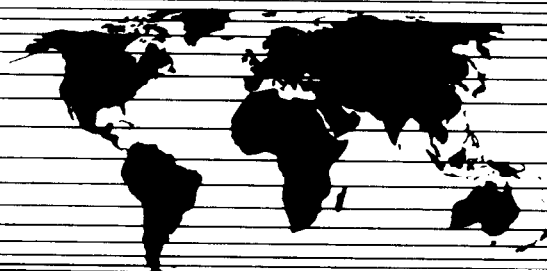
CERTIFICATE IN LANGUAGE TEACHING TRAINING Geneva, July 18-August 11

The four-week Cert. L.T., at the Center for Experimentation and Evaluation of Language Teaching Techniques in Geneva, is intensive training which builds on the Introduction to S.A.P.L. training, which is periodically offered in Japan (see below). The Course Director is Nicholas Ferguson, originator of the Self-Access Pair Learning methodology and author of the course **Threshold**. Info: Didasko, 6-7-31-611, Itachibori, Nishi-ku, Osaka 550; 06-443-3810.

INTRODUCTION TO S.A.P.L. Osaka, August 21-25

Nicholas Ferguson, Director of the C.E.E.L. in Geneva, will offer a five-day (Sun.-Thur.) introductory intensive training seminar in self-access pair learning which is strongly recommended for anyone who wishes to teach the course **Threshold**. Place: Ohbayashi Biru (near Temmabashi Station). Info: Didasko (as above).

The School for International Training



REDISCOVER THE EXCITEMENT AT AN SIT TEACHING SEMINAR THIS SUMMER:

Summer I – **Teacher Training – Design and Practice**
August 16-21 Donald Freeman

Summer II – **Teaching Grammar Experientially**
August 23-28 Dr. Annie Hawkinson

Offered by the MAT Program, School for International Training Held at the Asia Center in Odawara, Kanagawa-ken.
Fee: ¥70,000 plus room and board. Graduate credit available by arrangement.

For information and brochure, contact: The **Center**, 204 Shirono Building, 3-41 Manzai-cho, Kita-ku Osaka 530, phone (06)315-0848.

Meetings

Please send all announcements for this column to Jack Yohay (address, p. 3). The announcements should follow the style and format of the LT and be received by the first of the month preceding publication.

Notices for this column for the September issue should reach J. Yohay by July 7 or Eloise Pearson (address p. 3) by July 23.

FUKUI

Topic: Syllabus Design for Teaching Language Functions to J.H.S. Students
 Speaker: Naomi Nemoto
 Date: Sunday, July 17th
 Time: 2-4 p.m.
 Place: Fukui Culture Center (Housou Kaikan, 5F)
 Fee: Members, free; non-members, ¥500
 Info: John Service, 0776-22-3113

Naomi Nemoto teaches at Fukui University Fuzoku J.H.S. Prior to this, she was a teacher at Eiheiiji J.H.S. She is a graduate of Fukui University majoring in TEFL and has spent ten months studying English in the U.S.A.

This talk stems from Ms. Nemoto's interest in using practical English examples for teaching basic grammar.

GUNMA

Topic: Methodology of Teaching English as a Foreign Language
 Speaker: John G. Bordie
 Date: Saturday, July 23rd
 Time: 2:30-5 p.m.
 Place: Kyoai Cakuen Junior College, Maebashi
 Fee: Members, ¥500 non-members, ¥1,000
 Info: Wayne Pennington, 0272-51-8477
 Morihiro Shibayama, 0272-31-7221

John G. Bordie is professor of linguistics and director of the Foreign Languages Education Center at the University of Texas at Austin.

HAMAMATSU

Topic: Summer Party
 Date: Sunday, July 24th
 Time: 1-4 p.m.
 Place: Outdoor "beer garden," Asakuma Restaurant, 11-1 Shikatani-cho, near Seibu Kominkan; 0534-74-0626
 Fee: ¥1,500 per person
 Info: Tomoko Hoshino, 0534-72-2286

Everyone is welcome. Please make a reservation with Ms. Hoshino by July 21. The fee covers barbecue and beverage; alcoholic drinks will be extra. There will be no meeting in August.

HIROSHIMA

Topic: Grammar: A Review of Student Attitudes
 Speaker: Diana Allen (Hiroshima University)
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 1-4 p.m.
 Place: Hiroshima YMCA Gaigo Gakuin, Bldg.3
 Fee: Members, free; non-members, ¥500
 Info: Kathy McDevitt, 082-228-2269
 Martin Millar, 082-227-2389

Exploring the teaching of grammar from the student's point of view, Ms. Allen will discuss the results of a questionnaire completed by 200 EFL students, dealing with such questions as how much importance students place on the formal teaching of grammar, how they like the grammar to be presented, and whether different learning styles are shown in attitudes towards grammar. In a workshop format we shall then look at different ways of introducing and practising grammar in the classroom.

Diana Allen (M.Sc. in Applied Linguistics, Edinburgh University) has taught EFL in Nigeria, Thailand, Canada, and China.

There will be no meeting in August.

KANAZAWA

Topic: Motivating Students and Tired Teachers
 Speaker: Don Maybin
 Date: Sunday, July 17th
 Time: 10:30 a.m.- 1 p.m., then picnic by the Saigawa. Bring food, friends, games.
 Place: Ishikawa Shakai Kyoiku Center
 Fee: Members, free; non-members, ¥500
 Info: Mikiko Oshigami, 0764-29-5890
 Kevin Monahan, 0762-23-8516

Pressure in the form of teams, points, time limits, etc. can stimulate and encourage EFL/ESL students (and teachers!) of all ages. The audience is expected to participate in this lively and practical demonstration. If time permits, Mr. Maybin will also show practical, quick classroom techniques for modifying a student's pronunciation, overall sentence stress and intonation, etc.

Don Maybin (M.A. in Applied Linguistics, University of Essex) is program supervisor at the Language Institute of Japan, Odawara.

KOBE

Topic: Pair Work and Group Work
 Speaker: Steven Maginn
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 1:30-4:30 p.m.
 Place: St. Michael's International School
 Fee: Members, free; non-members, ¥1,000
 Info: Michael Skelton, 078-741-6809

This introductory presentation will show how pair and group work can be organised effectively and how initial problems that may arise can be dealt with. Pair and group work are seen as suit-

IBARAKI**KANTO AREA MINI-CONFERENCE****July 16th and 17th****Language Teaching: What, How, and Why**

Place: Chuo Seinen no Ie (in Niihari-mura, on the side of Mt. Tsukuba); free bus service will be provided from Kandatsu Station

Fees: Saturday only, ¥2,000; Sunday only, ¥2,000; the entire package, ¥6,000 (includes supper, party [snacks and the first beer or soft drink are free], breakfast, lunch, and one night's lodging at the Chuo Seinen no Ie). Reserve promptly with Jim Batten, 0294-53-5665.

Saturday, July 16th

1:00- 3:00 Registration and Publishers' Displays
 3:00- 3:45 **Shari Berman:** Adjusting Texts for Use in Japanese Universities
 3:45- 4:00 Publishers' Displays
 4:00- 5:15 **Stephen Ziolkowski:** Listening

5:15- 6:30 Supper (Publishers' Displays will be open)

6:30- 8:30 **Ruth Venning:** Team Teaching
 8:30-???

Sunday, July 17th

6:30- 7:00 Sunrise Christian Service **Jim Batten**
 7:15- 8:40 Breakfast
 8:00- 9:00 Publishers' Displays open
 9:00- 11:30 **Alice Bratton** and **Shari Berman:** Video Teaching
 11:30- 12:00 Publishers' Displays
 12:00- 1:00 Lunch
 1:00- 2:00 Publishers/Booksellers
 2:00- 4:00 **Nishiyama Sen:** Social and Cultural Comparison in Japanese and English
 4:00- 4:30 Publishers' Displays

able for various classroom activities, e.g. pattern practice, reading a text and answering questions, and short writing exercises, and can be used with confidence. The material: *Teach English* by Adrian Doff (CUP, 1988), a teacher training course especially designed for non-native teachers of English who teach in large classrooms, follow a set textbook, and have limited time for lesson planning.

Steven Maginn is the Cambridge ELT representative in Japan.

MORIOKA

Topic: It Works for Me
 Speaker: Chapter members
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 1-4 p.m.
 Place: Morioka Chuo-Kominkan 2F
 Fee: Members, free; non-members, ¥500
 Info: Robin Sue Alexander, 0196-53-3279

Interested members will share lesson plans and ideas that work for them in the classroom. A beer garden party has been planned for after the meeting.

NAGOYA

Topic: Annual Do-It-Yourself
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 1:30-5 p.m.
 Place: Mikokoro Center, Naka-ku
 Fee: Members, free; non-members, ¥1,000
 Info: Tetsu Suzuki, 0566-22-5381
 Helen Saito, 052-936-6493

Come share ideas which have worked for you. Bring along ideas, materials, techniques, books,

anything that was a hit in your classroom. Business English, junior/senior high, children's classes, ESS, college, private students-contributions from people teaching in any situation are welcome.

NARA

Topic: Blend Well Before Serving
 Speaker: Judy Gernant
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 1-4 p.m.
 Place: Saidaiji YMCA
 Fee: Members, free; non-members, ¥500
 Info: John Williams, 0742-45-6872

Combining your speaking text with supplementary communicative activities so that one thing leads sensibly to the next takes time and planning. Steps to organizing the effort will be shown, and one unit from a communicative syllabus, with expansion activities, will be demonstrated. Participation highly recommended.

Judy Gernant (M.A. in ESL, University of Illinois) teaches at Kinran Junior College in Osaka. She previously taught English in Iran and the U.S.A.

NIIGATA

Topic: CLL: A Model for Learning
 Speaker: Carl Adams (Niigata University)
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 1-3:30 p.m.
 Place: Niigata Kyoiku Kaikan, 025-224-0973
 Fee: Members, free; non-members, ¥500
 Info: Masa Takasugi, 025-231-1119/1128

A Community Language Learning (CLL) class in Tagalog (with Edgar Macavinta as facilitator) will be followed by a brief explanation of CLL and its role in language acquisition. Then everyone will engage in several CLL activities applicable to more advanced learners of English. A final feedback session will conclude this workshop.

Carl Adams (M.A.T. in ESL, S.I.T.) has taught EFL in Viet Nam, Indonesia and Japan and has interests in teacher training and the practical application of new methods in Japan.

OKAYAMA

Topic: The Importance of Developing Listening Skills in Teaching English
 Speaker: Joan McCormick
 Date: Saturday, July 9th
 Time: 2:40-4:30 p.m.
 Place: Shujitsu High School, 0862-25-1326
 Fee: Members, free; non-members, ¥500
 Info: Fukiko Numoto, 0862-53-6648

OMIYA

Topic: A Complete System Approach to Teaching Spoken English
 Speaker: James O. Dirden
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 1:30-4:30 p.m.
 Place: Omiya YMCA
 Fee: Members, free; non-members, ¥1,000
 Info: M. Shinohara, 03-317-0163
 A. Krause, 0487-76-0392

The presentation describes a totally-integrated, systematic approach (across all levels) to teaching spoken English, involving: (1) clearly defined objectives, (2) a systematic learning sequence related to the learning (performance) curve, and (3) media methods and techniques that simplify and speed up learning. Mr. Dirden will demonstrate teaching techniques with audience participation.

James O. Dirden (B.A., Business Administration; M.A., Education) is English Language Consultant to the Japanese Ministry of Education and Research Associate of the Council of Modern English Training (COMET). He has taught English in Japan for 14 years.

OSAKA

(1) Co-Sponsored by Temple University
 Topic: Instructed SLA
 Speaker: Rod Ellis
 Date: Saturday, July 9th
 Time: 2-5 p.m.
 Place: Temple University (*see Bulletin Board*)
 Fee: Members, ¥1,000; non-members, ¥2,000
 Info: Tamara Swenson, 06-351-8843

(2)

Topic: Teaching *Video English* Through Action
 Speakers: Robert Liddington, William Stanford
 Date: Sunday, July 17th
 Time: 1-4:30 p.m.
 Place: Umeda Gakuen
 Fee: Members, free; non-members, ¥1,000
 Info: Steve Mason, 0798-49-4071

Although *Video English* (Macmillan) is a very exciting classroom resource, the teaching approach suggested, with observation and predictive exercises which help make it worthwhile in itself, is more suited to audio-lingual than to audio-visual teaching. Despite the richness and authenticity of the input, student output is largely that of 'talking about' what they've looked at. We are faced most acutely here with the general problem of teaching video courses: how to deal with all the information offered the learner, how to 'teach' the video.

Robert Liddington has taught EFL at the University of Nancy and for the Japanese Self-Defense Force. William Stanford, with over 15 years in TEFL/TESL, holds a master's degree from Sydney University. Both are Directors of Studies at Language Resources, Kobe.

OSAKA SIG

Teaching English to Children (July 17, as above)

Topic: Activity-Based Learning
 Speaker: David Vale
 Time: 11 a.m.-12:30 p.m.
 Info: Pat Bea, 075-952-3312

The key principles of this new approach:
 (1) Children must learn to treat English as a communication tool, rather than as an end product. They don't study English. They study *in* English.
 (2) The lesson content must be an *all round* educational experience, not just a language course.
 (3) Children must gain the confidence to study and play *naturally* in an English-speaking environment. After providing a 'hands-on' experience of the typical stages and techniques of an activity-based lesson, Mr. Vale will discuss possibilities for practical teacher training in Japan for adapting one's TEFL skills to the teaching of children.

David Vale (Diploma in TEFL, University of Manchester) is the author of a new series of activity-based learning materials - *early bird* - for children 6-12. He has been an EFL consultant and director in Spain, Thailand, Sweden, England, and Japan.

SHIZUOKA

Topic: Pair Work and Group Work
 Speaker: Steven Maginn
 Date: Sunday, July 24th
 Time: 1-3 p.m.
 Place: Tokai University Junior College, near Yunoki Station

Fee: Free to everyone!
 Info: John B. Laing, 0542-61-6321 (days) or
 0542-46-6861 (eves.)

Mr. Maginn and his instructive presentation are described in KOBE above.

SUWA

Topic: Classroom Techniques for Children and Young Adults
 Speaker: Keiko Abe
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 2-5 p.m.
 Place: Seiko Epson ISI School, Room 208-209
 Fee: Members, ¥500; non-members, ¥1,000
 Info: Esther Sunde, 0266-52-3131, ext. 1414 (W), or 0266-58-3378 (H)

These successful communicative techniques include games, role-play activities, simulations and songs -- all of which students can easily relate to. Many were developed by Ms. Abe herself, in the classroom and in her teacher-training workshops throughout Japan.

Keiko Abe is a children's EFL teacher, teacher trainer, author of numerous EFL textbooks, and President of CALA Workshop.

TAKAMATSU

Topic: 1) Aspects of Bilingualism
 2) **Kikokushijo** (Returnees) and Second-Language Maintenance
 Speaker: 1) Michael Bedlow
 2) Panel of members
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 1:15-4:30 p.m.
 Place: Takamatsu Shimin Bunka Center
 Fee: Members, free; students, ¥500; others, ¥1,000
 Info: Michael Bedlow, 0877-62-2440
 Harumi Yamashita, 0878674362

1) Mr. Bedlow (Shikoku Gakuin Daigaku) will give an introductory talk focusing especially on variation in educational outcomes for bilingual children (why do some bilinguals do well and others poorly?), classifications of bilinguals (is there any value in the old co-ordinate-vs-compound distinction?), and bilinguals' brains (does physical age have anything to do with bilingual success or failure? where are different languages stored in the brain? etc.).

2) After short talks on their own and their children's bilingual experiences, the panel will then deal with any topics raised by the audience. The panel will include: M. Bedlow (English children in Japanese schools), Dr. Voth (Korean, German, Japanese trilingual children), Mario Seki (a **kikokushijo** from Paraguay), P. Reynolds (successful teacher of his Japanese/American son), Yoko Yoshioka (mother of two **kikokushijo**), and T. Kase (bilingual and father of bicultural children).

TOKYO

Co-Sponsored by Temple University

Topic: Instructed SLA
 Speaker: Rod Ellis
 Date: Saturday, July 2nd
 Time: 2-5 p.m.
 Place: Temple University (*see Bulletin Board*)
 Fee: Members, ¥1,000; non-members, ¥2,000
 Info: Michael Sorey, 03-444-8474

TOKYO SIG

日本語教育部会

演 題: リステートメント
 中級以上の会話授業における演習
 講演者: 野田 眞理先生
 月 日: 7月23日(土)
 時 間: 受付 1:30
 講演 2:00-5:00
 会 場: テンプル大学日本校(地下1階)
 (西武新宿線・下落合駅下車1分)
 参加費: 会員—無料、非会員—500円
 問い合わせ: 北澤美枝子 ☎03-485-3204
 安達 幸子 ☎03-788-0884

会話授業において中級以上になると、初級で提示された基本的な文型と文法事項を用いて、ディスコースの勉強をしていく必要があります。リステートメントとは、ある状況における会話の内容を、それぞれの登場人物、あるいは第三者の立場からもう一度陳述してみる練習です。今回は、その具体的な授業をビデオを用いながらデモンストレーションしていただきます。

野田眞理先生は、コーネル大学大学院言語学科修士号取得後、E.ジョーデン教授(現・ジョーンズ・ホプキンス大学教授)の助手として、日本語の教授にあたり、現在ポートランド州立大学の日本語科講師をなさっています。

著書「Japanese: The Spoken Language」

(E. ジョーデンと共著)

<講談社インターナショナル>

尚、例会の後、先生を囲んで懇親会を催す予定。(飲食費は各自負担)

WEST TOKYO

Topic: Predictive Listening: Putting the Guess-work In
 Speaker: George Reseter
 Date: Saturday, July 16th
 Time: 2:30-5:30 p.m.
 Place: Royal Academy, behind Miuraya Supermarket near Marui, about three minutes from Kichijoji Station
 Fee: Members, ¥500; non-members, ¥1,000
 Info: Brenda Katagiri, 0422-42-7456
 Yoshihisa Kobori, 0428-24-0968

When students are asked to predict what they will hear, rather than regurgitate what's been said, two things must occur. First, hypotheses of language, communication and culture are formed. Second, a psychological stake is taken in the predictions' accuracy. This presentation demonstrates a technique through which variations in student abilities, learning objectives and aspects of language and communication are dealt with through predictive listening. This will be a heads-on as well as a hands-on presentation so the technique's applicability to many types of materials can be seen.

George Reseter (M.Ed. in TESOL, Temple University) has taught English in Japan (company and university) for 11 years.

TOYOHASHI

Topic: Pair Work and Group Work
 Speaker: Steven Maginn
 Date: Sunday, July 17th
 Time: 1:30-4:30 p.m.
 Place: Kinro Fukushi Kaikan (2F)
 Fee: Free
 Info: Kazunori Nozawa, 053248-0399
 Masahito Nishimura, 053247-1569

See KOBE above.

YAMAGATA

One-Day English Communication Seminar

Topics: 1) "I know what TPR is, but how do I begin?"
 2) *Listen and Act*
 Speaker: Dale Griffiee
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 10 a.m.-4 p.m.
 Place: Yamagata Women's Junior College
 Fee: Members and students, ¥1,000;
 non-members, ¥1,500
 Info: Yamagata JALT, 0236-22-9588
 Schedule:
 10:00-12:00 "I know what TPR is, but how do I begin?"

12:00-- 2:00 Lunch with Mr. Griffiee (You can order your lunch or bring your own.)

2:00-- 4:00 *Listen and Act* one of the textbooks written by Mr. Griffiee

Dale Griffiee, an experienced, dynamic presenter, is an expert on TPR, on songs and music, and on teaching English in Japan in general. He is the author of *Listen and Act* and co-author of *HearSay*.

YOKOHAMA

Topic: Non-verbal Communication: Messages Without Words
 Speaker: Barbara Hoskins
 Date: Sunday, July 10th
 Time: 2-5 p.m.
 Place: Yokohama Gino Kaikan (near JR Kannai Station)
 Fee: Members, free; non-members, ¥500
 Info: Jack King, 0468-71-1789

Approximately 30% of our message is conveyed through words; the remaining 70% is communicated non-verbally. This demonstration will focus on the importance of non-verbal messages in communication. We will examine types of non-verbal communication which are universal, some of which are different between cultures, and the implications of these "silent messages" in cross-cultural communication. We will also discuss ways in which we can help our students to become more effective communicators, both verbally and non-verbally.

Barbara Hoskins (B.A. in Communication, M.A. in TESL) is an instructor at the Language Institute of Japan.

YOKOHAMA SIG

TESS (July 10 as above)

Topic: Let's Use "Informal" English a Lot More
 Speaker: Masaru Makiuchi
 Time: 1-2 p.m.
 Info: Kimiko Ozawa, 045-811-2959
 Mitsui Nakano, 045-543-0437 ►

SPECIAL ONE-TIME OFFER FROM TOKYO JOURNAL

- A 30% discount off the ¥500 cover price for quantities of 10 copies and up...for use as classroom reading material. (Shipping charges apply to bulk orders.)
- On an individual basis, a subscription (only ¥5,500 per year) brings membership in the Tokyo Journal Club, which makes you eligible for discounts at many museums and theaters, and gives you access to the TJClub Lounge in the Tokyo Journal building near Yotsuya San-chome.

Send all bulk orders or subscriptions to: Mr. H. Senuma, Circulation Department
 Tokyo Journal, 27-10 San'ei-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 160, Tel: (03) 359-2331

Positions

Please send all announcements for this column to Jack Yohny (address, p. 3). The announcements should follow the style and format of the LT and be received by the first of the month preceding publication.

Notices for this column for the September issue should reach J. Yohay by July 7 or Eloise Pearson (address p. 3) by July 23.

JALT POSITION OPENINGS

Japanese Language Editor for *The Language Teacher*, the *JALT Journal*, and other JALT publications wanted immediately. To apply, please submit your CV along with a cover letter explaining your qualifications to the Publications Chair: Virginia LoCastro, Foreign Language Center, The University of Tsukuba, Tsukuba 305.

Book Review Editor for *The Language Teacher* and the *JALT Journal* wanted as of the annual conference in October. To apply, please submit your CV along with a cover letter explaining your qualifications to the Publications Chair: Virginia LoCastro, Foreign Language Center, The University of Tsukuba, Tsukuba 305.

(TOKYO area) The Publications Board of JALT seeks a dedicated, well-organized **Business Manager**. The job requires soliciting and taking charge of ads for *The Language Teacher*, the *JALT Journal*, the annual conference *Handbook*, and any future publications, and working with the printer in Osaka on the phone and through the mails to assure smooth handling and printing. The manager will need to cultivate good working relationships with JALT's Associate Members and to help attract more associate members to JALT. A daytime contact phone number and fluency in English and Japanese are necessary. This is an opportunity to do something substantial for JALT and our profession in general and to learn some new skills and gain valuable experience. Please apply to Virginia LoCastro, Foreign Language Center, The University of Tsukuba, Tsukuba 305.

Yokohama SIG (cont'd)

Schools in Japan generally teach only "formal" English. However "informal" English, sometimes intermingled with "formal" English, is essential to daily life in countries where the language is widely spoken. Furthermore, the word "informal" in English has a much more positive connotation than its direct Japanese translation. Informal expressions of English will be demonstrated and linguistically examined.

Masaru Makiuchi teaches at Keisen Women's College.

(KANAZAWA) Full-time college-level English-teaching position to open in September, 1988. Qualifications: native speaker of English; M.A. in TEFL, Linguistics, Education, or related field; teaching experience desirable. Duties: 7 freshman English classes and 1 class in basic technical and business English per week; materials development. Terms: two-year renewable contract, ¥4,097,000 starting annual salary; benefits. Please contact: Keiko Koma, Personnel Director, Kanazawa Institute of Technology, 7-1 Ohgigaoka, Non-ichi. Ishikawa 92 1.

(KUMAMOTO area) English teacher/soccer trainer with player-manager responsibilities required. Main duties: to train newly-formed youth team. Must be a competent player. Some English lessons evenings. Age 25-35 preferred. Accommodation provided. Salary: ¥200,000/month. To start September, 1988. Apply to: Mr. Imoto, IEC, 651-1 Hiokimachi, Yatsushiro 866; tel. 0965-35-3071.

(Tanabe, KYOTO) Full-time associate professor or lecturer from April 1, 1989. Native speaker of English; age around 35; to teach general English courses (conversation, composition) and specialized courses (background to American and English Literature) to undergraduate students. Field: Teaching English as a Second Language, and History of American/British Thought and Culture or related field. M.A. required; Ph.D. is highly desirable. Some knowledge of Japanese required. Participation in meetings and other college activities expected. Please send, to arrive by Sept. 30: 1) curriculum vitae with a half-length or passport photograph; 2) a list of publications; 3) copies of two publications; 4) academic transcripts; and 5) a health certificate issued by a hospital, to: Department of English, Doshisha Women's College, Kamigyoku, Kyoto 602.

(MATSUYAMA) Full-time English Conversation teacher (native speaker). Professional attitude essential. Experience preferred, plus a willingness to adapt to and use a unique teaching system. Above average working conditions; over ¥200,000/month. Sponsorship; apartment with phone, furniture, etc. Please send resume with photo to: Joshua Battain, Crossroads Language Studio, 2-9-9 Katsuyama-cho, Matsuyama 790; 0899-21-7595.

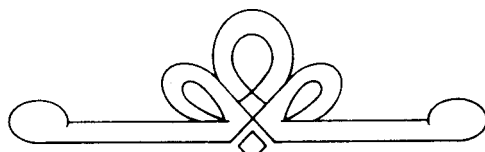
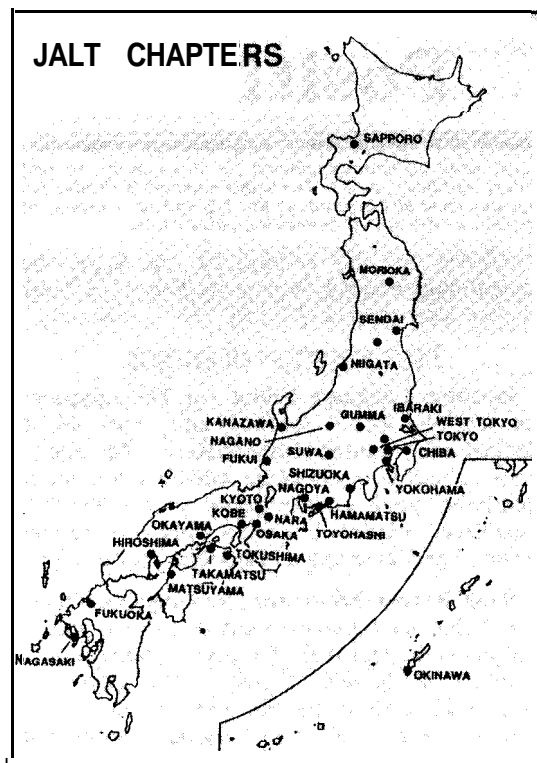
(OSAKA) English Through Drama teacher with M.A. to assume the role of a full-time member of staff or a two-year period, commencing April, 1989. The contract is not renewable. Send personal history, a list of publications/lectures, recent photo, and references before September to: T. O'Brien, Ohtani Women's College, 1824 Nishikiori, Tondabayashi 584.

(OSAKA) Native-speaker teachers of English, full-time and part-time, from September, 1988. Minimum two years' experience in Japan. Degree required. One-year contract, renewable. Salary: ¥3,600,000-4,200,000/year, plus benefits. Positions will be filled by July 31. Send letter of application and resume to: Personnel Office, Sundai Gaigo Semmon Gakko, 2-5-18 Terauchi, Toyonaka 5 60.

(OSAKA) Full-time female English language teachers at technical college starting immediately. Degree, TEFL qualification, and at least two years' teaching experience necessary. Please phone to arrange for an interview: Mr. Usui, 06-629-3453.

(SEOUL, Korea) Immediate full-time openings for native speakers of English. Salary is very competitive for Seoul area. Requirement: M.A. in TESOL or related field. Benefits: partial housing, partial health insurance, round-trip airfare, four-week paid vacation. Please send resume to: Susan Gaer, English Training Center, 646-22 Yoksam-dong, Kangnam-ku, Seoul 135, Korea.

(YOKOHAMA) Full-time lecturer(s) wanted for prestigious junior college. Advanced degree in TESL, political science, anthropology, or related field required. Beginning April, 1989. Excellent working conditions, salary. Some Japanese ability necessary. Two- to three-year commitment. Submit detailed resume to: Richard Ragains, LIC, 2-15-1 Dogenzaka, Shibuya-ku, Tokyo 150, by July 31. Tel. 03-476-1051.



JALT からの お知らせ

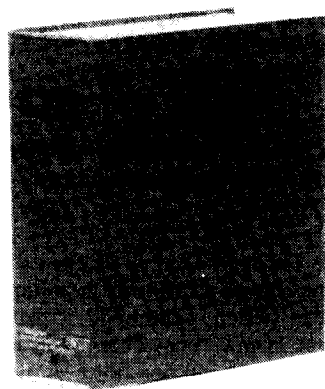
GET YOUR BINDERS FOR The Language Teacher NOW!

Each binder keeps a full year's set in perfect condition.

The Language Teacher 特製ファイルは 1月号から12月号の年間12号分をつづることができます。

特製ファイルを購入したい方は、綴込みの郵便振替用紙を使って、JALT事務局までご送金下さい。

To order yours, use the postal *furikae* found in this issue listing the number of binders desired in the large memo space.



	Number/ 冊数	Price each/ 単価
Price incl. shipping	1	¥940
料 金 (郵送料込み)	2—4	¥875
	5+	¥850

TESOL Publications is pleased to announce

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4

Selected Articles from
the TESOL Newsletter
1966-1983

Edited by John F. Haskell

Contains more than 100 articles in the areas of
Methodology, Professional Preparation, Language and
Culture, Linguistics and Grammar, Standard English as a
Second Dialect, Language Assessment, Composition,
English for Special Purposes, Reading and Vocabulary,
Classroom Practices and more.

Includes index of Newsletter articles by issue.

¥2,700 including postage and handling. Use the
postal furikae form found in this issue.

T E S O L

1118 22nd Street, N.W., Washington, DC. 20037
U.S.A.

MEMBERSHIP INFORMATION

JALT is a professional organization dedicated to the improvement of language learning and teaching in Japan, a vehicle for the exchange of new ideas and techniques and a means of keeping abreast of new developments in a rapidly changing field. JALT, formed in 1976, has an international membership of some 3,000. There are currently 31 JALT chapters throughout Japan. It is the Japan affiliate of International TESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages) and a branch of IATEFL (International Association of Teachers of English as a Foreign Language).

Publications - JALT publishes **The Language Teacher**, a monthly magazine of articles and announcements on professional concerns, and the semi-annual **JALT Journal**. Members enjoy substantial discounts on **Cross Currents** (Language Institute of Japan) and **English Today** (Cambridge University Press). Members who join IATEFL through JALT can receive **English Language Teaching Journal**, **Practical English Teacher**, **Modern English Teacher**, and the **EFL Gazette** at considerably lower rates.

Meetings and Conferences - The **JALT International Conference on Language Teaching/Learning** attracts some 1500 participants annually. The program consists of over 250 papers, workshops and colloquia, a publishers' exhibition of some 1000 m² an employment center, and social events. **Local chapter meetings** are held on a monthly or bi-monthly basis in each JALT chapter. JALT also sponsors special events annually, such as the Summer Seminar for secondary school teachers, and regular In-Company Language Training Seminars.

Awards for Research Grants and Development - Awarded annually. Application must be made to the JALT President by September 1. Awards are announced at the annual conference.

Membership - Regular Membership (¥6,000) includes membership in the nearest chapter. **Joint Memberships** (¥10,000), available to two individuals sharing the same mailing address, receive only one copy of each JALT publication. **Group Memberships** (¥3,600/person) are available to five or more people employed by the same institution. One copy of each publication is provided for **every five members** or fraction thereof. **Associate Memberships** (¥5,000) are available to organizations which wish to demonstrate their support of JALT's goals, display their materials at JALT meetings, take advantage of the mailing list, or advertise in JALT publications at reduced rates. Application can be made at any JALT meeting, by using the postal money transfer form (yubin furikae) found in every issue of *The Language Teacher*, or by sending a check or money order in yen (on a Japanese bank) or dollars (on a U.S. bank) to the Central Office.

Central Office: Kyoto English Center, Sumitomo Seimei Bldg., 8F., Shijo Karasuma Nishi-im, Shimogyo-ku, Kyoto 600; tel. (075) 221-2376. Furikae Account: Kyoto 5-15892. Name: "JALT"

JALT — 全国語学教育学会について

JALT は、語学教育のために、最新の言語理論に基づき、より良い教授法を学ぶ機会を提供し、日本における語学学習の向上と語学教育の発展を図ることを目的とする学術団体です。現在、日本全国に約3,000名の会員を持ち、英語教師協会 (TESOL) の加盟団体、及び国際英語教師協会 (IATEFL) の日本支部として、国際的にも活躍しています。

出版物: 上記の英文記事を参照。JALT 会員、或は IATEFL 会員には、割引の特典がある出版物もあります。

大会及び例会: 年次国際大会、夏期セミナー企業内語学セミナー、各支部の例会等があります。

支部: 現在、全国に31支部あります。(札幌、盛岡、仙台、山形、茨城、群馬、大宮、千葉、東京、西東京、横浜、新潟、金沢、福井、長野、諏訪、静岡、浜松、豊橋、名古屋、京都、大阪、神戸、岡山、広島、徳島、高松、松山、福岡、長崎、沖縄)

研究助成金: 詳細は JALT 事務局まで。

会員及び会費: **個人会費** (¥6,000) - 一般寄りの支部の会員も兼ねています。**共同会員** (¥10,000) - 住居を共にする個人2名が対象です。JALT の各出版物が、2名に対し1部しか配布されないという事以外は個人会員と同じです。**団体会員** (¥3,600 - 1名) - 同一勤務先に勤める個人が5名以上集まった場合に限られます。5名毎に、JALT の出版物が1部配布されますが、端数は切り上げます。**賛助会員** (¥50,000) - JALT 活動を支援するための寄付として会費を納めて下さる方、或は年次国際大会や例会等で、出版物の展示を行ったり、会員名簿の配布を受けたり、又、JALT の出版物に低額の料金で広告を掲載することを希望する方が対象です。

入会申し込み: 申し込みの郵便振替用紙(口座番号 - 京都 5 - 15892、加入者名 - JALT)を利用して下さい。例会での申し込みも受けつけています。

JALT 事務局: 〒600 京都市下京区四条烏丸西入ル 住友生命ビル8F 京都イングリッシュセンター内

☎075-221-2376

担当

中村

友美

NEW!

LONGMAN CLASSICS



The great classics of literature and the best in children's fiction,
beautifully retold in easy English and illustrated in full colour.

Bring literature to life!

For more information and a full list of titles please write to Heather Saunders or Mike Thompson at
Longman ELT Longman Penguin Japan Company Ltd., Yamaguchi Building,
2-12-9 Kanda Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101. Tel. (03) 264 2814.

Longman 



**Cambridge
ELT**

Cambridge Professional English

Company to Company

A new approach to business correspondence in English

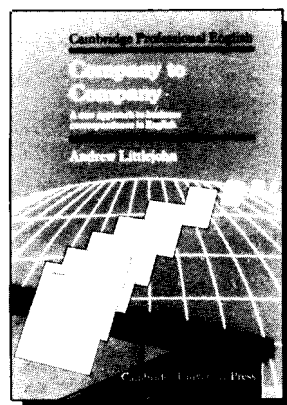
Andrew Littlejohn

NEW

Company to Company is for professionals, trainee professionals and students in business, commerce and administration who need to write letters and telexes in English. It is particularly suitable for learners at lower-intermediate and intermediate levels, but more advanced learners who are unfamiliar with business letters will also find it useful.

Company to Company:

- adopts an interactive task- and discussion-based approach
- presents and practises the conventions and expressions used in modern business correspondence
- includes study sections which deal with Important functions of business letters, e.g. asking for information, complaining, apologising
- provides activity sections which involve learners in group discussions and business decisions
- contains a wide range of model letters
- can be used for reference and self-study outside the classroom



The Teacher's Book provides answers to all exercises and detailed guidance for both study and activity sections.

Titles already available in the series are:

Telephoning in, English

B. Jean Naterop and Rod Revell

will gladden the hearts of those who have never found just the right amount of material on this topic.' *EFL Gazette*



Business Listening Tasks

Patrick Hanks and Jim Corbett

'A very serious business focus that will not however undo a teacher unfamiliar with business terms.' *TESOL France News*

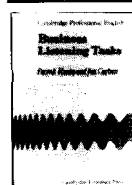


Business Reports in English

Jeremy Comfort, Rod Revell and Chris Stott

an excellent book.'

The Language Teacher



For further information on all Cambridge ELT publications, please contact
Steven Maginn, Cambridge ELT Office,
c/o U.P.S. Ltd., Kenkyu-sha Bldg.,
9 Kanda Surugadai 2-chome,
Chiyoda-ku, Tokyo 101.
Tel: (03) 295-5875

CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS

¥350